
ヴァストークの歌姫

光太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァストークの歌姫

【Nコード】

N8618E

【作者名】

光太郎

【あらすじ】

かつて、西のザーパト、東のヴァストークの間で起きた、六年に渡る戦争。その戦争で多くの人間を殺した少女は、ヴァストークの歌姫と呼ばれた。大戦終結から五十九年——いまになって、歌姫が生きているという噂が流れるが——哀しき歌姫をめぐる、長編ファンタジー。

少女

少女は歌った。

歌うことしか知らなかった。

歌うことがすべてだった。

それがもたらす意味など、考えようとしなかった。

そして、少女は裁きを受けた。

「か、かかか、金を出せえ！」

滑稽なぐらいに震えた声が、店内に響き渡った。

ブラン大陸の中央に位置する、商業都市メラン——そのメインストリートに堂々と店を構える、ファミリー向けの高級衣料店『プラティーン』。店内にいる従業員スタッフは十名ほど、客はその倍以上にもなる。

男は、刃渡り十センチほどの短剣を、一人の女性客に突きつけていた。真っ白の襟巻きを首に巻きつけた、ふくよかな初老の女性だ。

男は、その襟巻きで首を締めつけるようにして、刃をあてている。

声も出せず、人質の女性はいまにも気を失いそうだった。厚化粧の上からでもわかるぐらいに、完全に色を失ってしまったている。

客も従業員も、息を飲んでそのまま動きを止めた。店から逃げ出そうとするものはいない。へたに目立って、標的にされたのではたまらない。

「は、早くしろ！ そのの、金髪の店員！ 店中の金を、カカ、カバンに詰める！ 金髪以外は動くなよ……ちよつとでも動いてみる、この客、こ、殺してやるからな……！」

震えた声で指示を出し、大人が一人余裕で収納できそうなショルダーバッグを投げ渡す。不幸にも指名されてしまった、ブランドの若い店員が、戸惑いながらもカウンターへ向かった。研修の際、こういった手合いには逆らうなと教育を受けた。ここはおとなしく、いわれるままに金を渡し、人命を最優先すべきだ。売り上げナンバーワン衣料ブランド『プラティーン』の名声にも関わる。

息を飲むような沈黙が、店内を支配した。札束をバッグに詰める静かな音だけが、妙に響き渡る。

「……っ」

緊張に耐えかね、人質の女性がとうとう気を失った。全身の力が抜け、そのまま全体重を男に委ねる。

「おわ！ 危ね！」

うっかり首を切りそうになったらしく、男が情けない声をあげた。左手で抱えるようにして、もう一度短剣を首元にぴたりとあてる。

「——もし良ければ……」

静まった店内に、テンションの低い男の声が割り込んだ。

犯人はもちろん、客も従業員も、そちらに注目する。よれた白いロングコートを羽織った、高級衣料店に似つかわしくない若い男が、億劫そうに両手を上げた。

「人質、俺が変わるけど。このとおり、丸腰だし敵意もない。栄養不足で非力だし、昨日寝るの遅かったんで、寝不足で眠いし」

提案自体は称賛に値するものであるにもかかわらず、完全に緊張感のない、ゆるりとした口調だった。しかも、アピールポイントがずれている。

犯人の男は、目を瞬きながら、めまぐるしく頭を働かせた。

「そっちだって、いざってときに人質が気絶してるんじゃない、困るんじゃないの」

追い打ちをかけられ、男は鋭く舌打ちした。女性に突きつけていた短剣を、より強く、食い込むほどに握り直す。

「だったら若い女だ。おまえみたいなイキの良さそうな男、人質にできるか！」

それはまったくそのとおりだった。息を殺してやりとりを観察していた面々は、納得して、それとなく視線をはずす。目が合って、指名でもされたらおしまいだ。

再び、店内に沈黙が落ちる。もう犯人にもの申す人物はいなかった。黙々と金を詰め続ける店員以外、だれ一人として動かない。

モノトーンで統一された近代的な店内は、見通しが良く、あちらこちらに鏡が置かれていて、隠れて何かをするのには決定的に向いていなかった。盗難防止を目的とした設計のはずなのに、いまでは犯人が周囲を監視するのに役立ってしまったている。客も従業員も、そのことを充分にわかっていたので、動けないでいる。

不意に、ベルが鳴り響いた。

防犯ベルの類ではない。もっと小さな、ささやかな音だ。音の方向に視線が集まる。その先には、カーテンで仕切られた試着室。

もう一度、ベルが鳴った。いちばん近くにいた男性店員が、戸惑ったようにちらりと犯人を見る。

「なんの音だ」

店の客ではない彼には、わからなかった。店員は、恐る恐る答える。

「し、試着を終えたお客様が、私どもをお呼びのときに鳴らされるベルでございます」

緊張のあまり、変な敬語になった。

「……試着だ？」

眉根を寄せた。この状況がわかっていないとしか思えない。

「どんな客だ」

「たしか……若い、女性のお客様で」

ならば、そいつを新しく人質にしてやるのもいいか——男は考えた。こんな状況でベルを鳴らすようなやつだ、頭のネジが緩いに違いない。

そいつを連れてこい、というおうとした。しかし、それよりも若干早く、試着室のカーテンが勢いよく開かれた。

「ちよつと、さっきから呼んでんだけど」

苛立ちを露わにして現れたのは、十代半ばほどの少女だった。肩までの黒髪、ぴったりとしたシャツに革製のミニスカート、そこから伸びたすらりと長い足。出るところは出ていないが、引っ込むところは引っ込んだスレンダーボディ。

意志の強そうな大きな瞳を、まっすぐに——人質をとっている犯人ではなく、それよりも手前にいる店員に向けた。

「ここの服好きなんだけどさ、いちいち『プラティーン』ってロゴ入るの、どうにかならないの？　そういうブランド志向ってどうかと思う」

不平を洩らし、試着室から出ると、店員に衣類の山を渡した。

「でも買う」

買うのかよ、と店員は思った。声に出して突っ込む空気ではなかったが。

「あ、あの、お客様……」

いいにくそうに言葉を濁し、どうにか目で合図する。ばっちんばつちんとウィンをくり返す。空気読んで、の合図。

「まばたき体操？」

伝わらなかった。

「その女！　こ、こっちへ来い！」

男は、人質に刃を突きつけた状態で、少女に向き直った。

「なんで？」

「なんでって！」

ぐい、と気を失ってる人質を見せつける。これでもかと人命危機をアピール。

「おじさんさあ、空気読んだら？」

少女は、自分よりも背の高い男を、見下ろすようにして見上げた。考えられない構図だが、顎を上げた高圧的な様子が、まるで見下ろしているかのように見える。

むしろ空気を読んでいないのは少女なのでは、と思うものも少なくなかったが、だれも何もいわずにやりとりを見守るのみだ。

「おじさん、これが初犯でしょ。どうなの、このまったくなくてない感じ。成功すると思ってる？　こんな高級店でさ、そんな刃物一本で、強盗なんてうまくいくわけないじゃん」

まったく恐れる様子もなく、少女は歩みを進め、男のすぐ目の前で立ち止まった。

「それに、この人質さんとなんの関係もないから、脅されてもピンとこない」

「お、おまえ……！　オレはやるぞ、本当に刺すぞ！」

「どぞ」

少女は肩をすくめた。笑みさえ浮かべてみせる。

かっとな男の頬が紅潮する。彼は、自分の注意が完全にこの少女に向いてしまっていることに気づいていなかった。

「……じゃ、この隙にってことで」

犯人の背後には、いつの間にか、白いコートの男が立っていた。

先ほど、人質交換を提案した男だ。見た目どおりのゆるいテンションながら、意外にも力強く、犯人を羽交い締めにする。

人質の女性が、そのまま床に倒れた。

「あ、て、てめえ！」

形勢逆転、かのように思えた。

「危ない！」

だれかが叫んだ。白いコートの男の背後で、刀身が光る。一般客を装っていた若い女性が、ナイフを低く構え、突っ込んできていた。「――！」

だれよりも早く、少女が反応した。白いコートの端をつかみ、力任せに引っ張る。犯人と、それを捕らえている男とが、まるごと前のめりになる。

入れ替わるように、質量を感じさせない素早さで、少女が刃の前に躍り出た。全体重を手の中の小さな武器に預けていた女性は、標的が変わったことに気づいても、止まれるはずもなかった。身体ごとぶつかり、呻くような音をたて、少女の腹部に刃が埋まる。

「……あ……」

柄を手放し、自分のしでかしたことの大きさに、彼女はゆっくりと後ずさる。小綺麗にした、妙齡の女性だ。犯罪に手を染めるようには見えない、品のある衣類に身を包んでいる。ただ、丁寧に化粧のされたその顔は、いまや蒼白になり、全身を震わせていた。

少女は、自分の腹部を見下ろした。洋服の飾りのように、ボタンとボタンの間から、短剣の柄が飛び出ている。黒いシャツに、じわりと染みが広がる。

「あーあ。人質を取ってお金を要求するまでは、かわいいもんだったのね」

驚いたことに、少女はまるで痛みを感じさせない様子で、困ったように眉を上げた。

だれもが動けず、見守るなかで、ゆっくりと歩を進める。なおも震え続ける女性の両手をつかみ、もう一度、柄を握らせた。

「ここまでやったら、冗談じゃすまないよ。――わかる？ お金欲しさにそっちのおじさんと企んだんだろうけどさ、強盗と、これとじゃ、重みが違う」

女性は、ナイフから手を離そうとした。しかし、上から力強く抑えつけられ、離すことができない。少女はその手に、さらに力を込

めた。より深く、自身のなかへ、刃を押し込む。

「――ひ……」

「なに？ 殺したいんでしょ？ 殺せば？」

「ち、ちが……」

大きく見開かれた瞳に、涙が溢れる。唇を震わせ、懸命に首を左右に振る。

「ちがう？ 何が違うの？」

「そのくらいにしといたら」

白いコートの男が、少女の手をつかんだ。女性はすぐに両手で顔を覆い、その場に崩れ落ちる。

だれかが通報したのか、店内に青い制服の男たちがなだれ込んできた。ブラン大陸の治安を守る、ジャスティスの面々だ。安心してゐる男と、泣き崩れる女性とを数人で取り囲み、そのまま連行していく。

数人残ったジャスティスが、安全が確認されるまで、一度店を閉めるように指示を出した。店員や客たちに事情を聞き、店内を点検していく。危険物の類が仕掛けられていないとも限らない。

少女が刺された、彼女を助けなければと、人々は口を揃えていった。しかし、刺されたはずの少女は、試着していた衣服数点と共に、いつの間にか姿を消していた。

ブラン大陸に十二の店舗を持つという、『カフェ・ジョカットロ』は、どの町で入っても内装とメニューが統一されているのが魅力だ。町の風情を楽しめないという否定的な声もあるものの、少女のように町から町へ旅をしているものにとっては、数少ない心休まる場所であることは間違いない。トイレが清潔で、広いというのもいい。

「失敗した」

つぶやいて、少女はそのトイレから姿を現した。

腹部を隠して入店したものの、ナイフを突き刺した状態でのんきにランチをするわけにもいかない。とはいえ、メランほどの規模の

町では、路地裏で着替えるのも気が引ける。

結局、トイレでこそそと着替える羽目になった。相変わらずのミニスカートの細身のシャツ、ロングブーツという代わり映えしない格好ではあったが。

「まだ新しかったのにな」

毒づきながら、カウンターでカフェラテとハムサンドを注文し、適当な席に座る。まったく、今日はついていない。衣服の補充を、と思っただけなのに、強盗に出くわすとは。さらに腹を刺されるなんて、厄日にもほどがある。

木製の丸テーブルに、だらしなく肩肘をついて、ハムサンドにかぶりつく。ちょうどそのときに、後ろから声をかけられた。

「ご一緒しても？」

若い男の声だ。昼時とはいえ、ほかにいくらでも席が空いている。少女はあからさまに嫌そうな顔をして、ふり返る。

そこに立っている人物を見て、さらに眉間に皺を寄せた。白いコート、長身の男だ。強盗事件の際に、店にいたのを覚えている。

「いや」

簡潔に答えた。

しかし男は、返答は気にせずに、向かい側の椅子をわざわざすぐ隣に持ってくる、テーブルにコーヒークップを置いて当たり前のように腰を下ろす。

「……いや、っていったんだけど」

「傷は？」

まるで無視だ。少女の腹部をまじまじと見る。

「ちょっと」

あまりの凝視っぷりに、少女の方が椅子を下げる。しかし男は意に介さず、それどころか身を屈めて腹部に顔を近づけると、べろんとシャツをめくり上げた。

「おおっ？　っと、ちょ……っ」

羞恥心からくる悲鳴よりも、驚きの声が勝った。ワンテンポ遅れ

たものの、男の後頭部をげんこつで殴りつける。

「傷がない」

殴られてなお、男はシャツをつかんだままだった。少女の、あまり肉付きがいいとはいえない腹部が、露出されている。白い肌、小さなヘソ——そのどこにも、さきほど刺されたはずの傷は見たらなかった。

「ちょっとおにーさん、ジャスティス呼ぶよ。なんなの、痴漢なの？ 変態？」

少女はむりやりシャツをぐいと下げ、男の髪をつかんで持ち上げる。それでも男は譲らなかった。

「傷は？ 君はさっき、俺をかばって刺されたはずだ」

眠そうなタレ目が——とはいえ、いまは真剣味を帯びてはいたが——見上げてくる。その瞳に映し出された自分の表情が、思ったよりも狼狽していることに気づいて、少女は彼を突き飛ばした。目を逸らし、椅子ごと男の反対側に移動する。ハムサンドとカフェオレの乗ったトレイも引き寄せた。

「かばったつもりないから、気にしないでよ。傷がないのは、あたりまえ。最初から刺されてないもん。手品ってやつ」

つまらなそうに吐き捨てる。男がこちらを見ていることがわかったので、あえて視線を合わせた。

「命の恩人とか思って、わざわざ追ってきたの？ 気にされるほうが迷惑」

「リストII グランデ、二十二歳。魔法学の研究をしている」

話の流れを完全に無視して、男は唐突に名乗った。一瞬、それが自己紹介なのだということがわからず、少女は目を白黒させる。

「……は？」

「君は？」

しかも、当然のように促される。少女は眉を寄せた。

「……なんで名乗らなくちゃいけないの？」

「名乗られたら、名乗り返すのが礼儀だよ。知り合っただから、

お互いの名を知っておいてもいいんじゃないかな」

なんだこいつ、と少女は思った。見るからに低いテンションで、眠そうにのらりくらりと話すのに、折れる気配がない。きっとこのまま押しとおす気だ。

適当にやりすか、いつそ無視しようか——ちょっと考えたが、もう考えるのも億劫になった。名乗ったからといって、どうなるものでもないだろう。

「……アエル。アエルⅡイーリス、歳は十六。職業は場合によってイロイロ。現在は旅人中」

投げやりに情報を吐いた。白コートの男——リストは、何が嬉しいのか満足そうに笑んで、さらに質問を重ねた。

「旅は一人で？」

いい加減面倒になって、アエルはこれ見よがしにため息を吐き出した。

「なんなのさっきから。それ、知ってどうすんの？——あ、もしかして、おにーさん……」

身を引くようにして、眠そうなタレ目をじっと見つめた。

「……ロリコンなの？」

「ロリ……」

思ったよりも大きなダメージを与えたようだった。リストは右手を額に当て、天井を仰ぐ。

「……コンじゃないよ。これでも心に決めた女性がいるんだ」

「聞いてないけど、そんなこと」

「アエル君、どうしてそう冷たいの。ちょっとおにーさんとお話しようよ」

これでもかという胡散臭いセリフをさらりと口にされ、アエルは背筋が冷えるのを感じた。

「『おにーさんとお話ししようよ』……」

思わずくり返す。

「え、どうかした？」

「知らない人と話すことなんてアリマセン」

「なるほど」

つぶやいて、考えるように黙り込む。ちょっと待っててといい残し、カウンターで何やら注文すると、チョコレートパフェを片手に戻ってきた。

「これ、お礼の気持ち。君はかばったんじゃないっていったけど、俺にしてみれば年下の女の子に助けてもらったってことになるんだ。俺だけじゃなくて、店にいたひとはみんな感謝してるよ」

アエルは、リストを見上げた。

「どうやら、本当に感謝してくれているようだ。胡散臭さは拭えないものの、悪人ではないのかもしれない。」

「こんなこというのって、自分でもどうかと思うけど」

チョコレートパフェを受け取り、食べ始めながら、アエルはそう切り出した。

「あたし、苺パフェの方が好き」

「……………」

リストは、もう一度席を立った。

小さな丸テーブルの上には、空のグラスが六つ並んでいた。

「やっぱり苺パフェが一番かな」

チョコレートパフェ、苺パフェ、ヨーグルトパフェ、フルーツパフェ、小倉パフェ、モカパフェ——『カフェ・ジヨカットロ』のパフェメニューを一人で制覇して、さらりと出てきた感想がこれだ。いったいその華奢な身体はどこに収納されたのだろうと、リストは生命の神秘に思いを馳せた。

「ありがとう、おにーさん。ここのパフェ、一度に全部食べるの夢だったんだよね」

「……喜んでもらえてなにより」

黙々と食べ続けるアエルとは対照的に、リストはコーヒーを一杯飲んだだけだった。目の前で大量に食べられると、かえって食欲が

減退するものだ。

「魔法学の研究って、どういうことするの？」

おごつてもらったことで、幾分機嫌が良くなっていたアエルは、自分からそんな世間話を切り出した。

「どうしたの。お話ししてくれる気になった？」

「夢を叶えてもらっちゃったからね」

ギブアンドテイク。まるでお小遣いをあげて付き合い合ってもらってるおじさんみたいだな、と思いながらも、リストは話し始める。

「そのままだよ。魔法について研究してる。分野は様々だけど、俺がいま研究してるのは、魔法の解除に関する魔法学——知ってるかな、解呪の妙薬が調合できるって話」

ぴくりと、アエルの眉が動いた。

「……解呪？」

「そう、解呪だ」

食いついてきたことに、にやりと笑みを見せる。コーヒーで喉を潤して、リストは続けた。

「文字通り、呪いを解くことのできる妙薬だ。どんな高位の魔法士がかけた魔法でも、その薬一つで解除できるっていう話だね。ヴァーストークの薬師が調合に成功したっていう噂があるんだ。魅力的だと思わない？」

アエルは、話の内容を、頭の中で注意深く整理した。ここは慎重になるべきだった。

「興味はある。魅力的かって聞かれると、どうかな。おにーさんは、その薬のどこに魅力を感じるわけ？」

「それを語り出すと丸一日じゃ足りないけど」

「じゃあ、いい」

アエルはあっさりと引き下がった。冷たいなあ、と悲しげな顔をされたが、知り合ったばかりの男のロマンをたらたらと聞く趣味もない。

「とはいえ、まだ噂の段階だね。真偽を確かめるために、ヴァースト

ークに行くところさ」

アエルは無言で、リストの目を見た。真意の読めない目だ。世間話として聞き流せばいいのか、それとも裏の意味を疑うべきなのか――表情には出さないよう、注意深く挙動を観察する。

ここブラン大陸と、その周囲にある六つの島は、合わせてザーパーと呼ばれる。地域名、民族名、どちらとしても使われる呼称だ。対して、ザーパーよりも東に位置するケリー大陸と三の島から成るのが、ヴァストーク。どのだれが始めたことなのか、アエルにとってはどうでもいいことだが、この二つの民族間では、太古の昔より争いが絶えなかった。

大規模な戦争がやっと集結し、形上「和解」したのが五十九年前。それ以降も、一触即発とはいわないまでも、冷ややかな関係が続いている。

そのヴァストークへ、行くというのだ。決して、旅行感覚でひよといと行ける場所ではない。

「噂の段階なら、やめといたら？ あたしがとやかくいうことじゃないけど」

世間話の延長として、そう提案する。普通の人間なら、まずこういうはずだ。

「行くよ。信憑性がないわけじゃない。さすがに一人で行く勇氣はなくてね、パートナーを探してるところだけだ」

リストは、そういつて邪気のない笑顔を見せた。アエルは内心、来た、と構える。ただの偶然ではない可能性が、膨らんでいく。

「見つかりそう？」

動揺は押し隠して、尋ねた。もともと細いタレ目をさらに細めて、彼はうなずいた。

「申し分ない度胸。軽い身のこなし。旅をしてるってことは、腕に覚えがあるんだろう？」

「そうでもないけど」

しかし、リストは引き下がる気はないようだった。身を乗り出す

ことはせず、背もたれにゆつくりと体重を委ね、なんでもないことのように提案した。

「君が、もしも解呪の妙薬に興味があるなら、俺に雇われてくれな
いかな」

アエルは黙った。

結局のところ、そう話を持ちかけられてしまっでは、彼女が断る
はずはないのだ。

「どう？」

「……報酬は？」

それはもう、ほとんど承諾を意味しているといっただけだった。リ
ストは、テーブルの上に右手を差し出す。

「君が望むだけのものを。——どうぞよろしく、アエル君。いい旅
ができそうだ」

アエルは不機嫌そうに目を細め、それでも一応、右手を握り返し
た。

＊

二人の旅人がアウレーのカフェで手を取り合うよりも、少し前。
ブラン大陸と六の島——ザーパトにおいて、絶大な権力を誇る組
織、『希望の国コスモス』では、ある情報が駆けめぐっていた。

希望の国とはいえ、実際には国ではない。そもそもザーパトは、
町一つ一つが自治を行い、お互いが交流を持ちながら、『ザーパト』
というまとまりを保つ連合体制だ。国というものは存在しない。希
望の国コスモスとは、だからこそあえて『国』という呼称を持つ組
織名だ。

コスモスとはどういった組織なのかを説明するのは、実に難しい。
尋ねたところで、ザーパト人のほとんどが、なんでもやっている組
織、という答え方をするだろう。

いまから七十年前、現在でも最高責任者の地位を担うカメロスⅡ

ガナドールによって設立された。設立から五年後に勃発した戦争の際に、様々な物資の開発、売買を通じて、急成長を遂げた組織だ。現在では、商業組織であり、研究組織であり、人材育成組織でもある。高級衣料店『プラティーン』も、ブラン大陸に十二の店舗を持つ『カフェ・ジョカットロ』も、経営しているのは希望の国コスモスだ。さらには、ブラン大陸の治安部隊である『ジャステイス』が存在し得ているのも、コスモスからの多額の寄金があるからだといわれている。

ともかく、すべてを書き出せばきりが無いほどに、各方面に触手を伸ばしている。もしもこの組織がなくなるようなことがあれば、ザーパーはいまの状態では無理だろう。

コスモスは、カメロスⅡガナドールの息子、ティグレルⅡガナドールを組織長とし、その下に四の階級を有する。順に、アインス、ツヴァイ、ドライ、フィーアの四つだ。それぞれ色分けされたバッヂをつけることが義務づけられている。

「ヴァストークの歌姫が？」

噂を聞きつけた一人が興奮して語るのを、のんびりと最後まで聞き、男はばかにしたように鼻を鳴らした。胸にはくすんだ白いバッヂがぶら下がっている。上から三つ目の階級、ドライの証だ。

「アインスの連中が話してるのを聞いたんだ、間違いねえよ」

冷たく聞き返されたのに、興奮冷めやらぬ様子で、男が身を乗り出した。ここは、ブラン大陸西部、アウレーの町にあるコスモス本部内の休憩室だ。だだっ広い部屋に、四角く味気ないテーブルが整然と並んでいる。部屋の隅には、だれでも自由に飲み食いができるように、飲料と菓子の類が収納された大きな棚が一つ。その隣の背の低い棚には、専門的なものから娯楽に関するものまで、あらゆる雑誌が詰め込まれていた。

グラスとビンをトレイに乗せて、女性がそこへ合流した。向かい合って座る男二人にグラスを渡し、コスモス印のビンから水を注ぐ。それから自身も、椅子に腰を下ろした。

「わたしもそれ、聞いたわ。同じ寮の子が噂してた。ヴァストークの歌姫が生きていて、しかもザーパトにいるらしいって」

「だろ？ ほら、エイラも聞いてるんだ、こりゃ信憑性あるぞ」

「わたしが聞いたからって、信憑性があるってことにはならないわよ」

金髪の気の強そうな女性——エイラ——ミリシアにそうあしらわれ、男はつまらなそうに眉を寄せた。もう一人の男の方も、エイラに加勢する。

「所詮は、噂だろ。上のお偉方ならともかく、おれらにはそういうのは聞かされないよ。仕事に直結しない限りな」

「いや、でもどうやら、探させてるらしいんだ。ドライの中でも、直に命令受けたやつがいるんじゃないかって話でさ」

「だったら、噂じゃなくて、ちゃんと知らされるはずよ」

グラスを弄びながら、エイラが冷静に告げる。男はやっと、興奮状態から本来の自分を取り戻しつつあるようだった。そうか、そうだよな、とつぶやく。

「だって、ばかげてるわよ。ヴァストークの歌姫っていえば、戦後に——それこそ五十九年も前だわ——大罪人として裁かれたはずでしょう。それが、裁きから逃れて、ザーパトで元気に歌ってる、だって。だとしたら、もうお婆さんだわ。本当だとしても、どうしてそれがいまさら噂になるのよ、ばかばかしい」

不機嫌ともとれる調子で、エイラが吐き捨てる。気圧されて、男二人は思わず黙った。そのようにいわれてしまえば、確かにそうに違いないという気になる。

半分ほど残っていた水を一気に飲み干し、エイラは音をたててグラスを置いた。まるで水で酔っぱらったかのようだ。こちらを見ている二人の男に、半眼を向ける。

「くだらないこといってないで、さっさと仕事に戻りなさいよ。それが本当でも嘘でも、どうせわたしたちドライには関係のないことなのよ」

理由はわからないが、この話題が彼女を不快にさせてしまったことだけは確かなようだった。二人は自分のグラスと空きビンを手にして、イエス、サー、と真面目くさった顔で返事をし、休憩室から出て行った。

無駄と思われるほどに広い休憩室に、エイラだけが残った。彼女は、しばらくそのまま黙って座っていたが、ほかにだれも訪れる気配がないのを確かめると、紺色のジャケットの内側から小さな丸い物体を取り出した。

直径十センチほどのそれは、中心に向かって緩やかに曲線を描き、見た目にはレンズのようだった。とはいえ、よく見ると、透明なガラスでできているわけではないようだ。金属めいた輝きを放っている。光の加減で、赤にも黄にも青にも変化した。

それともう一つ、やはりジャケットの内側に手を入れて、小さな球体を取り出す。こちらはビー玉ほどの大きさしかない。色は黒。つるりとした材質だが、あまり美しいとか綺麗とか、そういった印象を与えるタイプのものではない。

エイラはその球体を、手のひらで隠すようにして、口元まで持ち上げた。そうして、小さく息を吸い込む。

「——ご執心のお姫様、もうコスモス中で噂になってるわよ。本格的に動き出したみたいね。こんなことで大丈夫なのかしら？」

だれにも聞こえないほどの——それこそ、黒い球体にさえ届けばいいというような——小さな声で、そっと囁いた。

エイラは、左手にレンズを持った。右手の内に隠した球体を、ごく何気ない仕草で、レンズに押し込む。

ただそれだけの動きで、確かにそこにあったはずの黒い球体は、姿を消していた。まるで、レンズに吸い込まれたかのように。レンズは、一度だけ黒く怪しく光り、それから色を失った。もう、光の加減で色を変えということもない。

エイラはレンズをしまい込み、億劫そうに金の髪をかき上げて、席を立った。

襲撃

ヴァストーク側へ渡るには、どうしても航海の必要がある。ザーパトとヴァストークの間には広大な海が横たわっていて、いくら迂回しようとも陸続きにはなっていないのだ。古来から二大陸の間に親交がほとんどなかったのは、この海——闇海によるところも大きいだろう。

闇海には、陸上では絶滅した類の凶暴な生物が住み着いており、その航海は決して楽なものではない。戦争終結後も交易が盛んでないのは、関係があまり良くないからというものもあるんだが、決定的に便が悪いのだ。人の行き来が少ないのも、同様の理由がある。

「ベイスへの馬車は、明日の朝にならないと出ないみたいだ」

メランの観光案内所から顔を出したリストに、アエルは心底嫌そうな顔をした。ベイスというのはブラン大陸一の港町だ。ヴァストーク側、ケリー大陸への船はそこからしか出ていない。

「やっぱりベイスなの？」

明日の朝、ではなく、ベイスが引つかかっているようだ。案内所の入り口正面の階段に、行儀悪く座り込んでいたアエルは、リストが自分を追い越しても立ち上がるうとしなかった。

「他のルートにしてよ。おにーさん、研究してるんだから、頭いいんでしょ」

「頭良くて、もうしようもないな。ベイスはいい町だよ？」

「頭いいってのは否定しないんだ」

伸びをするように両手を上げて、その勢いでアエルは立ち上がった。勢いでもつけなければ立ち上がれない、というような、見るからに億劫そうな動作だ。

「アエル君さ、こういうところに座るのはよくないよ。他の客が入りにくいでしょ。スカートだって短いんだし」

「はいはいはい」

まだ若そうなのに、リストのいうことはいちいち年寄り臭い。知り合ってまだ数時間だが、その間にこの手の説教をいくつ聞いたかすでにわからない。アエルは適当を具現化したような三度返事で答えておく。

「じゃ、とりあえずは宿取るの？　あたしは野宿でいいけど。おにーさんの宿は？」

「俺は昨日泊まった宿が……」

いいかけて、リストはぴたりと動きを止めた。不思議そうにアエルが見上げてくる。

リストは頭の中で、アエルのセリフをくり返した。

「……野宿でいいけど？」

「野宿でよろしいですけども」

丁寧がいい直してみる。しかしもちろん、問題はそんなことではない。

「アエル君！　いかん、それはいかんよ。若い娘さんが野宿っていうのは不健康だよ。野宿なんて単語は頭の辞書から消してしまいなさい」

嘆かわしい、といわんばかりに、ほとんど泣きそうな顔でそんなことをいいだした。アエルはもう、呆れてものもいえない。父親でもないのになんでそんなこと、と突っ込もうかとも思ったが、色々面倒になって、リストを無視して歩き出す。

「どこの宿？　野宿がだめなら、あたしもそこに泊めてよ」

「そ、それはかまわないけど……なんていうかアエル君、君の生き様には投げやり感が漂ってる気がするよ。もっと、若さゆえの輝きとかないの」

追いついてきたリストを一瞥し、アエルは皮肉げに唇の端を上げた。

「いらないの、そういうの」

ある、ないではなく、いる、いらないの話にされてしまったのは、

リストもそれ以上いえなかった。ならしうがないか、と引き下がる。

「宿は……ほら、あれだよ、メランタワー」

そういつてリストは前方を指差したが、もちろん示されるまでもなく、アエルにもそこがどこなのかすぐにわかった。

背の高い建物が比較的多い、発展したこの町のなかにおいても、メランタワーほど目立つ建物はなない。タワー、という名に恥じないほどに高くそびえ立ち、その姿は町のどこからでも確認することができる。

「あそこに泊まってんの？　うわ、金持ち。あたし、あそこに泊まる人種とはぜったい仲良くなれないって思ってたけど。ちよつとイメージ違うな」

「それは喜べばいいの、落ち込めばいいの」

複雑な心境でリストが肩をすくめた。アエルにしてみれば褒め言葉のつもりだったのだが、それを伝えてやる気もない。偏見だろうという自覚はあるものの、金持ちであることを誇示したい人種が泊まる場所だとばかり思っていたのだ。

「お金持ちってわけじゃないよ。ちよつと、職場の系列でね、無料で利用できるんだ」

いいたいことが伝わったのか、リストはそういつて少し残念そうな顔をしてみせた。実はお金持ちとかいえたらかつこいいけどさ、と続ける。

「タダ？　いいね、そういうの。あたしもあやかれるの？」

「うーん、どうかな」

そんな話をしているうちに、メランタワーに到着した。

アエルが偏見を持つのも無理はない、一般庶民には近寄りがたい外観。天然青理石で作られた外壁は夕陽を受けて輝いており、ガラス製の出入り口の両側には警備員らしい男が二人、直立不動の体勢で立っている。さらに、そこに至るまでには、赤い絨毯の敷かれた五メートルほどの上り階段。

慣れた様子で階段を登ったリストは、あれ、とふり返った。アエルがついてこない。

「どうしたの。ここだよ、アエル君」

「……なんて似合わない……浮いてますけど、おにーさん」

赤い絨毯の上に、眠そうな顔をしてポケットに両手をつっ込んで立っている白コートの男。不審者にしか見えない。

「俺に比べれば、君なんてお似合いでしょ」

「そういうことをいってるんじゃない……まあいいけど」

高級感に気後れしたのは確かだったが、そのようにいわれてしまつては認めるのも癪に障るものだ。アエルは呆れたように息を吐き出して、軽い足取りで階段を登った。リストを追い越し、自ら重いガラス戸を押し開ける。

警備員の男二人は、アエルにちらりと一瞥をくれただけだった。リストも後続く。

「お金かかってそう」

入って最初の一言がこれだった。

きらびやかなエントランスホール。不必要と思われるほどに高いところにある天井から、無数の灯りがこちらを照らしている。右手には細長いカウンターが伸び、同じような顔をした紺色の制服の女性が三人並んでいた。中央の太い柱には、布に描かれた世界地図。このあたりで見かけるものにしては珍しく、ザーパト側もヴァストーク側も均等に描かれている。

待ってて、といい残して、リストがカウンターへまっすぐ歩いていく。そういわれても、じっと待っている気分でもなかったので、アエルもついて行った。リストは、笑顔の張り付いた女性に、身分証らしい銅の色をしたカードを提示した。

「昨日から泊まってる、リストⅡグランデ。連れの女の子がいるんだけど、部屋はある？」

女性はにっこりと微笑んで、紙の束を素早く調べ始める。アエルが横から顔を出し、カウンターに頬杖をついた。

「ここの採用基準って、顔だね、ぜったい」

「こちら。失礼だよ」

「あれ、失礼？」

たしなめられ、アエルは心底意外そうな顔をした。つぶらな茶の瞳に見上げられ、リストは少し考える。

「大丈夫、アエル君でも受かるよきつと」

「……それって褒めてんの？」

「お待たせいたしました」

二人の会話などまったく気にしていない様子で、女性が笑顔を向けた。

「三階のシングルでよろしければご用意できます。手続きをいたしますので、お連れの方の身分証を……」

「あー……」

遮るようにして、リストが声をあげた。アエルを見下ろす。

「……いいや、俺んどこに連れ込むぶんには問題ないでしょ。見逃しといて」

「かしこまりました」

紙に描いてはり付けたような完璧な笑顔のままで、女性は両手でカードを差し出した。8002、と書かれたカードだ。中央に、緑色の小さな宝石のようなものがはめ込まれている。

「ごゆっくりおくつろぎくださいませ」

「ありがとう」

カードを受け取って、行くよ、とアエルを促し、さっさと歩き出す。いまいち展開についていけなかったものの、頭の中で情報を整理しながら、アエルはおとなしく続いた。

エントランスホールの左手には、階段と、物々しい黒い扉があった。扉には、危険、と大きな張り紙。やはり綺麗な顔をした紺色の制服の女性が立っている。

「……昇降装置？　好きじゃないな、こういうの」

「物知りだね、この手のはブラン大陸中でも三つしかないのに。八

階まで階段登るのも大変でしょ」

いいながら、カードの「8」の文字を示す。八階という意味らしい。

「だったら作らなければいいのに、こんな高い建物」

「それをいっちゃあねえ」

「お待たせしました、どうぞ」

がこん、と音をたてて扉が開いた。扉の向こう側は、大人が十人入るのがやっとというほどの狭い部屋だ。極端に天井が低く、部屋というよりも箱に近い。そしてやはり、中にも女性が控えていた。今度は赤い制服を着ている。

まずリストが、それからアエルが中に入る。足を踏み入れた瞬間に、箱全体がかすかに揺れた。この箱がまるごと上下すること、中の人間を運ぶのだ。

閉まります、と告げられ、目の前で重い扉が音をたてて閉じられた。

「八階へ」

「かしこまりました」

赤い制服の女性が、銀色のこぶし大ほどの球体を、優雅な仕草で持ち上げる。それを、箱の側面に埋め込まれている銀盤にかざした。その瞬間、箱全体が銀の輝きを放つ。

すぐに光は集束し、音もなく箱が上昇を始めた。もっとも、中にいる当人たちにはその実感はほとんどない。

「おねーさん、魔法士じゃないんでしょう？」

一連の動きを眺めていたアエルが、そう声をかける。赤い制服の女性は、いえ、と首を振った。

「万一の場合に備え、昇降装置を動かせるのは魔法士の資格を持つもののみとなっております。わたくしは、動力の魔法士です」

「あ、そうなの？ 意外」

女性は微笑んだ。アエルは多少もうしわけないような気持ちになったものの、やはり昇降装置という存在への不信心は拭えない。と

いうより、昇降装置にも利用されている、魔法力を閉じこめた球体の存在そのものが嫌いなのだ。

その球体は、『ジュリス』と呼ばれる。もともとはコスモスによって軍事用に開発されたものだが、大戦の終結以降、一般人の間でも見かけるようになった。魔法力を封じ込めることによって、何も知らない子どもでさえも魔法を使えることを可能にした、戦後のザーパト側の発展を象徴するアイテムだ。

魔法を扱う魔法士は、資質を生まれ持っただけではなく、使いこなすようになるまでに、何年も研究し、鍛錬を重ねる。生まれながらに資質を持つものは全体の人口の四分の一にも満たないうえに、研究、鍛錬の結果、資格を取得し、魔法士となるのはそのうちの半数ほどだ。だが、手軽、便利をうりにしたジュリスが開発されてからは、その数は減少する一方だ。魔法士になるための過程を経ずとも、ジュリスを手に入ればことは済むのだから、わざわざ努力をする必要はないという考え方が主流になってきている。

しかし、世の中が便利になっていく反面、知識もなくジュリスを使用したために起こった事故、悪用された事件などの数は、年々増えていくというのが現状だ。だからこそアエルには、ジュリスがどうしても快く思えない。

「八階でございます」

扉が開き、リストが礼を述べて廊下へ出た。アエルは会釈もせず、それに続く。

客室ばかりが並ぶ階だというのに、下町の宿からは想像できないほど、静まりかえっていた。赤絨毯の敷かれた廊下が左右に伸び、正面の壁には部屋番号の案内板が貼り付けられている。

「ここだよ」

昇降装置の乗り場から右に出て、扉二つ目のところでリストは立ち止まった。手にしたカードを、扉中央に輝いている緑色の石に当てる。かちやり、と錠の外れた音。

「それもジュリス？」

「まあね。君はジュリスを良く思っていないみたいだけど、便利だよ」
「便利、ね」

それについて特に感想を述べないでいると、リストが扉を引き開け、どうぞと左手を差し出した。レディーファーストというタイプにも見えないが、先に入れということらしい。

「どうも」

部屋の中に足を踏み入れ、アエルは思わず息を飲んだ。

クリーム色の絨毯、見るからに高級そうな木製の応接セット、大きな窓にシルバーのカーテン、天井にはシャンデリア。右側にさらにソファセットの置かれた部屋が続き、その奥にやっとベッドルームだ。各部屋には、絵画や彫刻など、調度品の数々が飾られている。うっかり枕投げでもしようものなら、いくら借金を背負うことになるかわかったものではない。

「……なにこれ」

すみずみまで見てまわり、アエルは一言、感想を述べた。思い切り顔を歪めている。

白コートを無造作にソファに投げて、リストは心外そうに目を瞬いた。

「若い娘さんなら感動するかと思ったんだけどな。贅沢でしょ」

「ゼータクすぎて目眩がする。おにーさん、一人でここに泊まったの？ す、っごい、無駄」

最後の言葉に格別力を込めた。リストは、シャツのボタンを二つほどはずし、首を左右に傾けて伸びをして、それからソファに身をうずめた。

「結果的には無駄にならないんだから、いいんじゃない。アエル君はベッドルームを好きに使いなよ。俺はこのソファで充分」

「それでも無駄だと思うけど。まあいいか、あたしのお金じゃないし」

「俺でもないよ」

そういえば、職場の系列がどうのといっていた。もしかしたら、

ものすごい要職に就いているのだろうか——そんなことを思ったが、考えてもしようがないので、アエルはおとなしくベッドルームを借りることにした。

一人用とは到底思えない、巨大なベッドが鎮座している。壁際には、宝石の散りばめられた額に入った、何を描いているのかわからない抽象画。ソファのリストをちらりとふり返ったが、彼はもうそのまま寝るつもりなのか、微動だにしない。アエルはそっと戸を閉めた。

「……落ち着かないな」

ベッドを眺め、つぶやく。ブーツを脱ぎ、思いきってダイブしてみた。想像通りの、凶悪なまでにふかふかな感触だ。何やらしい香りも漂う。

「……………」

天井を見上げた。白い天井だ。この部屋の灯りといえば、ベッド脇にある背の高いランプだけなのだが、傘の下では炎ではなくジュリスが光を発している。そのせいか、日も暮れたというのに、室内は異様に明るい。

ごろりと寝返りをうち、窓を見る。窓の外は暗く、八階ともなるとさすがに他の建物の影は見えなかった。

アエルは、腰に引っかけていたポーチを取り外すと、中から手のひらサイズの本を取り出した。皮の表紙をめくり、真ん中あたりに挟んであったカードを目安にして、ページを開く。特におもしろいともおもしろくないとも思わない、巷に溢れている冒険小説だ。寝転がったままで、文字を目で追い始めた。

「まーた本なんか読んでの、アエルちゃん」

不意に声がした。

アエルは不機嫌そうに眉をひそめたが、無視をしてそのまま本を読み続ける。声がしたのは、窓の方向だ。もう嫌というほどに聞き慣れてしまった声。

「おーい、無視すんなよ。せっかく会いに来たんだぜ？」

「ここ八階なんだけど」

本は閉じず、目だけそちらに向けた。

いつの間に開けたのか、窓枠に腰をかけ、少年がこちらを見ていた。黒い髪、黒縁眼鏡、黒い上下に身を包んだ少年だ。そこが公園のベンチに思えるほどに自然に座っており、ふわふわの猫っ毛が風に揺れている。

「さっさと閉めてよ。夜はまだ寒いんだから」

「ああ、悪い、悪い」

少年は、とん、と窓から飛び降りた。窓を閉め、ベッドにもたれかかって頬杖をつく。

「これでいい？」

「帰れ、そして閉めろ、って意味だったんだけど」

「つれないなあ」

拗ねたように唇をとがらせて、ベッドに頬をつけると、本を取り上げてアエルを見つめた。「こんな高さなんて障害にならないくらい、オレはアエルちゃんへの愛で溢れてるっていうのに」

「そういう冗談、ほんっと鳥肌立つんだよね」

本を取り返し、じろりと一瞥する。

「寝言いい終わったなら帰って。今日は珍しく一人じゃないから」

「えー、だれと一緒だよ。男？」

黒縁眼鏡の向こう側の赤い瞳が、これでもかと悲しそうな色を帯びる。あまりの白々しさに、アエルは眉の間に皺を刻んだ。

「男。ちよっと連れ込まれたの」

「げ、まじで。オレというものがありませんが！」

「クルイーク、声をひそめるぐらいの気遣いしてよ」

ため息混じりの言葉に、少年——クルイークは、大げさに手で口を押さえてみせる。あきらめて、アエルは本をポーチに戻した。身体を起こし、無駄に大きな枕にもたれかかる。腕を組み、靴のままベッドに進出してきたクルイークを、憮然として見下ろした。

「その男、アエルちゃんの味方？　だとしたら、いまのうちに殺し

とかないとな」

仰向けになり、アエルを見上げて無邪気に笑う。アエルは首を傾けた。

「さあ、味方かどうかはわかんない。あんたもね、クルイーク。…むしろ、あたしを特定した上で、声をかけてきた可能性が高い」

「特定？　なんだ、じゃあ敵か。つまんねーの」

つまらないといいながら、クルイークは楽しそうに目を細めた。ごろりと転がり、今度は両手を投げ出してうつぶせになる。

「…：解呪の妙薬なんてももの、本当に存在する？」

その猫っ毛を見下ろして、逡巡したものの、結局問いを投げた。クルイークは顔を上げ、ますますおもしろそうに頬をゆるめる。

「なるほど、それが餌か。だったらアエルちゃんは釣られるしかねーな。そういうの、オレよりそっちのが詳しいだろ？　住む世界が違うんだもんよ」

「聞いたことは？」

「さあねえ」

アエルは息を吐き出した。聞いた自分が間違っていた。味方だといいながら、この男が自分のために何かしたことなどあったのだろうか。

「まーでも、確証がない限り、アエルちゃんは釣られとくんだろ？　そんなにがんばらないでもさ、オレと一緒にくればいいの。どうせ、もうほとんどこっち側なんだし」

「いっしょにしないで。あたしは、あんたたちとは違う」

「あんたたちとは、違う？」

わざとらしく鸚鵡返しにして、クルイークは肩を震わせて笑い出した。だんだん声が大きくなり、抑える素振りもなく高らかに声をあげる。

「いまのセリフ、ぜひもう一度」

「……………」

冷やかな目で、アエルは彼を見下ろした。いちいち癪に障る。

しかし、そのたびにいらいらしては思うつぼだ。

突然、ノックもなく、戸が開けられた。見なくてもわかったので、アエルは戸の方向を見なかった。クルイークは身体を起こすようにして、億劫そうに目をやる。

あたりまえのことだが、そこには、険しい顔をしたリストが立っていた。

リストは、自分でも気づかないうちに安心してしまっていたようだった。ソファに座ったところまでは覚えている。その後の記憶がない。寝てしまったようだ。

ベッドルームからの話し声で、目が覚めた。もちろん、気のせいだと思った。しかし、気のせいではすませられない笑い声で、完全に覚醒した。嫌な予感を胸に、戸を開け放つ。

ベッドに寝そべる少年と、やはりベッドの上のアエル。

「なんだよ、いきなり開けるなんて、失礼なんじゃねーの」

からかうように声をかけられ、リストの血が一気に沸騰しそうになる。しかし、どうにか気を落ち着けて、状況を確認した。何かがあった、という様子ではない。

「……君は？」

寝ていたとはいえ、さすがに後ろを人が通れば気づくはずだった。まさか、窓から入ってきたというのだろうか。

クルイークはわざと緩慢な動作で起きあがり、ベッドの上であぐらをかくと、おどけた様子で右手を上げた。

「どうも、アエルちゃんの愛人のクルイークです」

「愛人？」

不信感丸出しで眉をひそめる。その視線を、我関せずを決め込んでいるアエルに向けた。

「ちがうちがう」

もう面倒なのでそういうことにしておいても良かったが、一応弁解しておくことにする。一応感が漂う棒読みではあったが。

リストは、クルイークに視線を戻した。アエルとはどういう関係なのだろう、と考えてもわかりそうにないことを考えながら、物色するようにじろじろと見る。黒ずくめの少年だ。黒縁眼鏡が似合っていない。

「……君は——」

眼鏡の奥の瞳が赤いことに気づき、リストは息を飲んだ。赤い瞳——人間では、生まれ持つはずのない色だ。

「フォシール悪しき者か！」

「ピンポン正解。だからナニ？」

クルイークは挑発的にリストを見上げる。だから何、の問いに、すぐに言葉が出てこない。答えが出ないのではない、わかりきっているから声にならないのだ。

悪しき者、フォシール——大気と大気の隙間にある世界に住むといわれる種族。人間の感情を餌にして生きる、自由気ままな連中だ。主に負の感情を好むといわれ、ろくなことをしでかさなことから「フォシール悪しき者」と呼ばれている。

実際に目にするのは初めてだった。実在しない、伝説上の生物だと思っているものも少なくない。

「……何をしに、ここへ？」

ゆっくりと言葉を選び、リストが問う。クルイークは、値踏みするようにリストを見た。頭の前から足の先までを、じっくりと、数秒間。それからふいと視線をはずし、背を反らしてアエルの方へ顔を向ける。

「アエルちゃん、こんなくたびれたタレ目に連れ込まれるようじゃ、価値下がっちゃうんじゃないの？」

面倒そうに、アエルは片眉を上げた。

「安っぽいフォシールにストーリーカーされてる時点で、すでに価値はゼロだけどね」

「安っぽいって！ ひでえ！」

そのやりとりで、リストはなんとなく二人の関係を察知した。と

りあえず、アエルはまともに取り合っていないらしい。幾分ほっとして、アエルに目をやる。彼女は上半身だけ起こして、枕にもたれかかっていた。

「……アエル君！」

突然、リストの表情が険しくなった。クルイークの隣を通り過ぎ、アエルの両足をつかむとベッドの外側へぐるりと回す。

「おおっ、と」

体勢を崩し、どうにか身体を起こすと、アエルはいつの間にかベッドに行儀良く座る形になっていた。膝から下がベッドからはみ出て、垂直に下を向いている。

「足を投げ出して座ったりしたらダメだって。男の子がいるならなおさら。もう君はさ、スカートじゃなくてズボンにした方がいい。できれば長いやつ」

アエルは目眩がした。リストという男がどういう人種なのかはまだよくつかめないが、こういう部分で異様に口うるさいことだけはもう充分わかった。まさかそんな注意を受けるとは。

「なんなら俺のを貸すけど」

「……勘弁してよ、それ本気でいつてんの？」

リストのズボンを履いた自分など、滑稽すぎて想像もしたくない。「変なヤツだな、タレ目のにーちゃん」

薄く笑って、クルイークはリストに挑発するような目を向けた。

「あんたさ、アエルちゃんの味方だったりすんの？」

ぶしつけな質問に、リストは眉を寄せた。こうして同じ宿にいるのだから、敵ではないことぐらいわかりそうなものだ。質問の真意がつかめず、クルイークを見据える。

相手は悪^{フォシール}しき者だ。外見が少年だからといって、本当に少年だとは限らない。対応は慎重にすべきだった。

「俺は……」

答えようとした。しかし、声は轟音にかき消された。

「——っ？」

「わ、なんだよ？」

タワー全体が激しく揺れ、クルイークが前へつんのめる。アエルは素早く立ち上がり、壁を背にして周囲に注意を向けた。

そのまま、しん、と静まりかえった。すぐ近くで何かが爆発したような音であったにもかかわらず、悲鳴の類も聞こえてこない。

リストはそつとクルイークの様子をうかがう。彼の仕業かと思っただけだ。しかし、クルイークは尻餅をついていた。演技とも思えない。

「……防御結界か。どっちの仕業？」

窓の外を一瞥し、アエルがつぶやく。二人は慌てて首を振った。

「疑うならこっちのタレ目だけにしろよ。——って、ナニ、防御結界？」

「あんたが気づかなかったの？　ならジュリスか……」

疑われたことについてリストも異を唱えたかったが、それどころではなかった。窓の外を見て、防御結界、といったのだ。魔法士ではないリストにはわからないが、ということはおそらく、メランタワー全体が結界で覆われてしまったのだろう。

もちろん、リストの仕業ではない。しかし彼には、思い当たる節があった。

「まさか」

急いでベッドルームを出て、ソファへと走る。投げ出されたコートのポケットを探り、小さなレンズを取り出した。

それは、かすかに黒い光を帯びていた。リストは舌打ちをし、今度はビー玉サイズの黒い球を取り出すと、そつとレンズに当てた。

瞬間、黒い球から、女性の声の流れ出した。耳元で囁かれたような、小さな小さな声。声が止むと、役目を終えたとばかりに、黒い球はレンズに吸い込まれる。

「……しまった、のんびりしすぎた」

「ほーらアエルちゃん、やっぱりこのタレ目の仕業じゃねーの、これ」

すぐ後ろに、いつの間にか二人が立っていた。クルイークが勝ち誇った顔で、レンズをのぞき込む。

「いい材質使ってんなあ。なにこれ？」

「アエル君」

クルイークは完全に無視して、リストはアエルに向き直った。アエルは、不機嫌そうな顔をしてまっすぐにリストを見据えている。

「説明してる時間はないけど、すぐに逃げた方がいい。この防御結界は、たぶん、俺たちを狙ってのものだ」

「なんで？」

焦るリストとは対照的に、アエルは至極落ち着いていた。そういえば、プラティーンでの強盗事件のときもそうだったと思い出すが、いまはそれどころではない。

「なんでって——だから、説明してる時間は……」

「そうじゃなくてさ。なんで逃げなくちゃいけないの？ いいよ、別に、捕まったって。どうせ逃げても追ってくるんでしょ」

さらりといって、ソファに腰を下ろす。ひらひらと手を振った。

「おにーさんは逃げなよ」

「……どうして」

完全に予想外の反応に、リストは戸惑った。遅れて、怒りに似た感情がこみ上げる。この少女のいつていることがわからない。

クルイークはおもしろそうに笑んで、ソファ横の壁にもたれかかった。

「どうしてって、タレ目のにーちゃん、アエルちゃんのことをわかって誘ったんだろ？ 捕まろうがなんだろうが、アエルちゃんに

は関係ないじゃん」

「……………」

頭の中で、様々な感情は渦巻いた。この少女は、あのとき、どうして自ら刺されたのだろう——この少女は、どうしてこうも無気力なのだろう——……考えないではなかったが。

「関係、ない？」

抑えた声で聞き返す。クルイークはおどけたように笑って見せた。

「死なないし、傷つかない」

「傷つかないわけがあるか！」

初めて激しい声をあげ、リストがクルイークの胸ぐらをつかんだ。普段の低いテンションからは想像もつかない、怒りを宿した瞳で、彼を見下ろす。

クルイークは驚いて、声も出ない。まさか、これほど激昂するとは思わなかった。

「彼女をなんだと思ってるんだ。彼女は人間だ。傷つかないなんてことがあるか」

瞬きもできずに、アエルはリストを見上げた。この男は何をいつているのだろう——自分の正体をわかっているのなら、なおさら。

人間だ、などと。

「熱くなんなよな。あんたさ、アエルちゃんの望みを知ってるから、解呪の妙薬だかなんだかで釣ったんだろ？ それを今更」

「それは——！」

コンコン、と場違いなほど静かなノック音が、響き渡った。

リストに緊張が走る。この状況で、普通の客とは考えづらい。

視線をさまよわせると、じつとこちらを見上げていたアエルと目が合った。あまりの真剣な瞳に、目が離せなくなる。

「……俺は」

何かをいわなくては、と思った。クルイークの胸ぐらから手を離し、リストは膝を折る。ソファ越しに、まっすぐ、アエルの目を見た。

「俺は、君の味方だ。これだけは、本当に、本当だ」

「……………」

アエルは、表情一つ変えなかった。そのまま、静かな沈黙が続く。もう一度、扉がノックされた。

アエルは立ち上がった。

「あたし、おにーさんに雇われてるんだっけ」

ため息混じりに、億劫そうにつぶやく。

「いまここを無事突破することも、契約内容に？」

それを聞いたクルイークが、実におもしろそうに笑んだ。理解が遅れたものの、リストは慌てて頷いた。

「含まれてる、含まれてるよ、もちろん」

「そ。じゃ、がんばるか」

アエルは両の手のひらを絡ませて天井にかざし、身体中で伸びをした。猫のように目を細める。

「もしかして、歌う？」

わくわくしているクルイークを冷たく一瞥し、組んだ両手を目の前まで下ろした。

「歌わないよ」

そう返しながら、アエルはもう動いていた。ベッドルームにあった抽象画を取り外し、出入り口まで運ぶ。扉を開けたらすぐ目に入るであろう位置にそっと置き、ぶつぶつと口のなかで何やらつぶやいた。すると、抽象画が青白い光を帯びる。

「……何やってんの？」

「いいから、おにーさんは荷物まとめて」

突然きびきびと動き出したアエルをぽかんと目で追っていたリストだったが、ぴしりと指示を出されて、慌てて白コートを羽織る。それから、たいして大きくはない荷物を肩から下げた。

それにしても、あの絵画で何をするつもりだろう——そう考えていると、とうとう、扉の開く音がした。

「うわ！」

「ば、化け物！」

すぐに、複数の悲鳴が聞こえてくる。様子を見に行ったクルイークが、笑いながら戻ってきた。

「すごい驚いてやんの！」

「……どういこと？」

「さあ、わけわかんない化け物でも見えてんじゃないの」

さして興味もなさそうに返し、アエルはさつさとベッドルームの窓へと向かう。クルイークものりくらりとその後を追っていく。すぐ隣の部屋にある出入り口で、いったい何が起きているのか興味があったが、のこのこ見物に行くわけにもいかなかったので、リストも続いた。悲鳴の類が、聞こえてくるだけでも複数。一人、二人ではない。顔を出して、自分が捕まったのでは話にならない。アエルは窓を開けると、躊躇なく手を差し出した。指先が、目に見えない何かに触れる。防御結界——本来、中にいるものを守るためのものだが、この場合は、閉じこめるために使われている。衝撃の類は何かも吸収される、やっかいな代物だ。

「君は、魔法士なの？」

口に出してしまってから、場違いな質問だと気づいた。アエルがちらりとこちらを見る。答えなくてもいいけど、とリストは続けたが、アエルは視線を戻してちゃんと答えてきた。

「魔法士の登録はしてないけど、魔法は使えるよ」

アエルは、窓の外に両手を突き出した。そのまま、何かを握りつぶすようにゆっくり、広げた手のひらを閉じていく。

魔法士の資質のないリストの目にも、空間が歪んでいくのが見えた。まるで、アエルの手に捕らえられたかのように。透明な何かが絡め取られ、アエルが手を引くのと同時に、存在そのものがかき消える。たったそれだけの動きで、かすかにタワー全体が揺れた。

「結界を……相殺した？」

「そう」

リストは口を開けたまま、閉じることができなくなってしまった。魔法学の研究をしているリストは、魔法は使えないものの、知識だけなら一般の魔法士のそれを上回る。それだけに、魔法の相殺がどれほど困難なことなのかを知っている。

力が大きければ良いというものではないのだ。そこに使われている魔法力を正確に判断し、寸分の狂いもなく、ぴったり同量の魔法力を生み出さなければならぬ。少しでも過不足があれば、過剰反

応を起こして魔法力が魔法士に逆流し、命の危険すら伴う。

それを、ほんの一瞬で、やってのけてしまった。

リストは、身体が震えるのを感じた。確信がなかったわけではない——しかし、本当に、目の前の彼女こそが、そうなのだ。

「で、どうすんの？ 飛び降りんの？」

何が楽しいのか、弾んだ口調でクルイークが問う。アエルは少し考えるような素振りを見せ、それからクルイークの正面に立った。あまり身長差はないものの、それでも少しだけアエルよりも背の高いクルイークの、その赤い瞳を見上げる。

「え、なにに、このドキドキ体勢！」

「そのテンションの高さ、疲れるわ。おにーさんと足して二で割ったら？」

心から嫌そうな顔をした二人の目が合った。口に出さずとも、お互いにそれだけは嫌だというオーラがにじみ出ている。

「せっかくだから、あるものは利用しようと思って。新しく召還するのは面倒だしね」

にっこりと、アエルは笑った。クルイークの両肩をつかむ。

「我は魔の契約者、我は魔の使い手、我は魔の一部、我は魔そのものの——」

「ちょ、ちょっと、オレ、疲れることはしたくねーって！」

急に慌て出すクルイークにかまわず、アエルは続けた。

「我は使役する、フォシール・クルイーク」

瞬間、クルイークの赤い瞳が、光を放った。放たれた赤い光が、クルイークの身体を覆う。

「すごい……！」

状況も忘れ、リストは目を輝かせた。

「高位の召還力の魔法士が、生物を召還、使役できるっていうのは、もう過去の話かと思ってたけど……初めて見た、すごい！」

「こんなこと、だれにでもやられてたまるか！」

赤い光に包まれたままで、クルイークが不機嫌な声をあげる。さ

きほどのまでの楽しそうな表情が嘘のようだ。

アエルは、男性二人の感情の機微などまったく意に介さず、両肩に置いていた手を少し下にずらした。指先に力を込める。

「翼を」

小さなつぶやき。しかしそれだけで、クルイークの身体が大きく波打つ。

「——っ」

苦悶の色を浮かべ、クルイークが前のめりになる。

「あとは、いわなくてもわかるよね？」

「……高くつくぜ、アエルちゃん」

苦しみのなかで、クルイークはにやりと笑ってみせた。そして、窓枠に右手をつくくと、まるで小さな台を飛び越えるようにふわりと空に躍り出る。

「——っ！」

まさか落ちはしないだろうと思っていたリストも、目を見張らずにはいられなかった。

闇夜に舞ったクルイークの背から、その決して大きいとはいえない身体からは想像もつかないほどの巨大な翼が、まるで花開くように、瞬時に生まれたのだ。

「……なんて……」

言葉がうまく出てこない。それでも、美しいと、素直に思った。人外であるが故の美しさ。黒く大きな翼さえも、赤い光に覆われている。

「呆けてないで、行くよ、おにーさん」

ためらいなく窓枠に足をかけ、アエルが促す。

急に、目の前の光景が現実味を帯びた。リストはごくりと唾を飲み込む。

「……………乗るの？」

「あたりまえじゃん」

まったくあたりまえの返答だった。動けないでいると、アエルに

腕をつかまれた。

追撃

ひとときわ立派な扉の前に、エイラⅡミリシアは立っていた。ノックをしようと手を上げた状態のまま、動けないでいる。

長い金の髪は、頭の高い位置に結い上げられていた。気合いを入れようと、いつもはドレッサーの奥にしまい込んである値の張るジャケットに身を包んでいる。胸元では、いつものように白いバッチが輝いていた。

コスモスに入ってから以来、この扉の前に立つのは二度目だ。一度目は、まだ希望に満ちていた、六年前の最終面接時に。二度目は、いま。

組織長に呼ばれた心当たりがないわけではない。というよりも、心当たりがあるからこそやっかいだった。考えれば考えるほど、気は重くなるばかりだ。

エイラは、唾を飲み込んだ。意を決して、持ち上げた手をそっと向こう側に倒した。二度。乾いたノック音が鳴る。

「ドライC413、エイラⅡミリシアです」

緊張を隠したつもりが、少しくわずつた声になる。それとも、自分でそう思ってしまうだけだろうか——エイラは、もう一度唾を飲み、身じろぎせずに扉の向こうから声がかかるのを待つ。

「入りなさい」

朝会のたびに聞いている、低い声が投げかけられた。失礼します、と告げて、エイラは戸を開けた。

その部屋は、以前入ったときと印象が違っていた。自分の心持ちが違うからかもしれないとエイラは思ったが、コスモスの組織長の部屋が六年間まったく同じというのもおかしい話なので、やはりどこか変わっているのかもしれない。それでも、正面に構える、ひとりではもてあましそうな巨大すぎるデスクは変わっていないかった。エイラ自身が仕事に使うデスクの、優に三倍はあるデスクに両

肘をつき、コスモス組織長ティグレⅡガナドルはエイラを見ていた。

デスク以外は、これといって特筆するものは置いていない。どこにでもありそうな書棚が一つと、中が見えない背の高い棚が二つ。調度品の類もない。それほど大きな部屋というわけでもない。

それでも、この部屋は、コスモス本部のどの部屋とも異なっていた。主人の存在のせいなのか、巨大なデスクのせいなのかはわからないが。

エイラは、緊張が表に出ないように冷静に努めながら、開けた扉を閉めた。一礼して、そのまま扉の前に立つ。

「もっとこちらへ。そんなところにいたのでは、話もできないでしょう」

まだ五十歳に満たない若き組織長は、柔和な笑みをたたえてエイラを呼んだ。決して張り上げた声ではないのにもかかわらず、その低い声には充分に威厳が感じられた。

エイラが歩みを進め、ティグレのデスクの前に立つ。ティグレはかけていた眼鏡を外し、緩慢な動作でケースにしまった。ぱちんとケースを閉める。

「君は、リストⅡグランデと特別に仲が良いと聞いているのですが」
ゆっくりと顔を上げながら、話のついでのようにそう切り出した。エイラは内心ひやりとしながら、言葉を選んで答える。

「特別、というのがどの程度のものかはわかりかねますが。同期ですの、仲は良い方だと思います」

「彼から何か聞いていますか」

柔らかい口調なのに、異を唱えることのできない力を帯びた声だった。エイラは指先にまで神経が行き届くのを感じた。身体の末端が妙に熱い。それでも芯が冷え切ったような緊張感。

「……何か、というのは？」

「ヴァストークの歌姫、黒の魔女——通り名は尽きないが、本名はファルーシュⅡリゼといったでしょうか。もちろん、彼女について、

です」

オブラートに包むことなく、直接その名が出てきたことに驚いた。しかも、彼は「もちろん」といったのだ。

「ヴァストークの歌姫について、コスモス内で噂が流れているのは知っています。彼女が生きているというのは、本当なのでしょうかな？」

深い策略があったわけではなかったが、エイラはそう問いを口にしていた。本当のところ、彼女は、ヴァストークの歌姫については、リストから核心に近づくことを聞いているわけではなかった。同期のよしみで、姿を消している間のコスモスの状況を教えて欲しいと、情報の提供を頼まれているだけだ。だからその問いは、自然と口から出ていた。

ティグレは、目を細めた。彼女の言葉を、駆け引きの一端と捉えたようだった。

「無駄なやりとりは嫌いなんですがね。私は、君がリストⅡグランデから聞いていることを、教えて欲しいといっているんですよ」

「わたしも、質問をしたところです」

「……………」

もうこうなっては、どう転んでも自分に良い方には話は進まないだろうと、エイラは腹をくくった。ティグレは、エイラのことを完全にリスト側だと思っているようだ。腹をくくってしまえば、金縛りのように動かなかった指先にも力が入った。そつと両の手を握りしめる。

「……いいでしょう」

ティグレは、やはり巨大なチェアの背に、息を吐き出しながらもたれかかった。

「では君は、ヴァストークの歌姫について、何を知っていますか？」

「大戦の大罪人です」

間髪を入れず、エイラは答える。ティグレが反応を示さないので、さらに続けた。

「彼女が歌う呪歌を聞いたものは、身体中の細胞が沸騰して死に至るとされ、ついた名が『ヴァストークの歌姫』——大戦ではヴァストーク側で力をふるい、彼女ひとりの力で、ザーパトでどれほどの被害者が出たのか、計り知れないとか……。戦後はザーパトに身柄が引き渡され、裁かれた——はずですよね？」

それはさらさらと口から流れ出た。ずっと疑問に思っていたことだったからだ。それがなぜいまになって、話題に上るのか、わからない。

「リストが……リストⅡグランデが、彼女が生きているのだといい張っていたことも知っています。彼女を捜すといって、ここから姿を消したことも。でも、わたしが知っているのは、それだけです」
これには嘘が含まれていたが、ティグレはおもしろそうに唇の端を上げただけだった。

「教科書とおりですね。では君は、その『裁き』というのがどういうものだったのか、ご存じですか？」

質問を頭の中で反芻し、エイラは眉根を寄せた。そんなものは考えたこともない。というよりも、漠然と、死に直結するものをイメージしていたのだ。

「これは何も、私だから知っていることではありません。隠されていますが、知ろうと思えば知りうる情報です——そうですね、たとえば、金を積みめば」

もったいぶるように一度言葉を切って、ティグレは続けた。

「不死です」

一言。

「……は？」

思わず、エイラは聞き返していた。

不死、といったのだ。ヴァストークの歌姫への裁きが、不死である。

エイラは頭を働かせようとしたが、混乱する一方だった。たくさんの命を奪った代償が、不死だなどと、納得ができない。

「正確には、死な^ず不、老い^ず不、忘れ^ず不——三つの『不』を与えた呪いだという話です。罪を悔い、死を乞うて、何度も自害を謀った魔女に、当時のザーパトとヴァストークの魔法士たちが、呪いをかけたといわれています。死な^ずに悔いろ、と」

エイラは言葉を発することができなかった。死な^ず不、老い^ず不、忘れ^ず不——要するに、不老不死ということになる。不老不死といえば、一般的には憧れの対象になるものではなかったか。

「理解できないという顔ですね」

ティグレは、満足そうに目を細めた。

「安心なさい。私だって理解できません。不老不死が手に入るのなら、いくら金を積んでもいいと思っっているような人種ですから、私は」

「……それが、本当だとして」

疑うわけではなかったが、エイラはそう前置きをした。

「ヴァストークの歌姫は、戦後もずっと生きていたということですよね……それを、どうしていまになって、コスモスが探す必要があるのですか？」

「そうではありません。我々は、ずっと、探していたんですよ。七年前、ザーパトの監視下から逃れて、魔女が行方不明になったその日から、ずっと。いまになって探しているのではなく、いま、ようやく、見つかったのです」

そこまでいわれて、エイラは理解した。瞳を輝かせ、研究内容を語ったリストIIグランデの姿が脳裏に蘇った。情報の提供を求められた理由も、彼女がほとんど何も知らされなかった理由も、わかった。

「……ですがわたしは、リストIIグランデから何も聞いておりません。彼は元来、あまり自分のことを他に話す人間ではなかったのです」「いいでしょう。それが、嘘でも真でも」

つぶやいて、ティグレはもう一度ケースから眼鏡を取り出した。引き出しから書類の束を抜き取り、目を通しながら、今日の天気で

も語るように話し出す。

「実はね、つい昨日まで、リストⅡグランデの消息はつかんでいません。彼はばか正直に

うちコスモスの施設を利用していたのでね。それが、昨日、見慣れぬ若い女性を連れていたということで、念のため捕らえようとしてみれば、あっさり逃げられたとの報告がありました。タワーの八階の窓から、巨大な生物に乗って逃げた、などというばかげた報告です」

「……その若い女性が、ヴァストークの歌姫だと？」

質問には答えず、ティグレは一枚の書類を束から抜き取った。じつとそれを見つめる。

そのまま、沈黙が訪れた。エイラは重い空気の中で、ただ黙ってティグレの言葉を待った。ふと視線を落とし、彼の持つ書類を見る。それが何なのかを知って、息を飲んだ。

「私はね、目的のためには、何でもする男です」

ごくあたりまえのように、ティグレはそう告げた。

「ゲラベールか……気候の暖かい、良い町ですね。これといって目玉はないが、平凡に一生を暮らしていくにはあの町一つで不自由しないでしょう。そこで畑を耕しているのかな？ 良いご両親なのでしょうね。おお、優秀な弟さんだ、ケウロのアカデミーで学んでいるとは」

ゲラベール——エイラの故郷だ。ブラン大陸の南西に位置する、小さな田舎町。ティグレが手にしているのは、エイラがコスモスに入る際に提出した、個人情報に関する資料だった。

それを、このタイミングで、わざわざ持ち出したのだ。

忘れていた緊張感が蘇った。エイラの背中を、冷たいものが伝っていく。

「どちらでもいいんですよ、君がリストⅡグランデから、事情を聞いていようがいまいが。君が述べたのが、真実だろうが虚実だろうが」

ティグレは眼鏡をはずし、柔和な笑みをエイラに向けた。目の下には皺が刻まれているのに、その瞳は、ぞくりとするほど冷たかった。

彼は両手をデスクの上で組み、そっと目を細めた。そして、一言、告げた。

「協力してくれますね」

＊

アエルとリストの二人は、港町ベイスへと向かう馬車に揺られていた。

昨晚、無事メランタワーから脱出した後、クルイークは疲れたといい残して姿を消した。も

ともと、フォシールフォシール悪しき者というのは、どこにでもいて、どこにもいない存在だ。生きている次元そのものが違う。目の前からいなくなったからといって、もうつきまとわれなくなるという保証などどこにもなかったが、リストはこっそりと安堵した。

フォシールフォシール悪しき者であるという事実を差し引いても——到底差し引いて考えられるものではないにしろ——あの少年は好きになれない。

そのまま身を隠し、結局野宿。朝一番で馬車に乗り込んで、すでに陽が傾こうとしている。

リストは、隣に座って本を読んでいるアエルに視線を移した。昨夜のできごとの後も、彼女は、リストにこれといって説明を求めなかった。聞かれないのに語り出すのもどうかと、リストもいわずにはならないことは何もいえないでいる。

「その本、ずっと読んでるけど、おもしろいの」

結局のところ、口からでてくるのはこの程度のどうでもいい話題だ。アエルは本を閉じた。「ふつう。読んでみる？」

「や、俺はいい。馬車でそういうの読むと酔うから。繊細にできて

て」

丁重にお断りすると、アエルはもう一度本を開いた。

「こんないい馬車でも酔うんだ？ おにーさん、贅沢にできてるね」
繊細と贅沢では大きな違いだ。若干切なくなっただものの、とりあえず、反論しないでおく。

彼女がふつう、と評した本は、ふつうのわりには複数回読まれていたようだった。昨夜はページの真ん中あたりだったはずだが、いまは最初のあたりを読んでいるように見える。馬車に乗ってからずっと読んでいるのだから、今日だけでも二週目に入っているのかもしれない。

アエルが本に集中しているようだったので、リストはそのまま彼女を眺めていた。文字を追うけだるそうな瞳に、長い睫毛が影を落としている。肩までの艶やかな黒髪が、彼女の耳を隠していた。そこから覗く頬の色はずいぶんと白い。

「何か用なの」

本から視線ははずさず、アエルがつぶやく。リストは慌てて目を逸らした。ここで慌ててしまつては余計怪しい、と理解はしていても行動が伴わない。

「アエル君さ、本ばかり読んでないで、おにーさんとお話ししようよ。つまらないでしょ。俺は本とか持っていないわけだし」

ごまかすように話しかけると、アエルは苦虫を噛みつぶしたような顔をして、リストを仰ぎ見た。

「出た、『おにーさんとお話ししようよ』」

いつかのように、そのままくり返す。

「あのさ、そのセリフがどれだけ胡散臭いかわかってる？ いつかほんとに捕まるよ。変態ってね、自覚なくとも、周りの人が変態って認定したら変態なんだよ、知ってた？」

「え、そうなの？」

「あたしはそう思ってる」

リストは密かにショックを受けた。本当に変態だったらどうしよう

う。

向かい側で二人のやりとりを見ていた女性が、思わずといった様子で吹き出した。深紅のドレスを着て、馬車の中だというのにつばの広い帽子をかぶった女性だ。ひと目で、生活水準の高さがうかがえる。

「ごめんなさい、つい。仲がよろしいですね。ご兄妹ですか？」

声を聞くと、見た目よりも年齢が上に感じられた。四十手前といったところだろうか。

「はい」

アエルが適当に返す。え、ちょっと、と思ったものの、リストは否定の言葉を飲み込んだ。年齢差は六つ、しかも「おにーさん」と呼ばれていれば、兄妹だと思われるのも当然だ。

目の前の女性の出で立ちには突出してはいたが、この馬車の中では、むしろアエルとリストの服装の方が浮いていた。ブラン大陸において、馬車というものは大きく二種類。一つは、馬が大きな荷台を引き、その中に荷物と一緒に人が乗り込むタイプ。もう一つは、馬が座席のついた車を引っ張る、人を乗せることを目的としたタイプ。アエルたちが乗っているのは後者で、しかも、馬は二頭しかないというのに、連結式の座席車が三つ。それぞれに物々しい屋根とカーテンのついた、高級馬車だ。

馬の足にジュリスが埋め込まれることで、このような無茶を可能にしているのだという。アエルのもっとも嫌いな使い方だったが、異を唱えることはしなかった。リストが、このタイプの方が追っ手がつきにくいと断言したからだ。裏をかくのだという。

彼らの乗っているのは、三つのうち、一番前の車だった。広々とした座席に、アエルとリストが隣り合わせて座り、その向かい側には深紅のドレスの貴婦人。同じ車内に、あと三人が乗り合わせている。

「うるさくしてしまって、すみません。どうも、この手の馬車には慣れなくて」

正直なところ、自分たちがうるさい部類に入るのかどうかもよくわからなかったが、リストはとりあえずそのようにしておく。貴婦人は、とんでもない、といって微笑んだ。

「わたくしも、これほど立派なものに乗るのは初めてですの。座席車が三台もついているなんて。速度も速いし——世の中は、どんどん便利になっていきますわね」

彼女はそのことを、純粹に素晴らしいと思っているようだった。アエルは黙って、手にした本に視線を落とす。リストは曖昧に笑った。

「ブラン大陸に、線路を敷く計画があるという話をご存じですか」
貴婦人の隣、ちょうどひと一人分を隔てて座っていた、豊かな髭を蓄えた初老の男性が、話に加わってきた。

「線路？」

聞き慣れない単語に、貴婦人が聞き返す。男性は意外そうに目を見張った。

「アウレーに行かれたことは？ あそこの町には、トレインが走っているでしょう。あれをね、大陸中に走らせようって話ですよ。途方もない話のようだが、実現すれば、メランからベイスまでなんて、それこそ一日もかからなくなる」

「ああ、トレイン。アウレーに行ったことはありませんが、話には。それが本当になれば、世の中は変わりますわね。ヴァストークには未だに馬車もないという話ですのに」

そんなばかな、とリストは胸中で思ったが、口には出さないでいた。ザーパト側の人間は、ヴァストーク側をばかにしている節がある。純粹な魔術信仰が盛んなヴァストークは、技術面ではあらゆる点でザーパトに劣っているのは事実だが、世間で認識されているほどではない。ザーパト人の多くは、ヴァストークには背の高い建物は一切なく、食事といえば生の肉を手づかみで食べるのだと本気で思っているのだ。

「そういうのってさ、だれが考えて、だれが作るの？」

ぽつりと、小さな声でアエルが聞いた。アエルを見ると、やはり本を読み続けていたので、リストは一瞬聞き間違いかと思う。返事がないのを訝しんだのか、その目がこちらを見上げてきた。

「コスモスだよ。そういうのは、ぜんぶコスモスだと思ってい」

「やっぱり。希望の国コスモスね。やな感じ」

やな感じ、のところで、わざわざリストを見る目を細めた。貴婦人と髭の男性とが、まだ何やら話しているのを確認して、リストは少しアエルに寄る。

「……俺が所属してるところを？」

「コスモスでしょ。そうかなって。コスモスについて詳しいわけじゃないけど、やっぱりあんなタワーを建てるのはコスモスぐらいだよね」

内部にあれほどジュリスが活用されていなければ、確信には至らなかったが、昇降装置まで設置されているとなると、メランタワーを管理しているのがコスモスだというのは明らかだった。いまや世の中に溢れているジュリスを、開発したのも実用化させたのも、希望の国コスモスだ。となれば、そのタワーの豪華客室を無料利用できるリストの所属先は、コスモスということになる。

「あたし、コスモスって好きじゃない。コスモスが経営してるふつーの店は別だけど」

「まあ、そうだろうね……」

リストは苦笑した。アエルの言動を見ていれば、コスモスが好きといわれた方が驚く。

「じゃあ、アエル君はどんなものが好きなの。好きなものがあるなら、おにーさんが買ってあげよう。何でもいってごらん」

「『おにーさんが買ってあげよう』……」

目を見開き、リストの言葉をくり返して、アエルは思わず笑みをこぼした。こらえきれず、肩を震わせる。

「おにーさんって、ちょっとおもしろいよね。じゃ、町に着いたらパフェおごってよ」

それは年相応の笑顔だった。リストも顔をほころばせる。

「そうやって君が笑ってくれるなら、いくらでもおごるよ」

直後に、後悔した。アエルの表情が急に強ばったからだ。いつも冷めた目をしている少女が笑ったことが、ただ嬉しかったただけなのに。

その表情は、いつものように、リストの言葉が胡散臭いからとか、そういった理由で固まったものではなかった。アエルは何ごともなかったように目を逸らし、カーテンの隙間から見える景色に視線を移す。

奇妙な沈黙が訪れた。リストの前では、まだ乗客二人が話し込んでいる。話題はすでに変わっていたようだったが、そんなことはどうでもいい。同じ車内にいる他の二人の乗客は、どうやら眠っているようだ。

声をかけようとしたが、窓の外を見るアエルの横顔は、完全にこちらを拒絶していた。触れるな、話しかけるな——いわれてもいないのに、強い反発が伝わってくる。

彼女は笑えないのではない、笑わないのだ——リストは悟った。

そんなことは、知っていたはずなのに。

馬車は、林のなかを走っていた。メランからベイスへの道のりは、どのルートを取ろうとも、山をいくつか越える必要がある。窓から見える景色は、うっそうと繁る木々ばかりだ。いつの間にか太陽は完全に隠れたのか、それとも葉に阻まれて光が届かないのか、辺りは暗くなっていた。ジュリスの灯りが、進路と馬車を照らしている。馬車は夜通し走り続ける。数回の休憩を挟む以外は、基本的にはノンストップで目的地へと向かう。

「……………」

林の中で、何かが動いたような気がして、アエルはまばたきをした。パール色のラメの入った、それだけでも高級そうなカーテンを、そっと開ける。

ただでさえ、普通の馬車よりも速いスピードで走り抜けているの

だ。木々はどんどん後ろへと遠ざかっていく。そんな中で、何かは動くというの——間違っても、獣の類ではない。

「何か……」

何かがあるかもしれないと、漠然とした不安を口にしようとした。そのときにはもうすでに、ことは起こっていた。

「うわ——っ」

御者台から、短い悲鳴が聞こえた。それに気を取られる間もなく、車全体が大きく跳ねた。自分たちの入れられた箱を上下左右に振られたような、わけのわからない衝撃。だれ一人として、何が起こったかなど理解できない。

アエルは目を閉じなかった。自分の座っている目の前で、つい先ほどまで談笑していた貴婦人の表情が、驚きに変わるのを見た。そこに、恐怖の色は一切なかった。ただ、その目が見開かれる。

「——っ」

アエルは反射的に、リストの腕を引き寄せると、抱え込むようにして座席の下に潜り込んだ。二度、三度と衝撃が続く。

やがて、嘘のような静寂が辺りを包んだ。

「……いたた……」

アエルの腕の中で、リストが呻く。彼にはまったくもって状況が理解できていなかった。リストにしてみれば、車体が揺れ、アエルに引っ張り込まれて床に転がった、ぐらいの認識だ。

一瞬の出来事だったのか、長時間に及ぶ出来事だったのか——起こったのがついさっきなのか、ずっと気を失っていたのか、とにかく混乱して、時間の感覚すらつかめない。

「アエル君……?」

視線を上げようとして、リストは息を飲んだ。

すぐ目の前に、驚愕に染まった貴婦人の顔があった。深紅のドレスに身を包んだ彼女は、いまは額から鮮血を流していた。脈を測るまでもない、一目で、もう動くことがないのだとわかる。その顔は上下が逆さまだった。彼女の上半身は、だらりと座席から垂れてい

た。

貴婦人の身体を押しつぶすようにして、何か巨大なものが乗っかっていった。それは座席車だった。前から二つ目の座席車だ。後ろから恐ろしい勢いで衝突したのだろう、前の車の壁を粉碎し、座席に乗り上がった状態になっている。

やっと事の重大さを理解した。自分が生きていることが不思議なぐらいだ。座席の下にできた小さな空洞だけが、何ごともなかったように平然としているようだった。

「ケガは」

頭上から、静かな声が聞こえた。見上げると、不自然なほどに無表情なアエルの顔が、ごく至近距離にあった。

「オレは、どこも。君は？」

アエルはリストを見て、小さく笑った。リストは、自身の質問の意味に気づいたが、いつてしまったものは今更取り消すこともできない。

「これは……事故？」

「さあ」

気のない返事をして、アエルは座席の下から身をよじるようにして顔を出した。潰された貴婦人など見えていないかのよう、表情一つ変えず、そのすぐ横の隙間から身体を出す。窓はすべて割れていた。落ちていた木片で、窓枠に引っかかっているガラスをなぎ払うと、するとそこから脱出した。

アエルのようにはいかなかったものの、リストもどうにか抜け出す。貴婦人だけでなく、髭の男性も、眠っていた他の乗客も、もう二度と動かないであろう姿で転がっていた。

「……これは」

ひどい、などという言葉ではかたづけられず、リストは言葉を飲み込んだ。目を覆いたくなるような光景がそこにはあった。

アエルたちの乗っていた最初の車は、脇の木にぶつかったようだった。二台目がそのまま後を追ひ、止まりきれずに乗り上げ、三台

目も二台目に食い込むようにして横転している。

それが馬車であったのだと、いわれなければわからないほどに、もみくちやになった木の塊が無惨に横たわっていた。効力を失っていないジュリスの灯りが、静かに惨状を照らしている。

「俺たちのほかにも、生き残っている人がいるかもしれない」

ぼんやりと突っ立っているわけにはいかなかった。我に返り、リストが駆け出そうとする。

「いないわよ」

すぐ目の前で、場違いな甘い声がした。

「――？」

危うくぶつかりそうになり、リストは慌てて立ち止まる。気配がないどころか、そこにはだれもいなかったはずだ。それが、いつの間にか、長身の女性が立ちはだかり、リストと、その向こう側のアエルとを値踏みするように見下ろしていた。

「生存者は、アンタたち二人。これってやっと、アタリってことかしら」

それは、完全に太陽の沈んだ森の中、それもこの惨状を背景にするには、あまりにも不似合いな、美しい女性の姿だった。豊満な胸を強調するような、ぴたりと身体に張りついた漆黒のドレスに身を包んでいる。燃えるような赤い髪が、装飾の一部であるかのように簡素なドレスを彩っていた。

むせ返るような甘い香りを漂わせながら、鼻にかかった甘い声で、彼女はそっと尋ねた。

「アンタ、リストⅡグランデね？」

尋ねる形にはなっていたが、確信があるようだった。ドレスのスリットから足を出し、身を屈めてリストを見下ろす。

「その、趣味の悪い白いコート、聞いてたとおり。四つ目の馬車でアタリって、アタシ、運がいいのかしら、悪いのかしら。どう思う？」

「……？」

香りに酔ったかのように、頭がくらくらする。あまりにも場違いな女性の出現に、リストはこれが夢なのではないかとすら思った。

「これ、お婆さんがやったの」

感情のない声で問いを投げ、アエルはリストの右手を引き寄せた。庇うように、前に出る。

赤髪の女性は、気分を害した様子もなく、濃いアイシャドウの引かれた目をそっと細めた。

「もしかして、アンタがファルシューリゼ？　だとしたら、ずいぶん様変わりしたものだね。アタシの知ってる歌姫は、もっと高潔で美しかったけれど」

「質問に答えることもできないの」

リストはそっとアエルを見た。その声から感情は伝わってこなかったが、彼女は怒っているようだった。これほど身長差のある二人なのに、気迫で負けているようには見えない。

赤髪の女性は、艶笑した。

「いまのカンジは、ちょっとファルシューリゼっぽかったわ。リストⅡグランデと一緒にいるってことは、やっぱりそうなのかしら？」

「あのね、あたしはさつきから、質問してんだけど。あなたがやったのか、って」

一歩も引かず、問いをくり返して睨み上げる。その質問の意味を、リストはやっと理解した。つまり、これは事故ではないのだ。

背後に目をやると、車の下敷きになっている馬の姿が目に入った。動く様子はない。そういえば、馬のいななきも聞こえなかった——これは、何を意味するのか。

「そうよ。アタシがやったの。お馬さんをね、こうやって、貫いて」赤い髪を指に巻きつけて、一本引き抜く。軽く払うような仕草をすると、それは針のような鋭い刃に姿を変えた。彼女は何気ない動作で、刃を地面に突き立てる。

「悲鳴もなく、苦しむこともなく、お馬さんは一瞬でオシマイ。そ

の後はカンタンよ、あつという間に大惨事。アタシ、こういう地味なことって向いてないのよ。……そうね、四つ目でアタってラッキ―だったってことにしようかしら。もうね、イライラしてたのよね」

大きな動きで肩をすくめてみせて、ぞくりとするほど美しい笑みを浮かべる。

リストは、アエルの前に出た。名目上、護衛の意味合いで雇っているとはいえ、年下の少女の後ろにいつまでもいるわけにはいい。

「……君は、コスモスに雇われて？」

「雇われる？」

彼女は目を丸くした。

「本気でいつているの？ ああ、暗いから、わかりにくいのかしら。説明してあげたら、歌姫さん？」

ジュリスの灯りのせいで、暗いところか三人の周りは異様なほど明るかったが、赤髪の女性はそういっておどけたようにアエルを見た。

アエルは眉を寄せ、ため息を吐き出す。

「さつきから、やめてくれないかな。あたしには、アエルっていう名前があるんだよね。おばさんは……グリーヴァで、合ってる？」

「あら」

赤髪の女性――グリーヴァは、嬉しそうに笑んだ。

「アタシも有名になったものねえ。こうして、お会いしたことがあったかしら？」

「どうもハジメマシテ。フォシールのくせに、進んで人間に使役されてる化粧の濃いおばさんがいるって、知り合いに聞いたことあってね」

アエルの言葉で、リストも気づいた。クルイークと同じ、赤い瞳。ジュリスの灯りと赤髪でかえってわかりづらいが、全身がぼんやりとした赤い光に覆われている。

フォシールフォシール悪しき者だ。それならば、自身の髪を刃にするという手品まがいの芸当も、場にそぐわない異様な雰囲気も、納得できる。「どこかの組織に使われてるって聞いたけど——つまり、それがコスモスってことね。このおにーさんを追ってきたの？」

「なるほどね……」

リストは、やっと状況を理解した。コスモスがフォシールフォシール悪しき者者を使役しているという話は聞いたことがなかったが、そういうことならば、間違いなく標的は自分だ。自分と——そして、隣にいる少女。

そして、気づいた。グリーヴァの、「四つ目」という言葉。

さっと、血の気が引いた。まさか——

「まさか、アウレーから出る馬車を、手当たり次第襲ったのか？」

「あらオニイサン、怒ると色っぽいわね。その方がいいわよ。その下がり目、魅力的だから」

否定する気はないようだった。長い足をそっと前に出し、怒りに染まるリストの顔をのぞき込むと、その顎に指先を当てる。

「アンタがイケナイのよ、逃げたりするから。しかたないじゃない？」

リストは手を振り払った。自分でも驚くほどに、強い怒りが渦巻いていた。自分たちを探す、ただそれだけの目的のために、四つの馬車が襲われ——そして、たくさんの人間が死んだのだ。

「いいわね、その感情……とってもおいしいわ」

赤い口から長い舌を出し、べろりと唇を舐め上げる。その挙動すらどこか艶めかしく、リストは背筋が急に冷えるのを感じた。巨大な怒りに支配されそうだというのに、身体は動かない。怒りすら上回るほどの、確かな恐怖を、感じているのだ。

「おにーさん、もしかして自分のせいで、とか思ってるの？ 勘弁してよ」

剣呑な目つきでリストを見上げ、アエルは疲れたように嘆息した。グリーヴァとリストが対峙する中、自分には関係ないといわんばか

りに、体操でもするような動作でゆっくりと首を回す。足下に転がる棒きれに目をやると、足先で蹴り上げてキャッチした。

腰を屈め、少し離れたところに円を描く。半径一メートルほどの小さな円だ。その中に、サインでもするように手早く何かを書き込んだ。

「何か行動を起こすなら、必ず何かはついてくる。いい大人なんだから、わかるでしょ、そんなこと」

手を払い、ゆっくりとした足取りで戻ってくる。急に素早く踏み込むと、リストの腕をつかみ、円の中に押し込んだ。

不意を突かれ、リストはよろめく。しかし、地面に手をつくことはなかった。見えない壁にぶつかり、そのままほとんど身動きが取れなくなる。

「何を——！」

叫びかけたが、その声すら深い地中にあるかのようにくぐもっていることに気づいた。アエルが地面に描いた円と、そこに書き込まれた模様のようなのが、青白い光を発している。

防御結界に閉じこめられた——気づいたときには、もうどうにもできない。

「おぼさんが何者だろうが、目的がなんだろうが——」

あっさりとリストに背を向けて、アエルはグリーヴァに向き直った。

「あたし、おぼさんのいいなりにだけはなんないよ。ちょっと久しぶりに、ムカついてんだよね」

「あら、こんなことで？」

グリーヴァは唇の両端を奇妙にねじ曲げた。目尻を下げると、笑いを必死に押し殺しているような表情になる。

「おかしい話！ アタシの殺した数なんて、アナタサマには遠く及びませんわよ？」

「……………」

アエルは無言で動いた。

戦闘に関する経験値がゼロに等しいリストには、目で追うことすらほとんどできなかった。体勢を低くして地を蹴ったかと思うと、次の瞬間にはその姿が見えなくなる。

「いまの味！ ステキ、もつともつと怒ってよ、歌姫さん！」

グリーヴァは歓喜に打ち震え、両手をかけると、ためらいもなく赤髪を数本引き抜く。宙に舞ったそれは、瞬時に刃に姿を変えた。四方八方へ、赤い刃が飛び散る。

「――！」

自分に向かってまっすぐに刃が飛んできて、リストは思わず目を閉じかける。しかし、狭い視界の中で、それは結界に阻まれて地に落ちた。結界がなければ、避けることなど到底不可能だったろう。

だがもちろん、守られているのはリストだけだった。馬車の中で動くことのないかつての乗客たちに、容赦なく刃が突き刺さる。

すでに死んでいる身体だ。それでも、目を覆いたくなるものがあった。

「アエル君――！」

たまらず叫ぶ。その声を合図とするように、周囲の木々が一度に倒れかかってきた。寸分の狂いもなく、すべてがグリーヴァめがけて、放射状に一点に集束する。

「ちっ」

舌打ちして、グリーヴァが跳躍する。砂と葉が舞い上がり、あたりを照らしていたジュリスのいくつかが碎け散った。もう二度と動くことのない馬車も、木々に埋まる。

「お婆さんのほかに、十三人。ずいぶんと大げさじゃない」

いつの間にか、倒れた木の上に、アエルが立っていた。空中で難を逃れたグリーヴァも、慎重にアエルと距離をとって着地する。ふわりと、ドレスの裾と赤髪が遅れて落ちる。消えかけた灯りに照らされるその姿は、こんな状況でなければ、幻想的でさえあった。

木々は、器用にリストを避けてなぎ倒されていた。状況についていけず、見えない壁にへばりつくリストの足下に、黒装束の男が落

ちてくる。気を失っているようだった。

「十三人……」

結界のせいで触れられなかったが、しゃがみこんで観察する。黒い布で隠されて、顔もわからない。しかし、リストには心当たりがあった。

表向きには、コスモスは四つの階級——上から、アインス、ツヴァイ、ドライ、フィアアの四つだ——で構成されている。だが、そのどこにも属さない、極秘任務を請け負う少数精鋭の部隊があると聞いたことがある。

階級名は、ゼロを表す、ヌル。組織長ティグレⅡガナドルではなく、その父、コスモス設立者であるカメロスⅡガナドル直属の部隊だという話だったが。

「……そこまで動いているのか」

リストは唇を噛んだ。自分はどこまでも、考えが甘かったらしい。「いいわ、どうせ数に入れてない。……そんなことより、さすが、ためらいなく死体をつぶしたじゃない。そういうのって、ナニ？ 死者への冒瀆っていうんじゃない？ そういうところ、尊敬するわ」

「冒瀆？」

アエルは鼻を鳴らした。

「ばかいわないでよ。死んじゃったものは、もう冒瀆もできない」
「……………」

その言葉には何か強い意味が込められているような気がして、リストがアエルを見上げる。しかし、彼女の冷めた目からは、やはり何の感情も読みとることはできない。

「ねえ、聞いてみたいことがあったのよ、歌姫さん」

グリーヴァは両手を腰にあてると、挑発するようにアエルに視線の高さを合わせた。

「アタシたちってね、人間を殺すことはなんとも思わないけど、フオシールフオシール悪しき者同士殺し合うことは滅多にないの。罪の意識があ

るからよ……わかる？」

罪の意識、という言葉をさらりと口にする。アエルは小さく眉を動かしたが、答えない。

「アタシね、アンタに興味があつたの。アタシたちの心すら、あれだけ震わせる歌を歌う歌姫が——息を吸うみたいにたくさんの人間を殺した人間が、いったいどんな顔して生きてるのかって。ねえ？ アンタ毎日楽しく生きてるの？ それってどんな気分？」

「知りたい？」

氷のような微笑みを見せて、アエルは何でもないことのように問いかけた。

グリーヴァは、毛先を人差し指にくるくると巻きつけて、小さな動きでそれを引き抜く。彼女が息を吹きかけると、それは剣ほどの太さの刃になった。右手にからみつき、まるで腕の一部であるかのようにだ。

「もちろん。でも、そうね——どうせなら、死にたくなるぐらい痛めつけて、それから聞くことにするわ」

腰のあたりで水平に刃を構え、グリーヴァは地を蹴った。彼女がいた場所に残像のように残った無数の髪の毛が、その姿を刃に変え、宿主の突進に合わせてアエルめがけて飛びかかってくる。

しかし、アエルは避けなかった。

微動だにせず、笑みさえ浮かべて、そこにいた。

「——！」

声にならない悲鳴をあげたのは、リストだった。

彼の目の前——倒れた木の上で、アエルはグリーヴァの刃に貫かれていた。手にした刃と、空中からの刃、それらすべてを一切避けることなく。

「……どうして、って顔してるね」

彼女は確かに貫かれていた。

身体のうちこちらから血が流れ出す。それでもアエルの声音には、一切の感情がこもらない。

「痛くないわけじゃない。ちゃんと、痛い。でもこんなのは……痛み
みのうちには入らない」

「――ア、アンタ……！　どうかしてる！」

顔色を変えて飛び退こうとしたグリーヴァの右手をつかみ、もう
片方の手で彼女の頬に触れた。前に垂れてきていた赤い髪にそっと
触れ、恐怖の色さえ帯びたその赤い瞳を見つめる。

「知りたいんでしょう？　あたしの感情を餌にしなよ。いくらでも食
べるといい。死にたくなるぐらい痛めつけて、なんて、おもしろい
こというよね」

「……………！　や、やめて………！」

アエルの両手が、青白い光を帯びた。グリーヴァの表情が、苦痛
に歪む。

「ちゃんと受け止めてよ、ぜんぶ」

身をよじるグリーヴァを、アエルは決して解放しなかった。頬に
触れる手に力を込める。

「あたしは、最初から、死にたいの」

グリーヴァの全身が波打った。

アエルの触れている頬から、腕から、全身に大量の液体が流れ込
んだかのように、どくどくと皮膚が揺れる。ゆっくりと、身体が膨
張していく。

「アア………！」

「アエル君！」

破裂するかと思われた、まさにその瞬間に、リストの声がした。

結界に阻まれ、ほとんど音は通らないはずなのに、それはアエルの
耳まで確かに届いた。ほんの一瞬、注意が逸れる。

「――…！」

もちろん、それを見逃すグリーヴァではなかった。後ろに跳躍し、
アエルから距離を取ると、肩を上下させて酸素を吸い込む。彼女は
アエルを鋭く睨みつけたが、何もいうことなく、そのまま林の中へ
姿を消した。気配が完全になくなるまでに、たいした時間はかから

なかった。

アエルは息を吐き出した。ぼんやりと、そのまましばらく突っ立っていたが、やがて緩慢な動作で、突き刺さった刃を一本一本抜き始める。

引き抜いたときには、すでに傷口は塞がっていた。

嘘

少年はただ、そこに座っていた。

最初は、西のはずれに住んでいたひとりの老人だった。身体中に斑点が浮き出て、三日後に死んだ。老人には身寄りがなく、村人たちはたいして気に留めなかった。

そのうちに、村中の老人が死んだ。やがて大人たちの身体にも斑点が現れ始めた。呪いか、病か——騒ぎ始めたときにはすでに遅く、ひとり、またひとりと、倒れていった。

村は、こどもたちだけになった。とはいえ、彼らも例外ではなかった。親を亡くした悲しみにうちひしがれているうちに、斑点に蝕まれた。

東のはずれに住む少年ひとりが、生き残った。

悲しめばいいのか、嘆けばいいのか、憤ればいいのか——少年にはわからなかった。だから少年は、腐臭を発する両親の前で、ただ座っていた。

腹に、ぽつりと、斑点が現れたことに気づいた。

ああ、やっと——少年は思った。

これでやっと、終わるのだと。

どこからか、歌が聞こえてきた。

この世のものとは思えないほど、それはあまりにも美しかった。

天使が歌っているのだと、少年は思った。

少年の目の前で、母親であったものが、砂の人形が崩れるように灰に姿を変えた。自分の腹を見ると、あったはずの斑点は消えていた。

少年の家の戸を開けて、ひとりの少女が彼の前に現れた。

長い黒髪の、表情のない少女だった。

「あなたは、生きたい？」

その声は透き通るようで、少年は、歌っていたのが彼女だったのだと知った。

少年が答えないでいると、彼女は続けた。

「それとも、死にたい？」

その問いは、胸の深いところまで落ちてきた。

みんな、死んだ。親も、友人も。だれもかもが。

死にたいと思った。

ここは、自分のいる場所ではないのだと。

「ぼくは……」

その声はかすれていて、自分のものではないかのようにだった。少年の目に、枯れたと思っていた涙が溢れた。

心とは裏腹に、彼は震える声で、告げていた。

「しにたくない……！」

「そう」

黒髪の少女は、ひどく寂しそうな目で、そっと微笑んだ。

その瞳を見て、少年は気づいた。

彼女は何も語らなかつたけれど、気づいてしまった。

ああ、彼女は――

リストは目を開けた。

寝るつもりなどなかつたのに、いつの間にか寝てしまっていたらしい。木々の間から、月を見上げる。ほとんど動いてないところを見ると、あまり長い時間は寝ていないようだ。

隣に視線を移すと、木の幹にもたれかかり、アエルも寝息をたてていた。その手から、本がずり落ちそうになっている。リストが渡したジュリスの灯りで読書をしていたのだが、そのうちに眠ってしまったようだ。

寝顔を見ていると、先ほどのできごとが嘘のようだった。穴だらけになったシャツは脱ぎ捨てられて、真新しいシャツに着替えられ

ている。小さなポーチに圧縮して入れてあったようだ。そういえば、最初に会った店で衣類を大量に持っていったな、と思い出す。

白いコートを脱いで、起こさないように細心の注意を払いながら、そつとその華奢な身体にかける。考えてみれば、寝ているところを見るのは初めてだ。

リストは、そつと目を閉じた。ずいぶん昔の話なのに、夢の中の彼女の姿は、明確に思い描くことができた。目を開けて、眠るアエルを見つめる。ずいぶんと、姿は変わってしまったけれど。

「へんたーい」

すぐ背後で声がして、リストは思わず大声をあげるところだった。ふり返ると、黒縁眼鏡の少年が、リストの背にもたれかかってきていた。

「アエルちゃんの寝顔なんてレアなもの、なんで出会ってすぐのタレ目が拝んでんだよ。ひでー話」

「クルイーク……君さ、ちょっと今更ってタイミングだね」

「え、なんで」

不思議そうにまばたきをするクルイークに、リストは丁寧に説明してやった。馬車が襲われたこと、悪しき者であるグリーヴァが追ってきたこと。

話せば話すほど、この少年の出現がもう少し早ければ、と思わずにはいられない。こんなでも、いれば戦力になったはずだ。少なくとも、自分よりは——そう口に出すのは癪に障ったので、いわないでおいたが。

「グリーヴァ！ あのおばさん、人間のところで使われてるって噂、本当だったのかよ。物好きもいたもんだな」

目を丸くして、クルイークが吐き捨てる。もしかしたら、アエルにグリーヴァの噂を教えたのはこいつかもしれないな、と思いながら、リストはぼんやりと二人の関係に思いを馳せた。仲良し、にはとても見えないが。

「人間にストーカーしてる君だって、充分物好きなんじゃないの。」

あのグリーヴァってというのが聞いたら、笑いながら同じこといいそう」

単純な疑問を口にした。クルイークは勝ち誇ったように笑む。

「オレはいいんだよ」

何がいいのかわからない上に、ストーカーについて否定する様子もない。リストは呆れて、それ以上いえなくなってしまった。

「んなことより、あんたのこと調べたぜ。そっちのがストーカーじゃねえか」

「調べたって……どうやって」

リストが聞き返すと、クルイークの方が驚いたような顔をする。

「あんたさ、^{フオシール}悪しき者なめてんだろ。ふつーは興味ねえから、人間のこと調べたりしねえけど、やろうと思えばカンタンだ。オレらの中にも、情報通ってのはいるしな」

「……ああそう。まあなんでもいいや」

リストは億劫そうに手を振った。どうやら自分は興味を持っていただいたようだが、喜ぶべきなのか悲しむべきなのかわからない。先ほどのできごとで、もう充分以上に疲れているのだ。頭もまともに働かなかった。

「……あんたさあ……」

多少拍子抜けした様子で、クルイークが唇を曲げる。昨日会ったときはもっと熱い人間だという印象だったが、こちらの方が素らしい。張り合いがないにもほどがある。

何か不満めいたものを口にしようとしたが、リストの表情が急に緊張を帯びたのに気づくと、訝しげに視線を追った。

「なんだよ」

「しっ——」

リストは思わず人差し指を立てたが、それが正しいのかどうかはわからない。目線の先には、眠っているアエルの姿。

アエルは、一目で異常と思えるほどの汗をかいていた。顔色も悪く、寝息も安定していない。うなされているようだ。少なくとも良

い夢を見ている様子ではない。

「……起こした方がいいんじゃないの」

声をひそめてクルイークがつぶやく。リストには答えられなかった。出会って丸二日、その二日間でやっと初めて眠っているというのに、起こすのが正解なのだろうか。起こしたら最後、また何食わぬ顔で本でも読み出しそうだ。身体のためには、睡眠を取っておいの方がいい。

とはいえ、あまりにも苦しそうな寝顔だった。ふと、リストは考えた——彼女はなぜ寝ないのか、なぜいつも本を読んでいるのか。

「——！」

眠ったままで、アエルは鋭く息を吸い込むような、声にならない悲鳴をあげた。起きている状態からは想像もできない姿だ。その瞳から、涙がこぼれ落ちる。

リストは無言で、アエルにかけていたコートを、彼女の頭からかけ直した。起こすにしろ、起こさないにしろ、じろじろと寝顔を見ているというのは好ましくない。

「君たちは……」

クルイークに視線を戻し、思い直して言葉を変えた。

「君は、アエル君のこういう感情も、餌にしているの」
不機嫌な声で問うと、クルイークは肩をすくめてみせる。

「好みの問題だね。オレは好きじゃない、アエルちゃんのこういうの。グリーヴァのおぼちゃんとかは好きそうだけど」

「……好みとかあるんだ」

それは単純に驚きだったが、突っ込んで聞いてみる気にもなれなかった。どんな感情がおいしいのか、などという話題で花が咲くとも思えない。

「本当にヒマなんだね、クルイーク」

不意に、アエルの声した。

いつの間にか目を覚ましていたようだった。リストがコートをかけ直したときに起きてしまったのかもしれない。ついさっきまで眠

っでいて、しかもひどい顔色をしていたことなど微塵も感じさせない様子で、クルイークに冷めた目を向けていた。

「来るならもうちょっと早く来ればいいのに。永遠に来ないのがいちばんいいけど」

基本的にはリストと同じ感想だったようだが、彼よりもおひどい。クルイークは慣れているのか、気分を害した様子はなかった。

「四六時中いっしょにいて欲しいなら、そういいなよ、アエルちゃん」

「頭おかしいんじゃないの」

ずばりと切り捨てる。リストはちょっとだけいたたまれなくなっただが、クルイークは喜々としてリストを乗り越え、アエルに詰め寄った。

「グリーヴァとやりあったらしいじゃん。どうだった？ オレ、あのおぼちゃん嫌いなんだよ。立ち会えなくて残念」

「自分に酔ってる感じだった」

疲れたようにアエルが感想を述べる。そういうことを聞きたかったのではないだろうに、とリストは思ったが、アエルの意見には賛成だった。確かに、自分の世界に生きている感があった。

「おにーさん、これ、ありがと。こういう扱って悪くないね」

アエルは立ち上がると、皺だらけのコートをリストに差し出した。手で隠すこともなく大きくあくびをして、ついでに伸びをする。

「……アエル君」

「あ、あくび？ はいはいゴメンナサイ」

リストの小言を先取りして、アエルが適当に謝罪を述べる。しかし、彼のいいたいことはそこではなかった。

「まだ寝てなよ。もうしばらく朝は来ないよ。夜にこんな森の中を歩くのは、やめた方がいい」

「え、歩かないよ？」

きょとんとして、アエルはもともと大きな目をさらに大きくした。ね、と首をかしげるようにしてクルイークを見る。

「う、アエルちゃんがこういうテンションのときって、ろくなことないのに……！ それでもときめく愚かなオレ！」

「ベイスまで送って欲しいんだけど、いい？」

アエルは計算尽くされた上目遣いを披露した。それを下から見ているリストは、見てはいけないものを見てしまった、という顔で、思い切り眉を寄せる。

「アエル君、そんなキャラじゃないでしょう。なにそれ、なんか疲れてんの？」

「疲れてんの」

あつさりと素に戻り、いつもの目でアエルは吐き出した。クルイクは全身でがっかり感を表し、肩を落とす。

「あまりにも短い……もーちよつとがんばれよ……。つーかアエルちゃんさ、オレのこと便利なペットかなんかだと思ってない？」

「ペット？」

目を細めて、ばかにしたようにアエルが聞き返す。

「何いってんの。ペットってのいうのはかわいいもんでしょ」

言外におまえはかわいくないと宣告され——別にかわいいと思われないわけでもないのだが——クルイクはさらに肩を落とした。何かを期待したわけではないが、それでも寂しいものはある。

「まあ、いいか。これで貸し二つだからな、アエルちゃん。使役されるのは疲れるから、出血大サービスでオレの意志で送ってやるよ」
「え、そういうことできるんだ」

リストは思わずそう口に出して、黒縁眼鏡の少年をまじまじと見た。最初から悪しき者のことを理解できるとは思っていないが、それにしても何を考えているのかわからない。自分の意志でできるのなら、メランタワーのときもやってくれれば良かったのに。

リストの言葉は無視して、準備運動なのか、クルイクは両腕を上げて左右に身体を傾けた。ふと思いついたように、つぶやく。

「そういえば、ヴァストークに行くって話なんだよな」

独り言なのか、それとも問いかけたものだったのか——どちらに

しても、両者ともさらりと答えられる内容ではなかったので、おかしな沈黙が訪れる。

「もうヴァストークまで送ろうか？」

「……どういう風の吹き回しなの、気持ち悪い」

アエルは本気で気持ち悪そうな顔をした。

「タレ目のこと調べてるときに、噂に聞いてさ。またザーパトとヴァストークで戦争が始まるらしいじゃん。そんな状態でベイスに行っても、船なんか出ないんじゃないの？」

「なにそれ」

眉をひそめ、アエルはリストを見る。彼も同じような顔をしていた。まったく初耳だ。

「……いや、いいよ、ベイスまで」

「あんたに聞いてねーよ」

「うん、そういわれるだろうと思ったけど」

リストは首を左右に振った。本当のところ、ベイスを通り越してヴァストークに行かれては困るのだ。しかし、正直にそういうわけにもいかない。

「その話、気になるけど。確かめるって意味でも、とりあえずベイスまで——ってことだね、おにーさん？」

アエルに話を振られて、慌ててうなづく。クルイークはおもしろくなさそうな顔をしたものの、了解したようだった。小さな力で地面を蹴って、彼は空へ飛び上がった。

＊

コスモスの本拠地があるアウレーの町から、港町ベイスまでは、一般の馬車に乗って丸五日かかる。それでも、道が整備されたことによって、ずいぶんと移動は楽になった方だった。五日でベイスまで行けると聞いたときには、ずいぶん便利になったものだと思嘆したものだっただが。

「一日で着いちゃうなんてね……」

馬車を降りて、人通りもまばらな早朝の街道に立ち、エイラミリシアはため息を吐き出した。まだ身体が揺れている感覚が残っている。コスモスが所有する、「特別」な馬車に乗ってアウレーを出発したのが昨日の朝。まさか、翌朝に着いているとは思わなかった。小さな車を引っ張ってくれた二頭の馬は、どんな無理をさせられているのだろう——つぶらな瞳をした馬が帰りも激走しているのかと思うと、胸が痛まないではなかったが、考えても仕方がない。

それに、コスモスが研究しているのは、そういうことなのだ。エイラが気に病むのは、あまりにも身勝手というものだった。

充分に暖かい季節だったが、港町の早朝ともなると、風は冷たく、自分は歓迎されていないのだと感じた。茶色のコートの首元を抑えるようにして、それでも背筋を伸ばして、エイラは歩き出す。

とうとう見つけた、だからベイスに行く——リストから聞いたのは、たったそれだけだ。しかも、それからもうずいぶんと月日が経っている。まだこの町にいるとは思えない。本当は、いなければいいと思う。

だが、彼女には、ここに来るという選択肢しかなかった。ここに来て、形だけでも彼を捜さなければならなかった。

人気のない街道を進むと、そのうちに広場に出た。中央に色とりどりの花が植えられた巨大な花壇があり、花壇を囲むようにして円上に商店が並んでいる。すでに半分ほどの店が開いており、主婦らしい客の姿もちらほらと見える。

広場を抜けても、商店は並んでいた。どこか、適当な店に入って情報を集めようかとも思ったが、とはいえどうすればいいのかわからない。白いコートのタレ目を見ませんでしたか、などと聞いて回るのも気が進まない。

すでに営業しているこぢんまりとしたカフェが目にとまった。表に看板が出ていて、特製コーヒーとモーニングサンドウィッチの宣伝がはり付けられている。空腹でないわけではない。

店に入って休憩して、ついでに彼のことを聞いてみようか――逡巡したもの、初めて訪れる町のカフェというのは、エイラにとって敷居の高いものだった。『カフェージョカットロ』のようなチェーン店ならともかく、地元密着型のカフェに入るには勇気がいる。結局エイラは、カフェの隣を通り過ぎた。

壁一枚を隔てた向こう側に、リストがいることなど、気づくよしもなかった。

「見てる方が胸やける」

ベイスについて早々、腹が減ったということで手近なカフェに入り、おごりであることを確認してスウィーツパフェを食べ始めたアエルを見て、クルイークはそう感想を述べた。男性二人は、オススメだというコーヒーとサンドウィッチを注文したのだが、食べるのとよりもアエルの観察に撤してしまっている。

今回ばかりは、リストもクルイークの意見に賛成だった。

「睡眠もほとんどとっていないのに、朝一番でそんな甘いもの、よく食べられるね。店のおじさん、二回も注文聞き返してたよ」

「あれは耳が遠いだけなんじゃないの」

にべもなくいい放ち、長いスプーンでクリームをすくっていく。メランの町でパフェ全種をおごったときにも思ったが、アエルは決しておいしそうには食べない。年頃の娘が幸せそうに甘いものをほおぼる姿というのは微笑ましいものだが、アエルはとにかく黙々と食べるのだ。

「アエルちゃんさ、食べることに執着すんのな。それって矛盾してねえの」

手持ちぶさたなのか、飲む気もなさそうなのにコーヒーに山ほど砂糖を入れながら、クルイークがそんなことをいいだした。すかさずリストが非難がましい目を向ける。

「そのいいかたはないでしょう。あと、もったいないから砂糖で遊ばない」

「あんた、オレの身内かよ」

うんざりしたようににらみ返す。それからクルイークは、サンドウィッチがまとめられていたピックで、パンの耳をいじり始めた。とことん食べる気はないらしい。

そもそも悪^{フオシール}しき者は、食事というものを必要としていない。送ってもらっ

た札ということで、リストが社交辞令で声をかけたのだが、断るところかのこのこついてきた。リストにとってはまったく予定外で、おもしろくない状況だ。

「あたしは、自虐趣味ってわけじゃないの」

縦に長いグラスの、底に残ったクリームもすくい上げて、アエルは淡々と答えた。

「矛盾じゃないよ。まったく別の問題でしょ。身体に穴が開いたりすると、甘いものが欲しくなるんだよね」

「……間違ってる、間違ってるよこの会話」

リストは額に手を当てた。投げやりな気持ちでサンドウィッチをつかむ。サンドイッチではなく、サンドウィッチであることが重要らしいそれは、オススメとするだけあって、確かになかなかの味だ。自家製ソースが濃厚な風味を演出している。

「なあ、あんた」

年季の入った木製の丸テーブルを、遠慮なく数度叩いて、クルイークが声を張り上げた。はい、と間延びした声を返し、エプロンをつけた女性が駆けつける。店長らしい男性をお父さんと呼んでいたのも、この店の娘なのだろう。客もアエルたちだけだが、従業員も他には見当たらない。

「ご注文ですか？」

そばかすの眩しい、妙齡の娘だ。そうじゃなくてさ、とクルイークは続けた。

「また戦争が始まるって噂を聞いたんだけどさ。これってデマ？ あんたも聞いたことあんの？」

注文どころか、突飛な質問だ。娘は戸惑ったように眉を下げ、カウスターの父に助けを求める。グラスを磨いていた店長は、やはり困ったような顔をした。

「デマかどうかは存じませんがね、噂があるのは確かですねえ。なんでも、闇海にヴァストークの船がたくさん出て、攻撃の機会をうかがってるとかなんとかね。おかげで、漁は制限されるは、向こうへの船は出ないわ……地元のわしらにとっては厄介な話ですわ」
「そうなんです」

父親の言葉を受けて、娘は急に泣きそうな顔をした。

「でも、そんなのはいいんです。お魚が捕れなくなっちゃって、戦争が起これないなら、それで。デマならいいんですけど……」

「ふーん」

クルイークは気のない返事を返した。ヴァストークの船が攻撃の機会をうかがっているという具体的な話が、果たしてデマだったということがあるだろうか。制限される前は船も出ていたのだろうか、船乗りの目撃談に基づいた話と考えるのが自然だ。

「……やけに気にしてるけど。そういうの、君でも気になるの」

娘がテーブルから離れてから、リストがそつと尋ねる。君でも、フォシールというのは、もちろん、悪しき者でも、という意味合いだ。

「別に」

しかし、帰ってきたのは答える気のない一言だった。了承も得ずにクルイークのサンドウィッチに手を伸ばしたアエルが、代わりに答える。

「人間の感情を餌にするなら、戦争なんてご馳走のチャンスなんですよ」

「ああ、なるほどね……」

納得したものの、やはりこの会話も間違っているような気がした。なんというか、健全でない。

「そんな話よりさ、オレがなんでこんな店までついてきたかわかってんの？」

こんな店、が聞こえたのか、店長がごほんと咳払いをする。もちろん、それを気にするクルイークではない。

むしろ、聞かれたリストが気になったが、フォローよりも問いの意味の方が重要だった。心当たりがまったくない。

「……なんで？」

「なんで？」

リストどころか、アエルも同じように聞き返す。クルイークはいらいらとテーブルを叩いた。

「どんなツラしてアエルちゃんに本当のことなのか、見たかったからだよ。それ以外ねーだろ」

不機嫌そうに吐き捨ててから、思い直して深く椅子に座り直すと、底意地の悪そうな薄い笑い方をしてみせた。

「襲われた元凶もぜんぶあんただろ。何が味方だ、笑わせる」

「もしかして君は、怒ってるの？」

もし本当に怒っているのだとしたら——フォシール悪しき者がだれかのために怒っているのだとしたら——それはリストにとって、驚くべきことだった。しかし、間違った質問だったとすぐに後悔する。目に見えて、クルイークの表情の不快感が増したからだ。

「アエルちゃん、狙われてんのはタレ目じゃなくてアエルちゃんの方だって、気づいてんだろ。ぜんぶこいつのせいだ。もーこいつさ、殺しちゃっていい？」

「なんであたしの了承が必要なの」

クルイークのサンドウィッチも異常に甘いコーヒーも、残らず征服し終えたアエルが、口元を拭いながら淡々と問い返す。

「おお」

クルイークは目を見開いた。

「目からウロコ」

「ちよっと、アエル君。そこは嘘でもダメっていったいてよ」

リストは慌てた。まだ死ぬわけにはいかない。

「そんな義理ないもん。結局、何一つ説明されてないし。……それ

どころか、嘘なんですよ、解呪の妙薬がどうの、って話」

アエルの言葉に、リストは思わず言葉に詰まった。驚いたように、クルイークもこちらを見ている。正直な反応に、アエルは苦笑した。もともと、うますぎる話だとは思ったが、何か根拠があるわけではなかった。ただ漠然と、そう思っただけだ。騙し続ければいいものを、そんな表情をされてしまったのでは、確信しないわけにはいかない。

嘘だったのだ。最初から嘘をかざして、リストはアエルに近づいた。

「じゃ、ベイスっていうのも、偶然じゃないんだ？」

笑みを浮かべたまま、問いを重ねる。え、なにそれ、とクルイークがアエルを見たが、それには答えない。

リストは観念した。この場に第三者であるクルイークがいることが不満だったが、それでももう、説明するしかなかった。

「……君のお母さんが、病に倒れたのを、知ってるかな」

そう切り出して、注意深くアエルの表情を観察する。彼女が顔色を変えるのを見て、リストは気づかれないように、静かに安堵した。「ずっと昔にね、俺は君に会ったことがあるんだ。どうしてももう一度君に会いたくて、魔法力を特定する研究を始めた。かつて君が残した魔法の痕跡は力強く、それ自体を特定するのにそれほど時間はかからなかったけど、その後の君を追うともなれば話は別だった。何年も、何年もかかったよ」

テーブルの上で、リストは両手を組んだ。思いを馳せるように瞳を閉じる。

「研究っていうのはね、お金がかかる。バックアップをしてくれるっていうんで、俺はコスモスに所属した。コスモスは、君の行方を捜しているようだった。全面的な援助を受けて、研究を重ねて——やっと、君の力の跡を見つけた。力の痕跡が、ベイスの商家で確認されたんだ。約十七年前……君は、とてつもなく大きな力を使ったね？」

「……ちょっと待てよ、おかしいだろそれ」

クルイークが声をあげる。アエルはちらりと彼を見た。

「お母さん、って何だよ。アエルちゃんの母親なんて、いま何歳だ
って話だろ。つーか生きてんの？」

「あたしを産んだ人は、まだ四十歳だよ」

ため息を吐き出すようにして、答える。クルイークは眉根を寄せ、
リストの説明とアエルの言葉を頭の中でくり返した。理解できる気
がしない。

リストにとっては、クルイークが事実を知らないということの方
が驚きだった。ということは、力の波動だけを察知して、彼女がそ
うだと確信するに至ったのだろう。リストには不可能
な芸当だが、悪^{フォシール}しき者にとっては難しいことではないのかもしれな
い。

「……わかった」

アエルは短くつぶやいた。長い沈黙を挟んで、あきらめたように
続ける。

「わかったよ。行こう」

力が抜けて、リストは思わず頬をゆるめた。

一人で行けといわれても、行ける気がしなかった。

家を飛び出して六年——もう二度と、戻ることはないと思ってい
たのだ。

優しすぎた、あの家。あれほど後悔することなどもうないと、思
っていたのに。

「……鳴らそうか？」

玄関戸の前で固まってしまったアエルに、リストが遠慮がちに声
をかけてくる。リストとしては、アエルが一人で行けばいいと提案
したのだが、それなら行かないといわれたのでは折れるしかない。
結局、興味があるという理由でクルイークもついてきていた。

「立派な家じゃん。金持ち？」

空気を読む気配もなく、頭の後ろで両手を組んだクルイークが、家を見上げながらそんなことをいう。ベイスの町はずれにあるイリス家は、豪邸というわけではないものの、一般家庭にしては大きく、造りもしっかりしていた。この地方では多少名の知れた商家なのだ。

玄関戸の上部中央には、鳥をかたどったモチーフ、そのすぐ下に鎖が伸びている。それを引っ張ればいいのだ。アエルがいた六年前から、変わっていない。

ここまで来て、呼び鈴を鳴らすのを他人任せにするのもおかしい話だった。アエルは息を飲んで、鎖を引いた。

家の中で鐘が鳴り響くのが、外までかすかに聞こえてきた。急に逃げ出したくなって、アエルはさっと踵を返す。そのまま走り出そうとしたアエルの首根っこを、リストが捕らえた。

「それじゃイタズラだよ、アエル君」

そんなことはわかっている。わかっているが、どうしようもないのだ——アエルは、困惑しきった目でリストを見上げた。いつものように、取り繕うことなどできる気がしない。

「そんな目で見られたらね、おにーさん何でもいうこと聞きたくなっちゃうけど。でも、行くなって決めたんでしよう」

「なんだそのセリフ回し……！ 変態くせえ」

淡々と諭すリストを、目を見開いたクルイークが穴が開くほどに凝視する。いつもならアエルも同じ感想を抱くところだが、いまはそれどころではない。

アエルはうつむいた。そうだ、行かないという選択肢もあったのに、行くと決めたのは自分だ——あの人が病に倒れたのだと聞いて、それでも知らない顔をしていることはできない。

たとえばそれが、どんなに身勝手なことだとしても。

「はいはい、ただいま」

玄関戸が開いて、エプロン姿の女性が顔を出した。四十代半ばほどの、ふくよかな女性だ。栗色の髪を、頭の後ろで団子状にまとめ

ている。

一番最初に、長身のリストの姿が目に入ったようだった。彼女はまばたきをして、ああ、と声をあげる。

「あなたは確か……以前にもいらっしやいましたよね？　どうぞ、中に——」

彼女の動きが、ぴたりと止まった。その目は、リスト、クルイクと順に見て、やっとアエルを捉えたようだった。徐々に瞳が大きく開かれる。

「……アエルちゃん？」

かすれた声で、声をかける。

逃げ出そうという体勢で背を向けていたアエルは、観念して向き直った。

「………久しぶり、ミーチェ」

「——！」

エプロン姿の女性——ミーチェは、文字通り飛び上がった。そのまま、客人に声をかけることも忘れて、回れ右をしてばたばたと走り去る。旦那様、旦那様、という耳を塞ぎたくなるほどの大声が聞こえてくる。

彼女はすぐに戻ってきた。灰色のシャツを着た、細身の男性——ロード・イーリスも一緒だった。

扉までは全速力で走ってきた様子だったのに、ロードは急に立ち止まった。アエルをまじまじと見つめ、引き寄せられるように、一歩一歩、近づいていく。

「……アエル——」

うわごとのように、つぶやいた。アエルの目の前まできて、そっと手を持ち上げる。その手はひどく震えていた。

触れる直前、アエルは思わず身を引いた。ロードの手は宙で止まり、長い時間をかけて下ろされる。

「……ほら」

リストが、アエルの背中を押した。よろめく彼女をロードが受け

止め、それから優しく、壊れ物のに触れるかのように、抱きしめた。
「お帰り、アエル」

彼の後ろでは、ミーチェがぼろぼろと涙をこぼしていた。アエルは、懐かしい香りに顔をうずめながら、背中に手を回すことも、言葉を返すこともできず、震える瞳を閉じた。

彼女は静かに悔いていた。

やはり、来るべきではなかった。

居場所

「何とお礼を申し上げれば良いのか……本当に、ありがとうございます。旦那様も奥様もお喜びでしょう。本当に良かった」

リストとクルイークを客間に通し、ミーチェは深く頭を下げた。

アエルは、ロード・イーリスと共に、病床に就いているという母親の寝室へと向かった。家族水入らずで、と提案したのはリストだ。

「あ、改めまして。わたくし、祖母の代からイーリス家に仕えております、ミーチェ・アランと申します」

二人をソファへと促して、ミーチェは再び慌ただしく頭を下げる。興味なさそうにソファに座ろうとするクルイークの腕をつかみ、リストも一礼した。

「以前お伺いしたときには、ご挨拶もせず、失礼しました。リスト・グランデです。こっちはクルイーク」

「……ってーな。なんだよ」

不満を漏らすクルイークの後頭部をつかみ、むりやり頭を下げさせる。クルイークがなおも文句の類を口にしようだったので、腕を引いたまま隣り合わせてソファに座らせると、急いで話題を変えた。「貿易をやっているんですよね？ さすが、見事な調度品ですね。大陸内部にいたのでは、なかなかお目にかかれない」

客間の壁には、鮮やかな色遣いの絵画や、青銅のモチーフなどが飾られていた。リストも話には聞いたことのある、ヴァストーク製と思われる絹の編み込まれたタペストリーも掛けられている。

そうなんです、とミーチェは嬉しそうに顔をほころばせた。

「この部屋にあるのは、ほとんど旦那様の趣味のものです。わたくしも、一度はヴァストークに行ってみたくて常々思っているんです」

——最近、よくない噂もありますから、わたくしが生きているうちには無理かもしれませんけれど」

「何をいうんです、まだまだお若いのに」

真顔でフォローするリストの横顔を、クルイークが胡散臭そうに見る。事実、ミーチェには老け込んだところなどなく、まだまだ若々しいのだが、そういうセリフがさりと出てくるのがクルイークには信じられないのだ。

照れたように頬を染めて、それからミーチェは急に真剣な顔つきになった。リストとクルイークの座るソファに、脇から詰め寄り、声をひそめる。

「そんなことはどうでもいいんです。あの、アエルちゃんは……何て聞けばいいんでしょう……そのう、要するに、どこで、何をしていたんでしょうか。何か良くないことに巻き込まれていたりとか、そういうのは、大丈夫なんでしょうか。わたくし、アエルちゃんが産まれたときから見てきました。あの子が出て行ってしまったときは、本当に悲しくて、もう心配で心配で……」

いいながら、もうその瞳には涙が溜まってきていた。付き合ってもらえないとばかりに明後日の方向を見るクルイークは放っておいて、リストは彼女の肩に優しく触れた。

「大丈夫です。お嬢さんを最初に見つけたとき、名前を聞いたら――彼女、ちゃんと、アエル・イーリスだと名乗ってくれました。そのことを、とても嬉しく思っただけです。彼女は、大丈夫ですよ」

「そうですか……」

実際のところ、ミーチェにはリストのいいたいことの半分ほどしか伝わっていなかったのだが、彼女は安堵したようだった。それから、うつむいて逡巡し、リストの向こう側のクルイークに視線を移す。

「あの……クルイークさんは、アエルちゃんの特別な方？」

「いえ、違います」

きっぱりとリストが否定する。クルイークはといえば、話を聞いているのか聞いていないのかもわからない。おとなしくソファに収まっていることが驚異だともいえる。リストにしてみれば、彼がミ

ーチェと見つめ合って赤い瞳であることが知られるのはやつかいなので、そういう意味では好都合だ。

「では、あの……ごめんなさい、聞きにくいことなのですが、道中、何泊かされましたよね？　アエルちゃんは、ちゃんと眠れていたでしょうか」

その質問に、リストの脳裏に眠りながら涙を流すアエルの顔が蘇った。眠れていたか、と聞かれれば答えは否だが、それをそのまま伝えるのはためらわれて、注意深く先を促す。

「……というのは？」

ミーチェは、目を閉じて、痛ましそうに首を振った。

「あの子は、赤ん坊のときから、とにかく眠れない子だったのです。大きくなっても、寝たと思ったら泣きながら目覚めることばかり。そのうちに、ほとんど寝ない子になってしまいました。この六年間、わたくし、夜になるとあの子の悲しそうな泣き声が聞こえてくるようで——あの子が、ちゃんと生きているのだとして、元気にやっているのだとして……ちゃんと、眠れているんだろうか、泣いていないんだろうかと、そればかり」

ほとんど独り言のようにつぶやく。リストが何も答えられないでいると、ミーチェはそつと微笑んだ。喜びと悲しみとが同居しているような、複雑な笑みだ。

「でも、もう、六年なんですわね。十歳だったあの子が、綺麗な娘さんになって」

彼女はリストの方を向いてはいたが、彼を見てはいないようだった。遠い日のアエルと、今日目の前に現れたアエルとを思い出しているのだろうか。目を細め、そのまま放心したように動かなくなる。

「——あ、ごめんなさい、お茶もお出しせずに！　すぐにお持ちいたしますので、どうぞ、おくつろぎくださいませね」

突然覚醒したように大きな声をあげたかと思うと、彼女はばたばたと客間から出て行った。広い客間にリストとクルイークだけが残されてしまい、居心地の悪い沈黙が落ちる。

ミーチェがいる間には聞こえることのなかった時計の音が、等間隔に秒を刻んでいく。その音を数十回聞いたところで、クルイークははずるとソファに寝そべり、天井を見上げた。

「……なんでオレここにいの。なんかすげー場違い」

「ちょうど俺も同じことを思ってたところだよ。でも、自覚があるように良かった」

皮肉というわけでもなく、淡々と低いテンションで返されて、クルイークは剣呑な目つきでリストを見る。しかし、目が合うことはなかった。彼は宙を見つめ、何かを考え込んでいるようだった。

「もう、ぜんっぜん、わかんねンだけど」

その横顔にそう投げやりに言葉を吐き出すと、リストはすぐにクルイークを見た。

「何が？」

本気でわかっていないようだ。というよりも、思考に入ると周りのことは見えなくなるタイプらしい。

「オレはさ、あいつのことは……なんつか、色でわかる。いってわかんねえだろうけど、人間には色つてのがあんだよ。オレにとつてあいつのそれはすげえ強烈で、見つけたときには、やった、っと思った。見てくれが変わってるのとかはどうでも良くてさ。本人だってわかったから」

あいつ、と呼んだのを、リストは聞き逃さなかった。つまり彼は、アエルがアエルでないときから、ずっと、彼女に執着していたのだ。「……つまり君は、捜してたの？」

「まあ、そうだな」

あっさりと頷く。リストが思っているよりも、二人の関係は浅いものではないようだ。

「見つけたのは、いつ」

そう問われて、クルイークは眉間に皺を寄せる。悪しき者の寿命フオシールは、人間のそれよりもはるかに長い。だからこそ、彼らにとって、時間の概念というのはひどく希薄だ。いつ、といわれても、すぐに

答えを割り出せない。

「……………とりあえず、ここではなかったつーことは、六年前以降ってことか」

結局、そういう答えしか出てこなかった。クルイークが『アエルII イーリス』に会ったのは、ベイスではない。ということは、彼女がこの家を出たあと、ということになるのだろう。

「なあ、あんた知ってんだろ。どういことだよ。ここに親がいるとか、産まれたとかさ、そんなわけねーだろ」

「君たちは、人間の歴史にはあまり興味がないだろうけど——」

ふい、と視線を戻し、リストは再び何もない空間を見つめた。なぜ歴史の話になるのかと文句をいおうとしたが、言葉を飲み込んで、クルイークは辛抱強く待つことにする。基本的に、悪しき者^{フォシール}が人間の歴史に興味がないというのは本当だ。ということはつまり、クルイークの知らない歴史とやらが、アエルのことに関わってくるのかもしれないと思い直したのだ。

「六十五年前、ザーパトとヴァストークの間で大規模な戦争が始まった。技術による発展を目指すザーパトと、魔術信仰が盛んで人間の手による発展を嫌うヴァストークでは、互いを異端と捉えていてね、大昔から戦争が絶えなかったんだ。六十五年前に勃発した大戦は、六年間続き、過去最大の負傷者を出した。ほとんど痛み分け——まあ、形上はザーパトの勝利として終戦したのが、五十九年前」

「そのへんのこととは、あんたよりも詳しいかもしれないぜ。見てきたからな、人間同士のくだらないやり合いを」

くだらない、という言葉に、リストはかすかに反応した。クルイークが戦争の噂のことを妙に気にする理由がわからなかったが、もしかしたら単純に、戦争というものを嫌っているのかもしれない。アエルの負の感情を好きではないといったクルイークだ、その可能性は充分に考えられる。

「なら、君は実際に見てきたんだろうけど、その大戦で……ヴァストーク側の言葉を使うなら、『活躍』したのが、ヴァストークの歌

姫、ファルーシュリゼだ。開戦当時、彼女は若干十歳。戦争兵器として、彼女は産まれた。これは文字通りの意味だよ。魔力の高い男女を選び抜き、ヴァストークの魔法士——ヴァストーク側では魔術師っていいかたをするんだけど——の英知を結集させて、術を幾重にもかけた上で生殖、母親が彼女を宿してから誕生までも、彼らは胎児に術をかけ続けた。より強力な兵器になるように。それこそ、呪いのようにね」

淡々と語られる内容に、クルイークは小さく眉根を寄せた。

「人間って、くだらねーこと考えるよな」

「俺は人間だけど、それでもひどい話だと思うよ。生命をばかにしている。その計画が、ヴァストークの中心国家であるエスタードが国をあげて取り組んだことだっていうんだから、なんていうかもう、呆れるしかない」

しかしそれが、ヴァストークの思考だった。とはいえ、ザーパトがヴァストークの行いを嫌悪するのと同じように、ヴァストークにしてみれば、ザーパトでだれもが利用する『ジュリス』の存在こそ恐ろしいものだということになるのだろう。根本から、考え方が違うのだ。

「そうして、後のヴァストークの歌姫が誕生した。十歳のときに戦争が始まり、彼女はその歌でたくさんの人間を殺した。六年間、ひたすら歌い続けて——結果は、敗戦。身柄がザーパトに引き渡され、裁きを受けることになる。その裁きってというのが……」

「知ってるぜ。死ねないんだろ？」

「それだけじゃない」

リストは、ためらうように瞳を伏せた。

「忘れられないんだ。君は、忘れることができないっていうのが、どういうことかわかるかな。もしも人間が皆、忘れるということができなくなったら、世の中はたちまち精神崩壊者で溢れるだろうね。しかも彼女は……殺したという事実を、殺した人間の顔を、忘れることができないんだ。記憶が薄れることもない。死ぬこともできな

い。苦しみ続けるんだよ、永遠に」

釈然としない面持ちで、クルイークは唇を曲げる。想像しようとしたものの、よくわからない。

「それって、結局、罪悪感ってのがあるからってことだろ？ オレにはピンと来ない」

「そうかもしれない」

リストは曖昧に頷いた。結局は、リストにも、理解できることではない。想像することしかできないのだ。

「戦後、不老不死になった彼女は、幽閉された状態で何年も過ごすことになる。ところが、いまから十七年前、彼女は突然消息を絶った。四十二年間、逃げ出す素振りなんて皆無だったのに、ある日突然、ね。それから十七年間、手を尽くして捜されて……いまに至る」
リストは目を閉じた。十七年前——リストがまだ、少年だったころ。生きることに絶望していた、あのころだ。

「……やっと、本題だ。ここからが俺が研究の末突き止めたことで、君の知りたかったことだよ。十七年前、おそらく彼女は、生まれ変わろうとしたんだ」

「……は？」

本題といわれ、身を乗り出したクルイークは、間の抜けた声をあげた。たったいま、死ねないといったばかりではないか。

「死ねないのにどーして生まれ変わるんだよ」

当然、その疑問に行き着く。

「その魔力を最大限に利用すれば、彼女には不可能ではなかったんだろうね」

そこまでいわれて、やっと、クルイークは気づいた。十七年前に、彼女が何に大きな力を使ったのか。どうしてこの町に、父と母が存在するのか。

音もなく、ゆっくりと息を吸い込んで、リストは続けた。

「彼女は、自らを胎児の状態にまで退化させて、女性の体内に宿ったんだ。もう一度生まれて、やり直そうとした——できることなら、

すべてを忘れて」

アエルの見下ろす先で、レイティ・イーリスは静かに寝息をたてていた。

アエルの記憶の中の彼女よりも、ずいぶんとやつれていた。ロードには命に関わるほどの病ではないと聞かされたが、それでも病魔に蝕まれているのは確かなようだった。それとも、ひよっとしたら、心労によるものなのかもしれない。

ロード・イーリスは、扉の脇の椅子に、無言で腰かけていた。恐らく、いまアエルが座っているベッド横の椅子こそ、普段の彼の特等席なのだろう。視線は感じたが、何かを尋ねてくる様子はなかった。聞きたいことは山ほどあるだろうが、彼は黙っていた。アエルから口を開くのを待っているのか、それとも、レイティ・イーリスが目覚ますのを待っているのかはわからない。あるいは、その両方かもしれない。

起こすのもためられ、こうして見つめ続け、どれほどの時間が経っただろう。ずいぶん長いような、まだほんの少ししか経っていないような、不思議な感覚だ。アエルの頭の中では、六年前までの彼女の様々な表情が、色鮮やかに蘇っていた。そのほとんどが笑顔だ。まっすぐに自分を愛してくれていた、温かい笑顔。

彼女が病に倒れてしまったという事実以外は、何一つ変わっていない。淡いオレンジで統一された寝室も、晴れた日は毎日のように洗われていた真っ白のシャツも、ときが止まっていたかのように、記憶の中のそれらとまったく一緒だった。何もかもを覚えているのだ。壁に掛けられた絵画、床に敷かれた絨毯、窓にひらめく薄手のカーテン、ベッドのすぐ上に飾られた金細工の時計——それらがいつ、どういった経緯でこの家へやってきたのか、だれの手でそこに置かれたのか、そのすべてを、アエルは説明することができた。六年も昔のことなのに、まるでついさっきの出来事であるかのように、色も、匂いも、ぬくもりも、何もかもが鮮やかだった。

だからこそ、彼女は悔いていた。

「……………ん」

ベッドの中で、レイティが身をよじった。まぶたがかすかに動く。アエルは息を飲んだ。膝の上で握りしめた手が、汗ばんでいるのがわかった。彼女が目を開けて、それで自分は、いったい何をいうつもりなのだろう——その問いの答えは、どうやっても出てこない。ひどくゆっくりと、レイティは目を開けた。

変わらない緑の瞳が、宙を見て、それからアエルを見た。半分ほどしか開いていない、まだまどろみの中にあるその瞳は、しばらくアエルを凝視して、そっと細められる。

「なんて素敵な夢かしら」

ふわふわと浮いているような声で、レイティはつぶやいた。その声を聞いた瞬間に、アエルは泣きそうになった。

けれど、アエルは耐えた。爪が皮膚に食い込むほどに手を握りしめて、口の中で震えるほどに唇を噛みしめて、耐えた。アエルは、決して、泣いてはいけなかった。それは彼女にとって、許されないことなのだ。

「夢じゃないよ、レイティ」

いつの間にか、アエルのすぐ背後に来ていたロードが、一音一音、確認するように、妻に告げた。

「アエルだ。リストさんが、連れてきてくださったんだ」

「……………え？」

レイティは数度まばたきをした。ロードに支えられながら、ベッドの上で身を起こす。身動きできないでいるアエルを、じっと見つめた。

瞳が、徐々に、開かれた。病のために青白かった頬が、少しずつ紅潮していく。その頬を、涙が濡らした。ゆっくりと一筋流れたあとは、抑えることを忘れたように、涙はぼろぼろと零れ出した。

「アエル……………！」

アエル、という彼女の呼びかけが、記憶の中のそれと重なり、ア

エルは目眩がした。息を吸い込んで、唇の隙間から、少しずつ吐き出していく。喉の奥がひどく乾き、全身が熱を帯び、震えている錯覚を起こす。

「夢じゃないのだと、教えてちょうだい……アエル……アエル……」
レイティが手を伸ばす。皮膚が骨にはりつき、あまりにも細くなつてしまった腕を見て、アエルは握り返さずにはいらなかった。ほとんど無意識に、両手でレイティの手をつかんでいた。

すぐに後悔した。

もう二度と自分からこの手を取らないと、あれほど深く誓ったのに。

「良かった……きっと元気でいてくれると信じてたけど、でも、本当に良かった。あなたがこうして、無事でいてくれて」

なじられる覚悟をしていた。おまえなどもう娘でも何でもない、突っぱねられた方がはるかに楽だった。

「大きくなったわね……」

その表情は、ただ純粹な喜びに満ちていた。

アエルは瞳を伏せた。

この人たちを、このまま、欺き続けることなどできない。

「……………あたしは……」

あたしは――

いいかけて、言葉が続かず、口を閉じる。

何というつもりなのだろう。

あなたたちの子ではないとでもいうのだろうか。大量虐殺をした犯罪者だともいうのだろうか。ただ死にたかったのだと、ただ逃げたかったのだと、なかったことにしたかったのだと――そのためにだけに利用したのだと、いうのだろうか。

「あたしは……!」

口を開いてしまったら、もう、堪えることができなかった。制御できず、涙が勝手に溢れ出す。

アエルには、その涙の意味がわからなかった。自分の感情がわか

らないのだ。

本当は、謝罪を述べなければならぬ。感謝を伝えなければならぬ。けれど、そのどちらも、あまりにも傲慢で身勝手なように思われて、アエルの口からどうしても出てこない。

許してくれといたいわけではない。許されるなどと思っていない。ならば、どうして謝罪を述べることが出来るだろう。感謝などという的はずれなことを、どうしてする権利があるのだろうか。

事実は変わらないのだ。

何をしようとも、事実は事実として、決してそこからいなくなることはないのだ。

「アエル」

レイティは、優しく名を呼んだ。涙を流しながら、それでも頑なに声をあげないアエルの背にそっと腕を回し、抱きしめる。落ち着かせるように、その背を優しく撫でた。

「アエル、あなたはね、お母さんのお腹の中にいたのよ」

幼いこどもに聞かせるように、包み込むように、言葉を紡いでいく。アエルは黙って聞いていた。あまりにも心地よい声に、神経が麻痺していくのを感じた。

「信じられる？ このお腹の中にね、本当にいたの。もう、お腹の中にあなたがいるってわかったときから、あなたのことが、かわいくてしかたないのよ。愛おしくてしかたないの。大好きなの。理屈じゃないのよ。お母さんも、お父さんもね、あなたのことを、心から愛しているの」

「……………」

アエルには、答えることができない。もう涙など枯れてしまったと思っていたのに、それはとどまることなく、次から次へと溢れ出す。

「産まれたときから、あなたはちよつと変わった子だったわ。なんでもすぐにできるようになって、本当に手のかからない子だった。そして、いつも寂しそうな目をしていた。きつと、何か大きなもの

を背負って、産まれてしまったのね」

背を撫でるのをやめ、より力強く、抱きしめる。

「私たちにできることは、何もないのかもしれない。あなたを、その悲しみから救うことは、できないのかもしれない。ずっと、そのことばかり考えてた。後悔していたの。あなたに謝っても謝り足りないの。私たちはこんなにもたくさんのものをあなたからもらったのに、何も返せないことが、悔しくてしかたなかった」

レイティは、そっとアエルの両肩をつかんだ。まっすぐに彼女の目を見る。

「ありがとう。私たちを選んでくれて、産まれてきてくれて。とても幸せなの。本当にたくさんの幸せを、もらったのよ」

「——あたしは……！」

何かをいおうとして開かれた口を、人差し指で静かに塞いだ。微笑んで、続けた。

「もっと傲慢になりなさい、アエル。もっと欲しがりなさい。あなたは、愛されている。あなたはちゃんと、望まれているのだから」

「……………！」

後悔ばかりが、アエルの胸に押し寄せた。

あまりにも無知だったかつての自分。あまりにも身勝手だった行動。ずっと変わっていない。何年も何年も存在し続けて、やっていることは、何一つ変わっていない。

傷つけてばかりだ。

自分の都合で、あまりにも多くの人を。

優しさに触れるたび、アエルの胸を激しい痛みが襲った。この優しさを、自分はいくつ壊してきたのだろう。幸せな母親を、父親を、こどもを、家庭を、いったいいくつ踏みにじってきたのだろう。どれだけの笑顔を奪ってきたのだろう。まるで息を吸うように、あたりまえに、あまりにも簡単に。

瞳を閉じるまでもなかった。目の前で倒れていく人々、魔女と罵る言葉、恐怖に震える姿、殺さないでと懇願する瞳——それらは無

数に、消えることなく、常にアエルの脳を支配していた。いつでも、ひどく鮮明に、思い出すことができた。

彼女は歌ったのだ。

善も悪もわからず、自分には歌うことしか与えられていないのだと信じ、ただ歌ったのだ。

その意味に、気づこうとしなかった。

「……………」

何もいえなかった。

この優しい人たちに、何も、いえるはずもなかった。

押し流されそうな感情の中で、自分の中の一部分が、奇妙に冷めていくのを感じた。様々な思いに溺れ、捕らわれそうになるたくさんの自分の中で、冷めた自分だけが、静かに起きあがり、地面に立った。

忘れるな——アエルは、静かに、自分にいい聞かせた。

自分のしたことを忘れるな。

自分がだれであるかを忘れるな。

悲しみも苦悩も——ましてや幸せなど、決して感じてはならないのだということを忘れるな。

自分には、それらの一切の感情を抱く権利など、ないのだ。

「……もう、ここには、来ません」

感情のない声で、アエルは告げた。

心に浮かび上がった何もかもを、排除した。

ずっと、そうすることで生きてきた。そうして存在し続けるしかなかった。

リストとクルイークの二人は、ソファでおとなしく出された茶を飲んでいた。口を開いても不毛なやりとりになりそうな予感がしたので、お互いに黙っている。

間を保たせるために、出されていた焼き菓子に手を伸ばしていたら、二人では食べきれないほどに盛られていたにもかかわらず、と

うとう空になってしまった。茶のお代わりも尽きようとしている。

「——アエルちゃん？」

廊下からミーチェの慌てたような声が聞こえてきた。クルイークがさっさと立ち上がるので、リストもそれに続く。空いた皿の類を失礼でない程度に整えて、白いコートを手にすると、廊下へと続く扉を開けた。

アエルがまさに家を出て行こうとしているところだった。ミーチェはそれを引き止めようとしているようだ。

「アエルちゃん、もう行くの？ ほら、連れの方たちもまだ居間に

――

「いいよ、連れじゃないから」

ためらいもなく素晴らしいはなつ。ショックを受けた様子もなく、クルイークは飄々とアエルに追いついた。多少ショックだったリストは、胸中で密かに感嘆する。経験値の違いだ。

「じゃあね、ミーチェ。元気で」

淡泊な言葉を投げて、すぐ隣まで来たクルイークにも、離れたところにいるリストにも目をやらず、扉を開ける。その表情があまりにもいつもどおりであることに、リストは違和感を覚えた。

六年ぶりに両親に会って、会話をしたはずなのに。

「アエル君」

屋敷から数歩出たところで、続く言葉も思いつかないままに、とりあえず呼び止める。アエルは動きを止めた。静かにふり返る。その目は、恐ろしいほどに、無表情だ。

「なに」

促されて、リストは言葉に詰まった。感じている違和感を、うまく言葉にすることができない。ご両親に会ってどうだったかなどと、聞くことでもない。

「おにーさんさ、これで用はすんだんでしょ？ ヴアストークに行くって件が作り話で、ここに連れてくることが目的だったなら、ここで終わりってことだよね」

そのいい方に非難するニュアンスはなく、確認するように淡々と尋ねられたものだった。しかし、リストは責められているような気になった。確かに、解呪の妙薬は彼女の気を引くための作り話で、それがヴァストークにあるといったのも、通過点であるベイスに連れてくるのが目的だ。

しかし、ここで終わりということではない。ここで別れてしまつては、いったい何のために、彼女を捜し出したのかわからない。

答えないでいると、アエルは質問を重ねた。

「どうして、ここに連れてきたかったの？」

「……どうして？」

ここへ来たというのに、それが伝わっていないという事実は、リストを少なからず落胆させた。それだけ、根が深いのだ。理由など、一つしかないのに。

「あの人たちに頼まれたの？　あたしを連れてきてって？」

「違うよ」

正確には、頼まれたというのは本当のことだった。ただそれは、リストにとって、あくまでも目的に付属してきたことにすぎない。彼は、あの日に会った彼女を——自分を助けてくれた、あの寂しそうな瞳をした彼女を——捜していたのだ。そうしてこの家に行き着いた。ここに連れてこなければならぬと思った。

理由など、単純だ。

「俺は、君に居場所があるんだってことを、知って欲しかったんだ」
アエルは目を細めた。

「……おにーさん、結局、何がしたいの？」

単純な、それだけに辛辣な問いを、投げつける。リストは、これまで決して揺らぐことのなかったものが、初めて揺れているのを感じていた。リストの目的など、ただ一つだ。十七年前から、何一つ変わっていない。

「俺は……」

「リスト——！」

第三者の声が、リストの声を遮った。

名を呼ばれたリストも、アエルも、二人のやりとりを傍観していたクルイークも、一斉に声の方を見た。声は、イーリス邸とは反対側——リストから見てアエルのさらに向こう側から、聞こえていた。茶色のコートを着た、ブロンドの女性が立っていた。彼女は声をあげたことを後悔するように、すぐに両手で口元を覆う。

「エイラ……どうしてここに？」

リストが名を呼ぶと、エイラⅡミリシアは音もなかったため息を吐き出した。無言で左手を上げ、袖をめくり上げて、手首を示す。

彼女の細い手首では、ひどく頑丈そうな幅の広いブレスレットが、鈍い輝きを放っていた。茶色の宝石が埋め込まれている。ファツシヨンのためにつけているようは見えない。

それを見て、リストは顔色を変えた。

「ジュリス……」

アエルは口の中でつぶやく。リストの表情と、さきほどの彼女の反応を見て、だいたいの事情はわかった。

「なんだ？　どうということ？」

緊迫した雰囲気とは無関係に、クルイークがのんきな声を出す。

エイラは緊張した面持ちで、リストと、クルイークと——それからアエルとを、じっと、見た。あきらめたように、首を左右に振る。「……久しぶりね、リスト。上にいわれて、あなたを捜しに来たのよ。あなたの捜し物は見つかったかしら」

何気ない問いかけなのに、その声はかすかに震えていた。

「エイラ……」

リストは頭をめぐるしく働かせた。どう答えるのが正解なのか。彼女がここにいるということ、腕につけられたブレスレットの意味、あえて彼女が投げた質問——

しかし、彼の中で答えが出るよりも早く、アエルが動いていた。アエルはまっすぐエイラに歩み寄ると、左腕をつかむ。あっけにとられるエイラにはかまわず、瞳ほどの大きさの宝石に向かって、大

きく息を吸い込んだ。

「そっちで聞いているのが、誰だか知らないけど」

わざと大きなボリウムでいって、少しだけためらうような沈黙を挟む。

「……あたしに、用があるんでしょ。レディの誘い方も知らない相手っていうのが残念だけど、こっちから行ってあげる」

エイラは目を見開いた。自分よりもずっと背の低い、まだ十代半ばほどの少女を見下ろす。

「え、どういうこと」

展開についていけず、クルイークが眉根を寄せる。説明してやる義理もなかったが、いちばん距離の近かったリストが彼の肩に手を乗せた。声をひそめる。

「あのジュリスのせいで、こっちの声に向こう側——要するに、コスモス本部に筒抜けってことだよ。あんまりいい流れじゃないな」

「コスモス？ ああ、グリーヴァの雇われ先か」

普段、何ごとにもあまり興味のなさそうなクルイークだが、グリーヴァの名を口にするとき

には不快そうな顔をした。クルイークと同じ悪しき者だが、だからといって仲が良いということではないようだ。

「クルイーク、君は一緒に行かない方がいい。万が一のときのために、姿を消しておいて。コスモスに行ってしまったら、アエル君にとって、良いことには絶対にならないから。何かがあったときには……君が、彼女を守るんだ。残念だけど、俺に戦闘能力はない」

「……勝ちいうなあ。あんただってコスモスなんだろーがよ」

だが、クルイークにとってもこのあたりが潮時だった。もともと、常にアエルと行動を共にしていたというわけではない。

「どっちにしろ、面倒はごめんだから、消えさせてもらうわ」

素晴らしい残し、身を翻す。

「アエル君」

呼びかけたが、彼女はふり返らなかった。アエルはエイラを見上

げて、無表情で告げた。

「そういうわけだから、案内してよ、おねーさん。逃げる理由もないし。連れて行ってくれるんでしょ？」

「え、ええ……」

でも、とエイラはいいかけて、言葉を飲み込んだ。

目の前の少女は、ヴァストークの歌姫のイメージから、あまりにもかけ離れていた。どこが、というのではない。そんな説明などできないほどに、何もかもが違うのだ。

正直なところ、エイラは迷っていた。自分がもしもリストを見つけたらとして——事実、見つけてしまったわけだが——自分のせいで、リストが何か恐ろしい目に遭うことは、避けたかった。リストを捜しているのは、平然とエイラの家族を人質に取るような人間だ。リストが裏切り、逃げ出したのは、そういう組織だ。

だからこそ、会話が向こうに聞こえているということを示して、リストに判断を委ねたのだ。うまくやれば、切り抜けられる可能性もなくはないはずだった。

それらはすべて、リストを思っていたことだ。彼女の頭の中には、ヴァストークの歌姫のことなどほとんどなかった。彼女がどうなるうと知ったことではない、というのが正しい。

それなのに——エイラは、息を飲んだ。自分の中の認識が覆されていくのを感じていた。

目の前のこの華奢な少女が、あの歌姫なのだろうか。

だれもがその名を知る、大量虐殺者なのだろうか。

だとしたら、なぜ——

「なぜ、そんな目をしているの」
思わず、つぶやいていた。

アエル目は、エイラの知るとの瞳よりも、深い暗闇に捕らわれたような、寂しい色をしていた。

「どんな目？ おかしなこというね、おねーさん」

その瞳のまま、アエルは薄く笑った。

＊

赤い花畑の上に、グリーヴァは横たわっていた。

決して広くはないその部屋は、床も、壁も、天井も、すべてが花で埋め尽くされていた。ただ一か所、扉だけが花に埋もれず、そこが外界と繋がる部屋であることを示している。

その扉が、開いた。

杖を手にした白髪の老人が、視界を覆う赤い花に一瞬眉をひそめ、それでも室内に入ってきた。ためらいもなく、花を踏みつぶしながら。

「相変わらず、趣味の悪い部屋だ。以前は花ではなかったように思うが」

セリフとは裏腹に、人の良さそうな笑みを湛えていた。グリーヴァが答えないでいると、横たわるその肢体に、杖を突きつける。

まっすぐに、下ろした。老人の身のこなしからは想像もできないほどの速さで、それは彼女の腕と腹の間を鋭く突いた。

それでも身じろぎしなかったグリーヴァは、視線だけを老人に向けた。

「小言をいいに來たの？ アタシが歌姫にやられたから」

「ばかな」

笑みは崩さずに、老人は鼻を鳴らした。

「もとより、貴様が歌姫に勝てるなどとは思っておらん。それでも頭を使えばどうか、と多少の期待はしたがな」

「……………」

グリーヴァは唇を噛みしめた。悔しさに身が震えたが、それでも身体を起こすことができなかった。

歌ってもいない彼女を相手に、まるで齒が立たなかったのだ。

「カメロス」

愛する人間の名をつぶやく。しかし、そこに甘えの色は一切ない。

決意すら込められた呼びかけに、老人は興味深そうに唇の端を上げた。

「もう一度チャンスを……とでも、いうつもりか」

「もう、負けないわ」

否定する様子はない。勝てるとは思えない、とまでいわれても、グリーヴァは引き下がるわけにはいかなかった。この男と共に居続けるためには、利用価値がないと思われるわけにはいかないのだ。

「勝手にするがいい。どうせ、歌姫はここに来る」

グリーヴァは眉を寄せた。自分が失敗したというのに、なぜそういうことになるのか。

「……どうして？」

カメロスは笑んだ。

「愚鈍なばかりだと思っていた息子でも、役に立つことがあるということだ」

希望の国

夢を見る。

幻を見る。

聞こえるはずのない罵声が、悲鳴が、懇願が聞こえる。

それは記憶だ。

確かに目の前で起こった——自らが起こした、現実の、記憶。

目を閉じていても、耳を塞いでいても、それらは絶え間なく心を蝕む。

だから、消えてしまいたかった。

逃げてしまいたかった。

存在そのものを打ち消して、見ることも、聞くことも、触れることも、感じることも、何もかもを放り出してしまいたかった。

それが無責任であるということは知っている。

では、責任を取るというのは、どういうことなのだろう。

悔いればいいのだろうか。

嘆けばいいのだろうか。

許しを請えばいいのだろうか。

許されたいなどと愚かな願いを抱いたことはない。

ただ、消えたい。

しかし、その願いすら、叶うことはない。

「着いたわ」

アエルが目を開けると同時に、馬車が止まった。エイラミリアのかすかに緊張を帯びた声が聞こえる。

港町ベイスから、一般の馬車に乗って五日。アエル、リスト、エイラの三人は、ブラン大陸西に位置するアウレーに、ようやくたどり着いた。

丸五日間、三人はほとんど口を聞かなかった。アエルは無表情のまま黙っており、何かいいかげんな素振りは見せるものの、リストも口を開くことはなかった。そうになると、エイラが軽々しく話し出すこともできない。結局、非常に重苦しい空気のまま、五日間が過ぎた。

馬車が滑り込んだのは、円柱型の建物の内部だった。半径五十メートルほどの巨大なその建物は、町の外に向けて大きく口を開けており、その上部には『ステーション』と書かれている。

外観は三階建てほどに思われたが、入ってみると、それは異様に天井の高い空間を造り上げていた。大小様々な道が放射状に延び、その一部分に馬車が待機している。大半は、馬車の三倍はあろうという巨大な箱が、道の出発点を陣取っていた。馬車のように、車を引く馬がいるというわけでもない。箱の下には、道に沿って三本の長い板が張り付けられている。この箱こそが、ベイス行きの馬車で乗り合わせた男性が語っていた、トレインという乗り物だった。馬などの動物に頼るのではなく、ジュリスによって車を動かすのだ。

エイラは後ろを気にしながら先頭を歩いたが、アエルもリストも無言でちゃんとついてきていた。逃げるつもりはないらしい。いくつかの乗り場を通り越し、球面状の壁にそってぐると反対側に回る。『5』というプレートがぶら下がったトレインの前で立ち止まった。

「本部へ」

エイラは、トレインの入り口前に立っていた青い帽子の男に、身分証らしい白いカードを提示した。どうぞ、と男が道を空ける。階段を登り、三人はトレインに乗り込んだ。

乗ってしまったえば、大きな馬車、という印象だった。特に内装に凝っているという様子もない。馬車のそれと同じような木製のベンチが並び、側面には等間隔に窓がついている。

そのまま数分が過ぎただろうか。やがて、トレインは音もなく動き出した。馬車のような揺れは皆無で、アエルにしてみれば、まるでメランタワ―で乗った昇降装置が水平に動いているような感覚だった。前に進んでいるという体感はあるのに、景色が後ろへ動いていくのが、不気味ですらある。

窓から見える建物は、どれも背が高く、四角く無機質で、同じ都会でもメランとはずいぶんと印象が異なった。木や花の類すら整然と並び、手つかずの自然そのものは皆無のようにも思われた。

「おもしろくない町」

ぼつりと、アエルはつぶやいていた。十七年前までは、もう少し、暖かみのある町だったはずだ。アウレーはいまや、アエルの嫌う『ジュリス』そのもののような町となっていた。便利ではあるのだろうが、それだけに危うく思えてならない。

そのうちに、トレインは音もなく止まった。

青い帽子の男が、外側から扉を開ける。

外へ出ると、十人ほどの男たちが待ちかまえていた。胸に赤色のバッヂをつけた彼らは、直立不動の体勢で敬礼し、こちらを向いていた。

その向こう側から、ゆっくりとした足取りで、一人の男が現れた。

「お会いできて光栄です、ヴァストークの歌姫」

彼は、リストとエイラの存在には気づいてすらいないかのように、彼らには少しも注意を払わず、アエルの目の前まで歩を進めた。目の下に皺を刻み、柔和な笑みを湛えて、手を差し出す。

「はじめまして、希望の国コスモス組織長、ティグレル・ガナドールです」

アエルは、まだそれほど年老いた様子のない組織長を見上げた。実際に彼はまだ四十九歳だったが、丁寧な口調と柔らかい物腰も手

伝ってか、それよりもさらに若く見えた。黒髪には白髪が混じっているものの、それが老いを感じさせるといふほどでもない。

その顔には、かすかに見覚えがあった。だが、向こうもそういつているとおりに、初対面なのだろう。知り合いだという記憶はない。

「あたしに用があるのは、おじさん？」

物怖じもせず問いを投げると、後ろの取り巻きたちに緊張が走る。見た目には穏和な組織長だが、性格もそうというわけではないようだ。

「いかにも、私です。ビジネスの話のために、お越しいただきました。——エイラ＝ミリシア」

ついと視線を移し、エイラを見る。突然矛先が向いたことに驚きを隠せない彼女に、ティグレは柔らかい笑みを向けた。

「ご苦労。良い部下を持って嬉しく思いますよ。しばらくは休暇を取るというでしょう。下がってよろしい」

「は、はい……」

ティグレのそれは作り笑いのようには到底思えず、エイラは少々戸惑った。本当に、心から上機嫌なのかもしれない。あの日、エイラを呼び出した彼とは、まるで別人のようだ。

「おねーさん」

アエルに呼ばれ、エイラはさらに驚く。行動を共にした五日間で、初めて呼びかけられたのだ。

返事がなくとも、アエルはエイラの隣まで行くと、その左手をつかんだ。無遠慮に袖をめくり、顔を出した金属のブレスレットに触れる。その何気ない動作で、ブレスレットはエイラの手から抜け落ちた。アエルがそれをそのまま放り投げると、地面に落ちるよりも早く、埋め込まれていた茶色のジュリスが砕け散った。

「あなた……」

エイラは目を見はった。もしかして、と続く言葉を飲み込む。もう用はないとばかりに、アエルが彼女から離れたのだ。

アエルの動きを、咎める様子もなく見ていたティグレは、実に満

足そうに目を細めた。

「それから、リストIIグランデ。本来なら、処分を下すところですが……その働きに免じて、今回は不問としましょう。君がいなければ、こうして歌姫に会うことすらできなかったかもしれない」

リストが、ティグレを睨みつける。しかし、彼はそんな視線などはまったく意に介さず、アエルを促すように右手で前方を示す。

「どうぞ、こちらへ」

歩き出す彼の後ろ姿に、無表情のまま、アエルは続いた。思わず追おうとするリストを、取り巻きたちが取り押さえるのが見えたが、そちらへは一瞥をくれただけだった。

意識的になのだろうか、ティグレはひどくゆるやかに歩を進めていた。他の人間がついてくるといふことも、だれかとすれ違ふといふこともない。まるでアウレーの町そのものを象徴したかのような面白みのない無機質な造りの建物に入り、白い廊下の上をただ進んでいく。

慣れない人間ならば、容易に迷いそうな構造だった。入り組んでいる、ということではなく、どこもかしこも似たような景色なのだ。床や壁に掘られた記号が、唯一道を示しているようだが、それすら知らない人間にとっては何を表しているのかわからない。

外はまだ明るく、窓からも光が差し込んできているのに、廊下の壁に等間隔に設置されたジュリスの灯りが、これでもかと施設内を照らしている。恐らく、陽が落ち、夜になっても、変わらずに照らし続けるのだろう。これでは、時間の感覚そのものがおかしくなりそうだ。

やがて、一際大きな扉の前で、ティグレは立ち止まった。アエルには、その扉に見覚えがあった。白ばかりの施設にあって、この扉だけが黒い。メランタワーで見た、昇降装置の扉とほぼ同じデザインだ。メランタワーと違うのは、隣に階段がないところだろうか。階段を使う、という選択肢はないのかもしれない。

重い音をたてて、扉が開いた。ティグレが中に入り、微笑んでアエルを促す。ここまで来て拒絶する理由もなく、アエルも続く。

メランタワーで見たものよりも、よほど小さな銀盤が、壁に埋め込まれていた。ティグレは、右手の中指に輝く宝石を、慣れた仕草で銀盤にかざす。メランのときと同じように、昇降装置は銀色の光に包まれて、物音を立てずに下降を始めた。

下降だ。アエルは思わず眉根を寄せた。

階段を登った覚えはない。

「地下施設にご案内いたします。ぜひ、見ていただきたいものがありますね」

彼女の疑問を察したのか、ティグレがそう説明を加える。地下施設、とあたりまえのように口にされても、アエルにはどういうものなのか、想像することができない。

炭坑や井戸や、単純に穴を掘るという意味合いの地下ならわかる。しかし、わざわざジュリスを用いた昇降装置で行くということは、そういったものではないのだろう。

「あたしが偽物だとか考えないの」

ふと疑問に思い、つぶやく。まさか、とティグレは笑った。

「あなたが本物かどうかなど、すぐに確かめることができるというのに？ いまここで、あなたの心臓に刃を突き立てることだってできるんですよ。ただそれだけのことで、あなたが本物だという確証を得ることができる」

「……………」

そのひどく上機嫌な声に答える気にはならず、アエルは不快感を露わにして押し黙る。つまり、そうやって刃を突き立てたとき、偽物であったとしてもかまわないということだ。偽物だった場合は殺してしまうことになるけれど、そんなことは問題ではないということだ。

希望の国コスモス——ザーパートの近代文明の象徴ともされる存在。その存在を知ったときから、決して好きではなかったが。

「まるで悪の組織だね。おじさんが、その親玉なの？」

「悪？」

愉快的ジョークを聞いたとでもいうように、ティグレは目を細めた。

「それは主観の問題でしょう。私たちは純粹にビジネスをしているんですよ。それに……親玉ではありません。コスモスの最高責任者は、私の父であるカメロスⅡガナドルです、まだ。残念なことですね」

「……カメロス？」

アエルは眉をひそめた。その名には、確かに聞き覚えがあった。

「さあ、到着です」

しかし、思考はその一言に遮られた。昇降装置の扉が両側に開き、まばゆいばかりの光が差し込んでくる。

「——！」

外へ足を踏み出して、アエルは絶句した。

そこはまるで、一つの完成された町だった。

「どうということ……」

尋ねるわけでもなく、つぶやく。確かに、地面よりも下へ来たはずだ。しかし、アエルの足の下には、地面があった。土があり、草が茂り、花が咲いていた。見上げると、ずっとずっと高い位置に、青い空——それは天井というにはあまりにも高く広大で、空と形容する他なかった——が広がり、野原の向こう側には家々が並んでいる。アウレーのような整備された町ではなく、どちらかというと山間の村、といったところだろうか。絵に描いたような田園風景が、そこには広がっていた。

ティグレを問い質そうと、ふり返り——その視界に、空まで伸びる細長い筒が入ってきたことで、アエルは目が覚めたような気分になった。この地下と、空……つまり、地上とを繋ぐ巨大な筒。その中を、確かに、昇降装置で下りてきたのだ。

「驚いたでしょう」

アエルの反応に満足したのか、その声には存分に誇らしげな響きがあった。

「先の大戦時から、ずっと計画されていたことです。この区画は特別で、遊び心に溢れてはいますが——要するに、地下シェルターです。来るべき次の大戦に備えてね」

「地下シェルター……」

アエルは呻いた。そんな言葉でくくってしまうには、あまりにも広く、そして馬鹿馬鹿しかった。対峙する二人の間を吹き抜ける風すら、人工的に作られたものなのだ。

この区画、ということは、目に見える景色にはとどまらないのだろう。いったい、これだけの空間を造り上げるのに、どれだけの費用がかかり、どれだけの人員が働かされたのだろう。考えるだけで目眩がした。

「まだ戦争は始まっていませんので、ここを利用している人間もいません。ただ、ご予約はたくさんいただいております。なんとしても生き残りたい、そのためには金を惜しまない、という方々はたくさんいらっしゃるんですね」

「……見せたいのは、これ？」

不機嫌な問いかけに、ティグレは首を左右に振った。再び昇降装置の扉を開け、アエルをいざなう。

「ここは、ことのついでと申しますか……要するに、自慢です。本題は、ここよりももう少し下に」

「まだ下があるの」

驚きや感嘆を通り越して、アエルはもう呆れてしまった。あまりにもくだらなくて、理解の範疇を超えてしまっている。アエルには、『地下シェルター』の存在そのものも、大自然に溢れたこの造りも、無駄としか思えない。ここにこれだけの力を注ぐぐらいなら、戦争回避に奔走したほうがよほどましというものだ。

そこまで考えて、少し、引っかかるものがあった。ザーパトとヴアストークの間では、それこそ伝説の時代から戦争がくり返されて

きたとはいえ、もし、戦争が起こらなかったとしたら、どうしたの
だろう。莫大な労力を費やしたであろうこの地下シェルターが、必
要になる日が来る保証はないというのに。

「さあ」

促されるままに、装置に足を踏み入れる。今度は少しの下降で、
すぐに止まった。

扉の向こうの光景に、アエルは幾分安堵した。それは、アエルの
思う『地下』そのものだった。

むき出しの岩肌、低い天井。ジュリスの灯りで照らされてはいる
ものの、掘った状態のまま、あまり手が加えられた様子もない。天
井には灰色のパイプが張り巡らされている。この上にあの自然が広
がっているのかと考えると奇妙ではあったが、視界に入る景色だけ
を見ている分には、それほど違和感はなかった。

そこは決して広大な空間ではなく、蟻の巣のように、あちらこち
らへ掘られた洞窟のようだった。湿度が高く、肌寒い。ティグレが
歩き出し、アエルもあとを追う。

「ご存じかと思いますが、ジュリスというのはコスモスが開発した
ものでしてね。大戦の際にはだれにでも扱える武器として活躍しま
した」

歩きながら、ティグレがとうとうと語り始める。もちろんそれぐ
らいは知っていたので、アエルは特に言葉を返さない。

「ジュリスには、大小様々なものがあります。素材もいまでは様々
ですが、開発のきっかけとなったのは、魔法力を封じ込めることの
できる鉱石、メ・トルタニウムの発見でした。これが採れるのは、
アウレーよりも少し北に位置する鉱山でしてね。そこでメ・トルタ
ニウムが発見されたからこそ、コスモスの本部はこのアウレーにあ
るんですよ。要するに、ジュリスの開発がコスモス発足に先立つわ
けです」

ぼんやりと聞いてはいたが、アエルにはどうでもいい話だ。鉱石
の名など聞かされたところで、それこそ興味もなければおもしろく

もない。

「いまでも、強力な魔法力を封じ込める際には、純度の高いメ・トルタニウムのジュリスが使われます。この制作過程はコスモスのトップシークレットですので、いまだにこの地下で、細々と行われているのです。そして、これが――」

いくつかの角を曲がったところで、ティグレは立ち止まった。唐突に、扉が待ちかまえていたのだ。それだけが無機質な白い材質でできており、洞窟の中にあって唯一浮いていた。ティグレは、右手中指の宝石を、扉の中央にかざす。もったいぶるように扉を開けて、前方を示した。

「――これが、まだ魔法力の封じ込まれる前の、まっさらなジュリスです」

その部屋の中には、直径五センチほどの球体が溢れかえっていた。ティグレの自室よりも大きな規模の室内に、所狭しと並ぶ木製の棚の数々。それらすべてに、球体が整然と並べられている。

ジュリスにしては、大きい方だろう。まだ力が込められていないというそれは、どれも透明で、触れても向こう側に突き抜けるのではないかと錯覚させるほどだ。

「これ、一個いくらするの」

どうでもいいことだったが、思わずそんな問いがこぼれる。ティグレは興味深そうに眉を上げ、少しの間思索した。

「まっさらなジュリスに値をつけたことはありませんが……メ・トルタニウム自体が貴重なものですから、これ一つで三〇〇クリスはするでしょうね。とはいえ、需要があれば値はもっと跳ね上がる。歌姫、あなたの歌が込められるのなら、値などつけられないほどになるでしょう」

「……………」

あまりにもさらいといわれた言葉の内容を、アエルは頭の中でくり返した。

あなたの歌が込められるのなら――目の前の男は、確かにそうい

ったのだ。

とたんに、アエルの表情が険しくなる。ティグレは白々しいほどに柔和に微笑んだ。

「いったでしょう、ビジネスの話があると。報酬は、いくらでも。あなたはただ、歌ってくればいい。人を殺せといっているのではありません、それは罪だ。私たちは、あなたのいうような悪の組織ではない。ただ、この透明な宝石の前で、歌って欲しいといっているのですよ」

アエルは身体が震え出すのを感じた。それは静かな怒りだった。ティグレの言葉一つ一つに、吐き気がするようだった。

「——あたしが殺さなくても……」

普段よりもずっと低い声になる。アエルはできるだけ感情を押し殺し、凧いだ声で続けた。

「……これを使っただけが、人を殺すってことでしょう。あたしは、歌わない。戦争に協力なんて、絶対にしない」

「でもあなたが歌うことで、救われる命があるかもしれない」

ひどく優しい声で、ティグレは囁いた。

「考えてご覧なさい。ヴァストークの兵が一般家庭を襲ったときに、そこにこのジュリスがあれば、それだけで家族の命は救われるのです。これは素晴らしいことですよ。あなたには、命を救う力があるのですから」

「でも——」

でも、そうすれば、そのヴァストークの兵士が死ぬのだ——この男にそんなことをいっても無駄なように思われて、アエルは口をつぐんだ。兵器を使う限り、救われる命もあれば、消える命もある。あたりまえのことだ。それに、協力しろといっているのだ。

沈黙をためらいとつたのか、ティグレは笑みを浮かべたまま、なだめるような声で続けた。

「ゆっくりと考えてください。あなたにとっては、地上は煩わしいことも多いでしょう。上の地下シェルターをお貸しします。結論を

急ぐつもりはありません。戦争開始に間に合えばいい」

アエルは、ティグレを見上げた。自覚している以上に、混乱し始めていた。歌えといわれるとは思わなかった。また戦争が起ころとは、またあの日々が始まるとは、どうしても思いたくないのだ。

「戦争開始に……間に合えばいい？」

最後の言葉の意味がつかめずに、そのまま問いかける。急ぐつもりはないといいながら、間に合わせろということか。

「間に合わないということは、決してありません。ご安心を」

ティグレは微笑んだが、やはりその意味はわからなかった。

＊

リストは部屋のベッドに横たわり、白いだけの天井を見上げていた。

強大な力の痕跡がベイスにあるということ突き止めてから、数十日間——ベイスに行き、アエル・イーリスの家族に会い、それから各地を捜し回った。彼女を苦しめるために捜していたのではない。願わくば、幸せに暮らしていてくれれば、と思っていた。しかし、見つけた少女は、あの日と少しも変わらない、冷めた目をしていた。幸せになることを、笑うことすらを頑なに拒否する、あの瞳。

結局、自分は何をしたのだろう——リストは悔いる気持ちで、目を閉じた。

会いたいという気持ちだけで、捜した。そうして、見つけてしまった。その結果がこれだ。

「捜さなければ、彼女が捕まることもなかった」

声は、自分の口からではなく、すぐ上から聞こえた。

「捜さなければ、彼女が巻き込まれることもなかった。コスモスに利用されようとすることもなかった。もしかしたら——人知れず、幸せに暮らしていたかもしれないかった」

リストの心の内を代弁するかのように、淡々と告げたのは、エイ

ラだった。リストが横たわるベッドに腰を下ろし、彼を見下ろす。

「……ってどこかしら？」

「いつの間に入ってきたの」

呆れたようにいって、身を起こす。エイラは肩をすくめた。

「ノックして、入るわよって声をかけて、たったいま。いいわね、ツヴァイともなれば、こんな立派な個室で。わたしたちドライなんて、みんな相部屋よ」

リストは困ったように苦笑した。リストのコスモスでの階級は、上から二つ目のツヴァイだ。ツヴァイの仕事といえば研究を主としており、研究室を兼ねて全員に個室があてがわれている。

「あなた、もともと覇氣がないんだから、落ち込むのやめてちょうだい。ただでさえカビくさい部屋なのに、主が帰ってきたとたんに人の住むところじゃなくなるなんてお笑いぐさだわ」

氣の強そうな目をそつと細めて、辛辣な言葉を投げる。リストには、それを跳ね返す氣力も、いい返す余力もなかった。言葉の勢いに押されたように、もう一度ベッドに倒れ込む。

「情けない」

エイラの声が追い打ちをかけるが、いわれるまでもなく、情けないことなど承知していた。

彼女のいうとおりなのだ。

自分の行いが、すべてを引き起こした。

「一応フォローしてあげるけど——」

エイラは身をかがめ、リストの顔の数センチ手前まで顔を近づける。

「どうせ見つかってたわよ。組織長の執着っぷりだったらなかったもの。あなたがやらなくてもだれかがやってた。それに——放っておいても、あの子は幸せに暮らしているような子じゃない。あんな目をした子を、わたしは知らない」

「……心優しいフォローをどうも」

「情けない。意気地なし。ヘタレ。ウジ虫。ゴミ。くず」

その一つ一つを、感情を込めない冷たい目で告げられて、リストはほとんど泣きそうになった。

「ウジ虫まではともかく……」

どうにか反論を試みる。エイラは立ち上がり、小難しそうな本の並んだ棚に人差し指で触れると、数センチそのまま撫でる。指についた灰色のほこりを、ふっと吹いた。

「あんたなんてこれよ、これ」

「……うん、かえって吹っ切れそうだよ、エイラ」

虚勢ではなく、本当にそう思った。へたに慰められても、余計落ち込んでいただろう。そこまで計算しての行いなのかどうかはわからないが。

「まだいって欲しければ、いくらでもいえるわよ」

「いや、もういい」

デスクの椅子を引き寄せ、エイラはそこに腰を下ろす。沈黙を挟んで、大きな息を吐き出した。

「わたしね、ヴァストークの歌姫なんて、どうでもいいって思ってたの。だって、歴史に名を残す犯罪人でしょ。あなたが彼女に執着する理由もわからなかったし、見つけたからって飛び出していくのも本当に理解不能だった。ヴァストークの歌姫について真剣に考えたこともなければ、彼女がなぜたくさんの人を殺したかなんて、そんなの考えようともしなかったわ」

淡々と語り出したエイラを、リストは見上げた。彼女はどこか辛そうだった。何かに後悔しているようにも見える。

「会って、わかったわ」

ぽつり、とつぶやいた。リストにいつているというよりは、独り言のようだった。

「あれは、犯罪者の目じゃない。殺したくて殺した人間の目じゃない。何十年も生きて、まだ、あんな目をしているのね」

そのまま、彼女は黙ってしまった。リストは目を閉じて、遠い昔に一度だけ出会った、記憶の中の歌姫に思いを馳せる。

いまにも壊れそうな目をしていた。それから年月が過ぎても、何一つ、変わってはいないのだ。

「……彼女が」

思い出したように、エイラは言葉を紡いだ。

「彼女がどうして、おとなしくこの町に来たのか、わかる？」

問われても、リストには答えることができなかった。そもそも、メランタワーのときも、彼女は逃げる素振りを見せなかったのだ。

しかし、いわれてみれば奇妙であるような気もした。コスモスという組織には嫌悪感を抱いていたはずだ。それは怒りに近い感情だった。怒っているからこそ来る気になったということなのだろうか。

「彼女、たぶん、助けてくれたのよ。わたしや、あなたのことを」

「……助けた？」

聞き返す。見上げると、エイラはいまにも泣きそうな目をしていた。

「ここについてすぐ、わたしの腕につけられたブレスレットを、あの子、壊してくれたわ。情報が筒抜けなら、自分が逃げた場合、わたしが罰を受けるんだと思ったんじゃないかしら。情けないのは、わたしなのよ。いわれるままにベイスに行って、あの子を連れてきてしまった」

表情を隠すようにして、エイラは両手で顔を覆う。ああ、とリストは呻いた。

そうなのかもしれない。それは、彼女の、ひどくわかりづらい優しさだったのかもしれない。

「……助けましょう」

次に発せられた声は、もういつものエイラの声だった。意を決したように、リストの目を見つめる。

「不老不死とか、忘れられないとか……そんなものから助けられるとは思っていないわ。それでも、わたしとあなたには、あの子をここに連れてきてしまった責任がある。そうでしょう？　少なくとも、ここから解放しなければ」

その言葉に違和感を感じて、リストはまばたきを忘れた。

何かが、引っかった。責任がある——それは、たしかにそのとおりだ。しかし、気になったのはそこではない。

「……どうしたの」

急に神妙な顔つきになったリストを、エイラが訝しげに見下ろす。リストはベッドの上で身体を起こして、エイラに右の手のひらを突き出した。ちょっと黙ってて、とでもいうかのように。

ベッドから足を出し、脱ぎ捨ててあった革靴に足を入れる。腕を組んで、ひどく緩慢な足取りで、室内を歩き始めた。

こういうときの彼に話しかけても無駄だ。エイラはおとなしく、待つことにする。

唐突に、リストは立ち止まった。虚空を見つめて、口の中でつぶやく。

「不老不死……」

老いることもなければ、死ぬこともないということだ。それに『忘れ^ず不』を加えた三つの『不』こそが、罪を悔い、死を望んだ歌姫に与えられた裁きだったはずだ。

そのことについて、深く考えたことはなかった。そういうものなのだと思っていたからだ。事実、ヴァストークの歌姫はまだ生きている。忘れられずに、苦しんでいる。

それならば、なぜ——

「——もしかしたら」

その可能性に、気づいてしまった。気づいてしまったら、それはもう、真実であると思えなくなっていた。

裁き

地下シェルターの空を、アエルは見上げていた。

ずっと見ていても、それは移り変わることがなかった。よく見れば、確かに天井なのだ。巧妙に青空が再現されているが、かすんだ大気の向こう側に終わりが見える。太陽も、凝視していればただの球体であることがわかった。わかってしまえばひどく稚拙で、余計に意味のないものに思われた。

どこまでも続くと思われた空間も、途中からは巨大な絵画に切り替わっていた。広大な敷地を使っているものの、要するに、見かけ倒しのただの部屋なのだ。ティグレは遊び心といっていたが、それにしてもくだらない。足下の花も草も、すべて作り物で、息などしていない。

それでも——アエルは思った。それでも、感情を麻痺させるには充分だ。

かつてはこの町も、このような景色だった。背の高い建物はほとんどなく、小さな木造の家が並び、草花が溢れていた。家々からこどもたちが飛び出して、手を取り合ってはしゃぎ出す。何をするというわけでもない。彼らは、共にいるということが、そのまま遊びにつながるのだ。

顔いっぱいの笑顔で、追いかけて、追いかけてをくり返す。歩くこともおぼつかないような幼子を連れ出す若い母親や、楽しそうに笑うこどもたちを、温かく見守る老夫婦の姿も見える。小鳥がさえずり、木々の間から小さな動物が顔を出す——

やがて、その景色に、異質なものが入り込んだ。それは空から降りてきて、こどもたちの注目を集めた。

それは少女だった。少女は歌を披露した。どこまでも響き渡る澄んだ声で、ただ、歌った。

ただそれだけのことで、あたりは地獄絵図と化した。赤子が息絶

え、母親が取り乱す。こどもたちの顔も恐怖に染まり、ひとり、またひとりと、内側から皮膚が膨張し、破裂していく。恐怖の声が聞こえる。罵る声が聞こえる。懇願する声が聞こえる。

そのすべてから目を逸らして、少女は歌った。歌い続けて、静かになるのを待った。

一切の物音がしなくなつて、やっと少女は歌をやめる。そこにあるものを、見る。そうして、あらゆる感情を抱くことなく、再び空へと舞い上がる。

「夢でもみているのかしら？」

問われ、アエルは我に返った。

そうだ、夢だ。彼女が歌ったのは戦場だ。平和な村ではない。

しかし彼女には、何が現実で何が夢なのか、もうわからなくなっていた。そのどちらもが、恐ろしいほどに鮮明なのだ。

「……あなたに用はないけど」

現れた人物を一瞥し、アエルは冷たくいいた。放った。アエルの目の前に立っていたのは、黒い

ドレスの妖艶な美女だった。赤い髪の悪しき者——グリーヴァだ。フォシール

グリーヴァは左手を腰に当て、高圧的にアエルを見下ろした。地べたに座る彼女に右手を伸ばし、その顎に触れ、くいと持ち上げる。

「アタシにはあるのよ。アンタを殺しにきたの。やり合ってくれるんでしょ？」

「殺す？」

首を傾けて、その手から逃れる。

「おばさんさ、コスモスに飼い慣らされてるんでしょ？ コスモスの偉い人……ティグレイガナドルって人からビジネスの話を持ちかけられたんだけど。殺しちゃっていいの？」

単純に疑問だった。グリーヴァは鼻で笑い、顎を突き出してアエルに迫る。

「イイのよ。アタシが仕えてるのはそれよりもっと偉い人、カメロスIIガナドルだから。カメロスが殺していいっていったの。だから

ら殺すのよ。——それにしても、カメロスのいったとおりね。アンタ、ビジネスの話なんて持ちかけられたの？ やめときなさいよ。アタシに殺された方がずっとラクでしょう？」

「楽に殺してくれるならね」

鼻と鼻が触れるのではないかというところまできて、アエルはすっと身を引いた。上品とはいいがたい甘い香りが漂ってきて、酔いそうだ。

「でもあたし、おばさんのこと嫌いだからさ。おばさんが殺して死ねるぐらいなら、自分で死ぬよ」

「死ぬるわよ」

グリーヴァは舌で唇を舐めあげた。胸元に手を入れて、もったいぶるようにして谷間から小さな球体を取り出す。ビー玉サイズのそれを、全部で四つ、指の間に挟んだ。

「カメロスにもらったの、これ……なんだかわかる？」

それは、それぞれ違う輝きを放っていた。とはいえ、答えは一つしか思い当たらない。

「ジュリスでしょ」

興味なさそうにつぶやく。グリーヴァは微笑した。

「このジュリス一つ一つに、増幅の魔法が込められているの。ザーパト最高位の魔法士と讃えられる、カメロスの魔法よ。これをね、こうして……」

わざと見せびらかすようにして、舌先に乗せる。一つ、二つと口に入れ、すべてのジュリスを飲み込んだ。アルコールに酔ったかのように、グリーヴァの目がとろりと下がる。恍惚とした表情で、小刻みに震えだした。

「……あなた……」

アエルは立ち上がり、慎重に距離を取る。ジュリスを飲み込んだ瞬間の、グリーヴァの肉体の変化が、空気を通して伝わってくるようだった。もともと彼女を覆っていた赤い光が、さらに輝きを増す。「増幅の魔法なんて……よっぽど効力を下げても、危険だってこと

ぐらい、あなただって知ってるでしょ。ヴァストークの兵は、そうやってたくさん死んでいった。そんなものを四つも飲んだら、いくら悪しき者でも――」

死んでしまうかもしれない、と続く言葉を遮るように、グリーンヴァは高らかに笑い出した。瞳孔の開ききった目を、ぎよろりとアエルに向ける。彼女は両手で赤髪をかき上げて、何本も髪を引き抜いた。

「ステキ……！ 生まれ変わったみたいだわ！ これならアンタを殺せる――！」

「――！」

ほとんど反射だけでアエルが飛び退くのと同時に、地面に無数の赤い刃が突き刺さった。以前対峙したときとは、スピードも威力も桁違いだ。刃に貫かれた作り物の草が、強烈な熱を浴びたかのように炭と化する。

一瞬、アエルは考えた。もしかしたら、本当に、死ぬことが出来るかもしれない――

「どうして逃げるのよ？ 殺されなさいよ。死にたいんでしょう。数え切れない人間を殺して、後悔して、でもどうしようもないから死にたいのよね？ 逃げたいのよね？ イイじゃない！ アタシが手伝ってあげる！」

グリーンヴァの髪が生きているかのように宙に広がり、それらすべてから光がほとぼしる。赤い光がアエルの視界を支配した。何かが爆発したような衝撃が、グリーンヴァを中心として、放射状に炸裂した。

＊

「……どういことですか、父さん」

部屋を訪れたカメロスIIガナドルから聞かされた事実に、ティグレは反論せずにはいられなかった。それでは、計画が台無しだ。

ティグレが組織長に就任して二十余年、ほとんどすべての力を、このためだけに注いできたというのに。

「重ねずとも理解して欲しいのだがな。言葉どおりだ。歌姫はあきらめろ」

杖を持つ手にも、厳しく息子を見つめる顔にも、皮膚という皮膚には皺が深く刻まれているにもかかわらず、カメロスという人間はまるで威圧感の塊のようだった。九七歳になるというのに、その瞳孔は衰えず、老いを感じさせない。

「……ですが、彼女の歌のジュリスが高値で売れることは、間違いありません。以前の大戦とは比べものにならないほどの儲けが出るはずです。もう、歌姫は本部にいるというのに、なぜ止めるのですか」

気圧されながらも、父の目を見つめ返して、ティグレは説得を試みた。彼にしてみれば、これほど状況が整っているというのに、みすみすチャンスを逃せといわれている理由がまったくわからないのだ。

カメロスは、鼻を鳴らした。

「貴様の理解力はいまだにその程度か」

嘲笑し、デスクに座るティグレに歩み寄る。

「先の大戦で、戦力としてはザーパトが圧倒的有利に立っていたにもかかわらず、大勝とならなかったのはなぜだ」

「ヴァストークの歌姫の存在があったからです」

「考えるまでもなかった。だからこそ、とティグレは続けた。

「その歌姫が、いま、我々の手中にあるのです。それなのに、なぜ――」

「ではその歌姫を有しながら、なぜヴァストークは負けたのだ」

「……？」

ティグレは眉根を寄せた。ザーパトが圧倒的有利に立っていたと、カメロス自身がいったばかりだ。

答えなど期待していない、といわんばかりに、カメロスは息を吐

き出した。

「やつは化け物だ。利用しようなどと考えるな。手に負えない力を持てば、必ず不測の事態が起きる。生かしておいてもならん。ヴァストーク側に力が渡っては本末転倒だ。——いいか、戦争で金を儲けたければ、バランスを第一に考えろ。うまく両方を操って、武器と物資を売りさばき、展開そのものを操作しろ。そのためには、強大すぎる力は邪魔なだけだ」

その言葉を、ティグレは噛みしめた。しかしそれでも、納得できない。表情からそれが伝わったのか、カメロスは続けた。

「貴様は歌姫を知らないから、利用できるなどと愚かなことを考えるのだ」

重く、ゆっくりとした口調だった。戦争が始まった六五年前——武器売買に奔走し、コスモスを強大化させたのは、他でもない、カメロス自身だ。

だからこそ、経験として、彼は語っているのだ。大戦時、まだ生まれてもいなかったティグレには、たしかにわからないことなのかもしれない。

「それでも……それでも、うまくやってみせます。こんなチャンスはもう——」

遮るように、ノックが響いた。

ティグレが言葉を飲み込む。

「先約があつたのか？ 良い、どちらにしろ用はそれだけだ」

「いえ、先約など——」

去ろうとするカメロス呼び止めようと、立ち上がる。すぐにもう一度ノック音がして、ティグレはいらいらと声を張り上げた。

「聞こえている！ いったい何の用で——」

「失礼します」

許可もないのに、戸が開いた。そこにいたのは、リストとエイラだった。意外な客に、ティグレは言葉が出ない。まさか、のこのこやってくるとは思っていなかったのだ。

「これはこれは――」

リストに目を合わせ、カメロスは目尻の皺をさらに深くした。杖を突きながら歩み寄り、右手を差し出す。

「リストⅡグランデだな。活躍のほどは聞いている。貴殿の活躍があつてこそ、歌姫に相まみえることができるのだ。礼をいおう」

リストは、その右手を握り返しはしなかった。あとから入ってきたエイラが扉を閉め、その音だけが奇妙に響く。

ティグレの部屋には、必要最低限のものしか置かれていない。彼自身、死角のある部屋というものを好ましく思っていないこともあり、決して広い空間ではない。そこに、コスモス組織長ティグレⅡガナドール、コスモス設立者であり現在も最高責任者を務めるカメロスⅡガナドールが揃っているというのは、リストやエイラにとってみれば、驚くべき光景だった。

そこに二人が合流したことで、部屋は窮屈なほどになった。しかも、そこにいるだれもが、重い空気をまとっているのだ。

エイラは、以前この場所に来たときよりも、よほど緊張していた。身体が汗ばむのがわかる。それでも、あのときのように、何もわかない状態ではない。いまの緊張は、ただ受け身に撒くような、弱気なものではない。

それはリストも同じだった。彼は、差し出された手すら見なかった。目の前のカメロスの、その衰えることのない鋭い瞳を、正面から見据えた。

「彼女を、殺すのですか」

ずっと身分が上の男を前にしても、その声は決して震えてはおらず、むしろ怒りが込められていた。

「盗み聞きか」

「聞こえたのです。生かしておいてはならない、と」

カメロスは笑んだ。真意のつかめない笑みだ。ティグレはあきrameたように椅子に座り直す。カメロスの代わりに、言葉を投げた。

「一介のツヴァイやドライが口出しすることではありません。下が

りなさい。我々はまだ、話の途中です」

「話はもう終わっている」

息子をふり返りもせず、ぴしりと返す。ティグレが何ごとかをいおうとしたが、それよりも早く、エイラが前へ進み出た。

「用があつて参りました。歌姫の居場所を聞こうと思つたのです。しかし……話の断片が聞こえてしまつては、そのまま聞かぬふりをするなどできません」

これは本当のことだつた。何はともあれ、アエルの居場所を聞き出さないことには始まらないと思つたのだ。まずアエルに会い、よく話し合つて、その後のことはそれから考えるつもりだつた。

しかし、扉の前まで来てみれば、聞き捨てならない会話が行われていた。リストとエイラの二人は、そのまま動けなくなり、聞き入つてしまつた。

「……戦争の展開を操作しろ、と聞こえました。これは、どういうことなのですか」

エイラが、固い声で問う。たしかに、カメロスⅡガナドールはそういうたはずだ。そして、儲けろと。

リストとエイラの目が、カメロスを射抜く。ティグレも、この父親がどのように答えるのか興味があつた。椅子に深く腰を下ろした状態で、カメロスを仰ぎ見た。

「そのままの意味だよなあ」

第三者の声が、それに答えた。

声の方向に視線が集中する。リストだけは、その声に覚えがあつた。黒縁眼鏡の少年が、書棚の上で横になって、肩肘をついた状態でこちらを見下ろしていた。

「あなた……」

エイラにも、かすかに見覚えがあつた。ベイスの町で、リストと一緒にいた少年だ。すぐに姿を消してしまったことを、気に留めていなかったが。

「……無礼な客が多いな。おまえの部屋はいつもこうか？」

「まさか。彼にいたっては初対面ですよ」

カメロスの不機嫌そうな問いに、無感情にティグレが答える。クルイークは足を投げ出すと、両手を書棚について、身を乗り出した。「あんたらの悪だくみ、台無しにさせてもらったぜ。気になってさ、ちよつとヴァストークまで行ってきた。港町じゃ、おもしろい噂話でもちきりでさ。海にザーパトの船が出て、攻撃の機会を狙ってるっていうんだ。また戦争が起こりそうだってな」

「それって……」

リストは、素早くカメロスとティグレの顔色をうかがった。カメロスは無表情だが、ティグレは明らかに動揺していた。

ベイスで聞いた噂話と、同じ内容だ。ただ、ベイスで聞いたのは、「海にヴァストークの船がいて攻撃の機会を狙っている」というものだった。

要するに、どちら側も、向こうが戦争を仕掛けてくるのではと怯えているということだ。

「……台無しに、というの？」

静かに、カメロスが先を促す。クルイークはにやりと笑んだ。

「ちよつと一暴れしてきた。んで、戦争が始まるってのは、悪しき者^{イル}がイタズラで流した作り話でしたーってことにしといた。単純だけど、台無しだろ？ あんたらにとっちゃさ」

「なるほど。それしきのこと、といたいのが……たしかに台無しだ」それほど衝撃を受けた様子もなく、カメロスは淡々と返した。おもしろくなさそうに、クルイークは唇を曲げる。もっと悔しがるかと思ったのだ。

「つまり……」

頭をフル回転させて、エイラは情報を整理しようとした。本当はそこまですななくとも、もう答えは出ていた。信じたくない、というのが正しい。

「……戦争開始すら、操ろうとしてたということ？ 何のために？」そう口に出してから、気づく。何のためになどと、愚問であるに

違う。戦争の展開を操作するとまでいったのだ。そうして、儲けるのだと。

「前の戦争のときだって、あんたら向こう側にもこっそり武器売ってたもんな」

「君は悪しき者だろう。なぜ、人間の争いごとに介入する？」

クルイークの言葉に答えず、カメロスが問いを重ねる。しかし、肯定も否定もしなかったことが、それが事実なのだと暗に告げている。リストはぞっとした。目的のためなら手段を選ばない組織だと知っていたが、これほどとは思わなかった。エイラなどは、ここ数日で驚くことばかりだ。自分の所属している組織が——ザーパートにおいて絶大な権力を誇るこの巨大組織が——まさか、そんなことをしているなどと、夢にも思わなかった。

「戦争が始まったら、またあいつが泣くだろうがよ」

急に真剣な声で、クルイークがつぶやく。リストははっとして、彼を見上げた。

「悪しき者である彼が、なぜ戦争のことを気にかけているのか——
フオシール
明確な答えが、やっとわかった。」

ひどく単純な理由だったのだ。だからこそ、彼は動いた。

「……物好きもいたものだ。似たような物好きを、一人知ってはいるが」

カメロスが嘲笑する。それはグリーヴァのことに他ならなかった。一緒にするなよ、とクルイークは眉間に皺を寄せる。

「物好きついでに、いっこ質問してーんだけど」

その表情のまま、ぬけぬけとそんなことをいいたした。質問するような空気ではないことは明白だったが、かまわずに、勝手に続ける。

「そっちのじーちゃんも、タレ目もさ。ふつーにあいつを殺すだのなんだのつつてるけど、どういうことなわけ？」

その問いに、エイラとティグレだけが反応した。

ヴァストークの歌姫に下された裁き——それは、不死であったは

ずだ。ならば、殺すことなど、不可能なのに。

堪えきれない、といったように、カメロスが笑い出す。最初は抑えるように静かだったそれは、やがて高笑いに変わっていく。

だれもが、彼を見た。しかし、だれかが彼に言葉をかけるより早く、部屋全体が大きく揺れた。

「——っ、と！」

クルイークがバランスを崩し、書棚から飛び降りる。エイラはよろめいて、リストに捕まった。その中で、唯一カメロスだけが、杖を支えにして身じろぎしなかった。

メランタワーで経験した揺れよりも、もっと根本から揺れているような感覚だった。一度大きな衝撃があった後も、揺れは収まる気配を見せない。

それは地響きに似ていた。まるで、この建物そのものが沈没するのではないかと思われるほどだ。

どれほど続いただろう。そのうちに、揺れは収まった。

「……なんなの」

ぽつりと、エイラがつぶやく。カメロスはティグレに目をやった。「危険だな。本部にいる職員をすぐに全員避難させる。崩れるかもしれない」

ごく淡々と、指示を出す。ティグレは目を見開いたまま、声を発せられずにいたが、やがてその意味に気づいたようだった。さっと顔色を変えて、立ち上がる。

「あなたは、まさか——！ グリーヴァを遣ったのですか！」

「考えるのは後だ。建物はつぶれても、いくらでも修復できる。この上人員まで失ったらどうなるかわかるだろう」

静かに告げて、クルイークとリストと、エイラの隣を通り過ぎ、扉の前に立つ。開ける前に、悠然とふり返った。

「貴様らは共に来るがいい。不死といわれた歌姫の死の瞬間を、見届けようではないか」

「——っ！」

地面にたたきつけられて、アエルは苦痛に顔を歪めた。すぐに刃が降り注ぎ、身をよじってそれをかわす。体勢を立て直す余裕などない。口の中で言葉を紡ぎ、走り抜けながら結界を形成する。結界が破壊される、その僅かな隙間に、跳躍して迎撃体勢を整える。

しかし、決断できずにいた。そのためらいを逃さず、刃が突っ込んでくる。攻撃のための魔力で刃を破壊して、建物の中に逃げ込んだ。息を殺すが、すぐに建物そのものが崩れ落ちる。

アエルは舌打ちした。息をつくひまもない。

「どうしたの、歌姫さん。さっきから逃げてばかり。死にたいんじゃないかったの？」

空中から、グリーヴァがそう声をかけた。アエルはそちらを見返したが、その向こう側にはすでに空はなかった。投影していた装置が破壊されたのだろうか。天井に亀裂も見える。何がシエルター、とアエルは内心で毒づく。内側からの衝撃には、これほどまでに弱いものなのか。

「おばさんこそ、外見に気をつかってるんじゃないの。髪も乱れちゃって、顔だって怖いし、何よりその身体。膨張しちゃって、みっともないよ」

「口のへらないガキね」

声は怒りを含んでいたのに、グリーヴァはにたりと笑った。その身体は、増幅の魔力に耐えきれなかったかのように、あちらこちらが膨れあがっていた。手足が奇妙に長くなり、関節と関節の間が盛り上がっている。ウィンナーみたいだ、とアエルは思う。

表情も、まるで別人のようだった。瞳孔の開いた目は、一度のまばたきをするともなく、極端につり上がっていた。顔中の皮膚がほお骨で持ち上げられたかのように上向き、笑みの形を作り上げている。口の両端は裂けんばかりに上へせり上がっていた。もはや、美しい、美しくない、の問題ではない。

「いったでしょ。おばさんが殺して死ねるぐらいなら、自分で死ぬ

って」

「アッハ！」

グリーヴァが甲高い声をあげる。それが笑い声であったのだと、アエルは一瞬理解が遅れた。もう、ほとんど表情もわからないのだ。彼女自身、すでに理性などないのかもしれない。

「さっきからオイシイわよ、アンタの感情！ 迷ってるのかしら？ 死ねるかな、死のうかな、どうしようかなって！ イイわね……！ ステキ！」

赤い髪が、生きているかのように波打つ。そのすべてが、アエルに照準を合わせた。

「でもネ、食べてばかりもいられないのよ。アンタを殺したいの、アタシ！」

「……………」

理屈ではなかった。胸の奥からわき上がる嫌悪感に、アエルは眉を歪める。繰り出される攻撃をかわしながら、両の手を合わせた。地を蹴り、空中で刃をかくぐり、グリーヴァに迫る。

「やっと本気になったの？」

心から楽しそうにグリーヴァが笑んだ。彼女が両手を払うと、腕そのものが剣に姿を変える。アエルは彼女の両肩に手をつく、そこを支点にして逆さまに飛び上がった。

それは痛みを伴うものではなかった。しかし、一瞬触れただけの両肩から、力の塊のようなものが流れ込んでくるのを感じた。グリーヴァの腕が、さらに容量を増す。

「なんのマネ？」

「こうするの」

アエルが着地するのを合図とするかのように、グリーヴァの髪がぶわりと舞い上がった。グリーヴァ自身の両肩を向いて、一瞬動きが止まる。

「——！」

意志など関係なかった。赤髪は、二つの束になり、持ち主の肩を

貫いた。

声も出せず、グリーヴァが前のめりになる。浮遊することすらできず、そのまま地面に崩れ落ちた。

「力の矛先を変えるのなんて簡単なの。人間はね、フォシール悪しき者と違って、頭を使うってこと知ってんだよ、おばさん」

横たわるグリーヴァを見下ろす。忌々しげにアエルを睨みつけたが、グリーヴァはまだ立ち上がれないでいた。

「ナニが人間……アンタなんてただのバケモノでしょう」

「いまのおばさんほどじゃないよ」

アエルは片眉を上げて、グリーヴァの前にしゃがんだ。頬杖を突き、変わり果てた姿に目を細める。

哀れむつもりなどない。ただ、ばかばかしくなってきた。いったい何をやっているというのだろう。この悪しき者も、フォシール自分も。

「もうやめない？ おばさんさ、どうしてそこまでするの」

「……………」

グリーヴァは、かすむ視界で、傷一つ追っていない少女を捉えた。増幅のジュリスを四つも使いながら、それでも歯が立たないのだ。力がみなぎっているというのに、彼女は赤子の手をひねるように、いとも容易に自分に勝とうとしているのだ。

「これほどナニかを強く望んだのは初めてだわ」

呟いだ声で、グリーヴァはつぶやいた。それはあまりにも小さなつぶやきで、アエルにまで届かない。もしかしたら、口に出しているという自覚はないのかもしれない。

「アンタに勝たないと、今度こそ見放される……もう一緒にいられなくなる……アタシには、カメロスだけが……！」

どくん、とグリーヴァの身体が波打った。彼女を覆っていた赤い光が、より深い赤へと変わる。

アエルは、この光を知っていた。使役されている悪しき者フォシールだけが持つ光だ。それが濃くなったということは、使役者が何らかの手を加えたことを意味する。

「ア……アア……」

グリーヴァはいつそう目を見開き、絞り出すような声で呻く。赤い輝きは厚い層となり、繭のように彼女の身体を包み込んだ。そのまま、高く高く持ち上げられる。

ひどくゆっくりとした速度で上昇し続け、やがて糸が切れたように、止まった。次の瞬間には、それは落下を始めた。正確には、単なる落下よりもよほど速いスピードだった。アエルがまばたきもできないうちで、グリーヴァは恐ろしい勢いで、アエルの目の前にたたきつけられた。人工の地面に亀裂が走る。

グリーヴァは意識を失っていた。夢でも見ているかのような思いで、アエルは落ちてきたグリーヴァの向こう側へと視線を動かす。予感があったのだ。カメロス、という名には覚えがあった。気づかないままでいたかったのかもしれない。

「役立たずが」

視線の先には、皺だらけの老人が立っていた。その向こう側に、リストとクルイクと、エイラの姿も見える。

しかし、アエルの目には、カメロスしか見えていなかった。様々な情報が瞬時に脳裏に去来する。同時に、思い出される、あの日の記憶。

「カメロスⅡガナドル……」

ティグレに聞いた名を、つぶやく。

アエルは彼を知っていた。

五十九年の年月を経て、面影などないに等しかったが、それでも、わからないはずがなかった。

『裁きを——』

無表情で、そう唱えた彼ら。

彼女を囲んだ四人の術師たちは、口々にいった。

『裁きを——』

『裁きを——』

『裁きを——』

最高位の術師たちは、彼女に裁きを下そうと、彼女を取り囲んでいた。

その中に、当時はまだ若者であった彼もいた。
八つの手が、彼女に伸ばされる。

あの日に、始まったのだ。

この苦しみ。この絶望。この——

「久しいな、歌姫」

変わらぬ声で告げられて、アエルはびくりと身を震わせた。

ひどくゆっくりとした足取りで、カメロスはアエルに向かって歩いてきた。埃を払うような仕草で、右手を軽く一振りする。それだけの動きで、地面に倒れ伏していたグリーヴァが、数メートル先の壁際まで飛んだ。まるで、紙の人形のように。

「十七年間の自由を満喫したのだろう。貴殿に生きていられては都合が悪いのだ。そろそろ、死んでいただけるかな」

「死……………ぬ、なんて……………」

喉が干上がってしまったように、うまく声が出てこない。それなのに、身体中を汗が冷やしているのを感じた。恐怖なのか、憎悪なのか、アエルにはわからない。ただ、この男の目に射すくめられたかのように、動くことができなかった。

それでも、アエルは懸命に声を絞り出そうとした。一步、一步と近づいてくる彼が、ここに来てしまうまでに、いわなくてはと思った。

「…………それを奪ったのは…………死すら、許さなかったのは…………あなたたちでしょう」

「奪う？」

カメロスは両目を細めた。笑いをこらえるような、哀れむような表情を浮かべ、歩を進める。

そうして、アエルの前に立った。手を伸ばし、その頬に触れる。

「まだそんな愚かな思い違いをしているのか、哀れな歌姫」

カメロスの手は恐ろしいほどに冷たく、アエルは身じろぎできない。あの日から唯一変わっていない鋭い瞳に、自分の姿が映し出されているのを見た。ひどく怯えた表情だ。

「我々が下そうとした裁きは、意識のみを残した永久凍結——だが、不可能だったのだ。自分がどれほどの化け物か理解していないのだろう、歌姫よ。どんな術も、貴殿には効かなかったのだ。結果、ヴァストークの歌姫に与えられた裁きは——」

もったいぶるように頬を撫でる。目を見開いたままのアエルに、真実を告げた。

「——幽閉だ。永遠の幽閉。もっとも、十七年前、貴殿は逃げ出したがな」

「……………ゆう、へい？」

カメロスは、左手の杖を持ち上げた。杖の柄を握りしめ、左右に軽くねじる。柄の部分が外れ、ナイフが取り出された。音もなく、杖であったものが地面に落ちる。

「最期だ」

外見からは想像もつかないほどに、恐ろしい速さで刃を振り上げる。しかし、それは宙を切った。クルイークがアエルを抱きかかえ、すんでのところで飛び退いていた。

「おいこら！ そんなんじゃほんとに死ぬぞ」

一度の跳躍で、アエルを抱えたままカメロスから距離を取る。しかし、腕の中のアエルの肢体には、ほとんどの力が入っていなかった。彼女は呆けたように、虚空を見つめていた。

「……………あたし……………」

呻くようにつぶやく。

それならば、どうして、死ねないのか。

どうして、見えるのか、聞こえるのか、消えないのか――

「ちゃんと聞けよ。こいつらがいる限り、戦争は起こるぞ。金儲けのために、情報を操作して戦争起こそうとしてやがった。……アエルちゃん、死ぬのはいいいけどさ、こいつにだけはやられんな。価値が下がるぜ」

クルイークの言葉が、脳にまで届かない。何をいつているのかわからない。クルイークと、再び歩み寄るカメロスを見る。まわりの景色すべてに、死ぬ間際のたくさんさんの命が見えるような気がした。自分が奪った、命の数々。

それならば、自分は、自分の意志で、生きていたというのだろうか。

あれほどたくさんさんの命を踏みつぶしておいて、のうのうと、生きてきたのだろうか。

「あたしは………」

目の前の現実と、記憶とが重なる。何が真実で、何が虚実なのかわからなくなる。どうすればいいのかわからない。何もわからない。

「あたしは――！」

何かがはじけた。アエルを中心として、強大な力が飛び出す。衝撃を受け、クルイークは後方に吹き飛ばされた。完全な不意打ちに防御の術もなく、地面に転がる。

力の風を受けながらも、カメロスはその場に立っていた。変貌した目の前の少女に、彼の身体は震えていた。恐怖からではない。それは、歓喜だ。

「おお……！ 歌姫よ！ 敵と知りながらも、貴様の歌には心打たれずにはいられなかった！ 歌うがいい！ だが私は死なぬぞ！ 私は生き抜いてみせる！」

カメロスは瞳を大きく見開き、ナイフを捨てて両手を広げた。力すべてを受け止めるかのように、身体を反り返らせる。

アエルの全身は、黒い輝きに満ちていた。頭を抱えた彼女の周囲

に、黒い光の渦が生まれていった。それを見る数々の瞳が、遠い日の瞳と重なる。そうだ、いつものことだ——いつものように、歌えばいい。それですべてが終わるのだ。

「あの子、どうしちゃったの？ 本当に、歌ったりしたら……」

昇降装置の影で風をしのぎ、エイラが声を張り上げる。しかし、呼びかけた背中では、こちらをふり返らなかった。リストはアエルから目を離さないでいた。

「……正確には、歌うことで命がすべて消えるわけじゃない。歌という媒体に乗せているだけで、それは単純に魔法だ。事実、彼女の歌を聞いたことのある生き証人は現在でもたくさんいる。彼もそう
だ」

視線はそのまま、リストはつぶやいていた。強風の中で、その声はエイラには届かない。しかし、最初からそれは、ほとんど独り言だった。自分にいい聞かせるように、彼は続けた。

「俺もそうだ。俺も、あの日、聞いたんだ。その歌で、俺は——」

渦の中のアエルの姿と、少年の日に見た歌姫の姿が、重なった。

彼女は歌ったのだ。そうして、自分を、助けてくれたのだ。その時に、気づいた。その目を見て、わかってしまった。

「——アエル君！」

腹の底から声を出し、リストはアエルに向かって歩き出した。立ち止まるつもりも、逃げるつもりもなかった。カメロスの隣を通り抜け、少女に近づいていく。

「君は知っていたんだ！ 君が死んでも、君が忘れても、君が傷ついてても、そんなことで事実が変わらないってことを、知っていたんだ。君は死ねなかったんじゃない、死ななかったんだ。忘れられないんじゃない、忘れなかったんだ。そうやって、どうにかして、償いたかったんだろう！」

リストは気づいていた。不老不死ということに疑いすら持たなかったが、それならば、つじつまが合わないのだ。老いることができないということは、彼女の中で時が止まっているということだ。な

らばなぜ、胎児の状態になることができたのだろう。なぜ、育つことができたのだろう。本当についた傷が自動的に癒えてしまうなら、なぜ、彼女の両親は、そのことについて何もいわなかったのだろう。すべては彼女の意志なのだ。

彼女の意志ならば、知っていた。

遠い昔に見たその目は、自分の目と同じだった。死にたくない願ったリストと、同じ目をしていたのだ。

「君は——！」

黒い渦に触れると、リストの皮膚が引き裂かれた。それはまるで、刃の塊だった。アエルの心と同じだ。触れるものすべてを拒絶する、鋭利な刃物。

それでも、リストはためらわなかった。唇を噛みしめ、息を吸い込んで、両手でアエルの身体を抱きしめた。

「君は、生きていいんだ」

ずっと告げなかった言葉を、告げた。

それは、自分が思い描いていたものよりも打ち震え、消え入りそうな声だった。それでも腹に力を込めて、リストは声を絞り出した。「君はまだ、君の人生を、生きていないじゃないか。楽しいことも、嫌なことも、ぜんぶ経験して、笑ったり泣いたりしながら、生きていけばいい。できるなら、俺は——」

その先はもう、続かなかった。ぶつりと途切れるようにして、リストは崩れ落ちた。最後までしがみついていた指からも力が抜け、アエルの腕に、血の跡が残る。

エイラが悲鳴をあげた。カメロスの嘲笑が聞こえる。クルイークが、何かを叫んでいる。

「……………生き……………る……………?」

瞬時に、アエルの脳に記憶が蘇った。

十七年前のあの日、幽閉されていた牢から逃げ出したあの日、一人の少年を助けた。彼は死を望んでいるのだろうと思った。両親も、友人も、村人すべてが死に絶え、一人だけ残されて、死にたがって

いるのだろうと思った。

しかし、彼はいったのだ。死にたくない。生きたいと。羨ましかった。

生きることがまっすぐに望んだ少年が。

本当は、ずっと、思っていたのかもしれない。それでも、そのとき初めて、彼女は願ったのだ。

「あたしは……」

身勝手だということはわかっている。

許されないということもわかっている。

しかし、死んでも、悔いても、嘆いても、事実は変わらないのならば。犯した罪が消えないのならば。償えることなどできないのならば。

「いき、たい」

ひと筋だけ、涙が流れた。

アエルを取り巻く黒い渦は、いまや地下シェルター全体を覆うほどに巨大になっていた。それは彼女の下にクレーターを作り、壁や床に亀裂を走らせていた。

もう限界だった。

耐えることをやめたかのように、床が抜け、天井が落ちてくる。

作り物の草も、花も、家々も、すべてが埋もれていく。

アエルは、小さく息を吸い込んだ。

自分の膝で血まみれになっているリストの手をそっとつかみ、目を閉じる。

そうして、透き通るような声で、歌った。

その不思議な歌は、ジュリスからジュリスへと感染していくように広がり、大陸中に響き渡った。まるでジュリス同士が共鳴し合い、囁き合い、歌い合っているかのようなだった。歌が止むまでの長い時間、大陸に住む人々は、歩みを止め、仕事の手を止め、いさかいを止めて、大地を包み込む歌に酔いしれた。

やがて、歌は止んだ。役目を終えたとばかりに、大陸に存在するすべてのジュリスが砕け散った。

人々はそれを、歌姫の奇跡と呼んだ。

生活の半分以上をジュリスの力に頼っていた人々は、新しい生活に慣れるまでの期間、苦しい生活を余儀なくされたが、それでもそのできごとを呪いとは呼ばなかった。

呪いと呼ぶには、その歌は、あまりにも純粹で、美しかった。

そうして、月日が流れた。

＊

「ちょっと、どうして苺パフェがないの」

混雑する『カフェ・ジョカットロ』のカウンターで、少女は店員に詰め寄り、不機嫌な面持ちで不満を口にした。

店員は、慣れた調子で、淡々と説明を始める。

「もうしわけございませんが、こちらの地方では苺の収穫ができなかったため、メニューから削除いたしました。新商品のオレンジパフェはいかがでしょう」

「そんなこといっても、前はあったでしょ。あのね、いくら経営者が変わったからって、そういうとこまで変えなくてもいいんじゃないの」

店員は笑顔のまま、もう一度頭を下げる。

「もうしわけございません」

少女はいらいしながらも、結局オレンジパフェを注文する。手近な丸テーブルの椅子に腰を下ろし、頬杖を突いた。

肩よりも少し下まで伸びた髪を耳に引っかけ、長いスプーンを持つ。グラスに差し込んだ瞬間、後ろから声をかけられた。

「ご一緒しても？」

若い男の声だ。少女が手を止める。

返事もまたず、白いコートのその男は、少女の向かい側に腰かけた。

「……まだ答えてないけど」

「せっかくなんだからさ、おにーさんとお話ししようよ」

少女は苦笑した。

男を見上げ、目を細める。

「おにーさん、ロリコンなの？」

その問いに、彼は少し考えるそぶりを見せた。それから、小さく微笑む。

少女の目をまっすぐに見据え、告げた。

「心に決めた女性がいるんだ」

了

裁き（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。心からお礼申し上げます。

『ヴァストークの歌姫』は、2008年2月～3月に執筆したものです。

一度は公開してありがたい評価・感想等いただいていたのですが、公募の為に一度消去しておりました。その節はご迷惑をおかけいたしました。

公募先はアスキー・メディアワークス第15回電撃小説大賞、結果は一次選考通過（応募総数3541作、うち通過が285作）、二次選考通過ならず（通過は88作）でした。

結果を真摯に受け止め、今後の糧にしていく所存です。まだまだの実力不足。精進いたします。

もしよろしければ、感想等いただけると幸いです。
踊って喜びます。

※以前いただいた評価・感想は、ブログへのリンクという形でトップ画面よりご覧いただけます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8618e/>

ヴァストークの歌姫

2010年10月8日13時53分発行